川柳塔

令和三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一二九号

日川協加盟

No.1129

六月号

残暑見舞広告募集

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

巻末の綴じ込み**残暑見舞広告原稿台紙**に原稿を貼付（または記入）してお申込み下さい。

★**個　人**　一口　1／9頁　二、〇〇〇円
　　1／6頁　三、〇〇〇円

★**団　体**　次の四種といたします。
① 1／3頁　六、〇〇〇円
② 1／2頁　九、〇〇〇円
③ 2／3頁　一二、〇〇〇円
④ 1　頁　一八、〇〇〇円

▼**原稿締切　六月二〇日**

川柳塔社

おりひめ☆ひこぼし川柳会
創立記念誌上大会のご案内

締切まで残り１ヶ月です！！

課題と選者（各題２句）

☆「親　　友」☆　松田　夕介　選
☆「手　　紙」☆　青砥たかこ　選
☆「運　　命」☆　大家　風太　選
☆「思 い 出」☆　木本　朱夏　選
☆「かけはし」☆　新家　完司　選
☆「阿　　吽」☆　土田　欣之　選
☆「感　　謝」☆　小島　蘭幸　選

★★ 祝吟：上記７題と別にご参加の皆様から、自由参加で１句祝吟を募集しております。

投句締切　令和３年７月７日（水）消印有効

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、便箋可

参 加 費　１０００円（切手不可・小為替等）

投 句 先

〒573−0095　大阪府
枚方市翠香園町 2−7
藤田　武人・栃尾　奏子
TEL　072−395−5453

現代川柳の集い

小島蘭幸

五月初旬、第7回現代川柳の集いの大きなポスターと応募用紙が届きました。「現代川柳の集い」は、4年に一度、岩手県北上市の日本現代詩歌文学館で開催されていて、日本現代詩歌文学館館長賞表彰式と受賞記念講演、事前投句、当日投句、各選者の披講があります。平成29年10月28日に開催された第6回現代川柳の集いで、私は、事前投句の披講と、一般社団法人全日本川柳協会理事長として、日本現代詩歌文学館館長賞受賞句の読後感を述べさせていただきました。

日本現代詩歌文学館館長賞

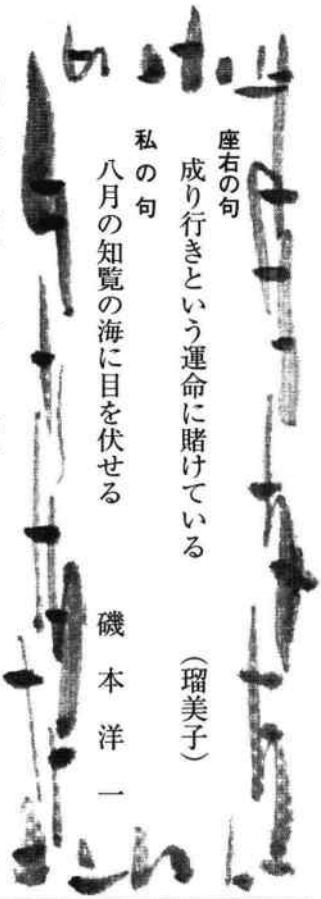
「本賞は平成9年度より4年に一度川柳文芸の一層の発展を目的として開催している『現代川柳の集い』を記念して、『集い』開催年の前年までに刊行された川柳句集の中で、最も優れた作品集を選んで顕彰するものである」

歴代受賞者

第1回（平成9年）森中惠美子「仁王の口」
第2回（平成13年）大野　風柳「定本大野風柳句集」
第3回（平成17年）今川　乱魚「癌と闘う・ユーモア川柳　乱魚句集」
第4回（平成21年）大木　俊秀「満天」
第5回（平成25年）田中　新一「生きる」
第6回（平成29年）梅崎　流青「飯茶碗」

第7回日本現代詩歌文学館・現代川柳の集いは、9月19日（日）に開催されます。日本現代詩歌文学館館長賞は、新家完司理事長の「令和元年」が受賞、受賞記念講演のタイトルは「人間を詠う・自分を詠う」です。私は川柳塔社の代表として事前投句の選者を努めます。

現在、新型コロナウイルス感染拡大により、東京、大阪をはじめ多くの都道府県に緊急事態宣言が出ています。9月開催とはいえ、この状況ではたして…と思うことしきりですが、7月末締切りの事前投句には、多数の応募があることを願っています。一般社団法人全日本川柳協会理事長として他の文芸に負けたくないのです。



座右の句

成り行きという運命に賭けている　（瑠美子）

私の句

八月の知覧の海に目を伏せる　磯本洋一

川柳塔　六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「南紀大引の春」

■巻頭言　現代川柳の集い……小島蘭幸…(1)
謎の六阿弥陀伝説……川上大輪…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
名句選・この一句……(37)
川柳塔の川柳讃歌⑯……木津川計…(38)
西尾栞句集『水鶏笛』……(39)
自選集……(40)
句集の森……児島与呂志…(43)
温故知新……(43)
水煙抄……西出楓楽選…(44)
英語 de Senryu ⑭……吉村侑久代…(63)
誹風柳多留一三篇研究 10……(64)
愛染帖……新家完司選…(66)
檸檬抄「リアル」……石橋芳山・古今堂蕉子共選…(70)

謎の六阿弥陀伝説

川上大輪

先に、誹風柳多留初篇の巻頭句として

〈五番目八同し作ても江戸産レ〉

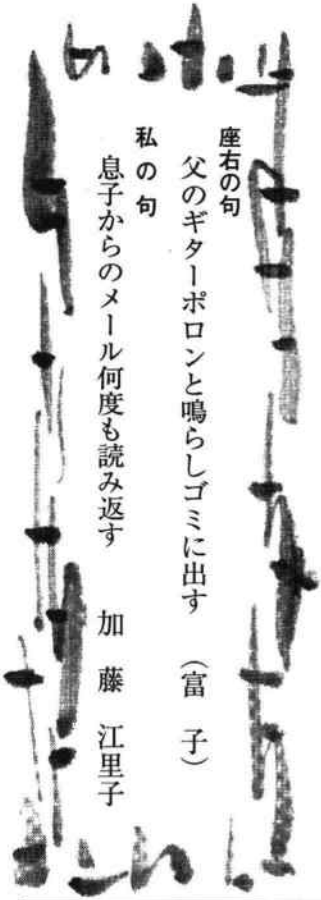
を紹介させていただきましたが、これは六阿弥陀の第五番、上野の常楽院の賑わいを詠んだ句です。（現在は調布市に移転、東天紅の敷地に別堂が設置されている。）

六阿弥陀とは、行基が一本の霊木から六体の阿弥陀仏像を一夜で彫り上げたものといわれています。

この六阿弥陀には次のような伝説がありますが、寺によっては諸説があり、大筋では次の通りです。

①ある長者の娘（足立姫）が嫁いだが、事情があって嫁ぎ先から帰され、娘は川に身を投げ、侍女たちも殉じた。②長者は娘を供養するため諸国霊場巡りに出る、霊木は紀伊国熊野権現で得る。③長者は行基と出会い、その霊木で仏像を造ることを依頼した。④行基は六体の阿弥陀如来を作成した。⑤仏像はそれぞれ別の寺

一路集（「帽　子」……西村哲夫選……(74)
「群れる」……緒方美津子選……(75)
初歩教室「　鳥　」……居谷真理子……(76)
川柳塔鑑賞……早川遡行……(78)
水煙抄鑑賞……坂本加代……(80)
せんりゅう飛行船 ⑱……新家完司……(81)
『麻生路郎読本』余滴 (64)……桒原道夫……(82)
■エッセー（人の世、仮の世に棲む）……月波与生……(84)
■追悼文（吉岡修さんを偲んで）……伊達郁夫……(85)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……(86)
四月本社誌上句会……(88)
各地柳壇（佳句地十選／村上直樹・栃尾奏子）……(97)
柳界展望……(109)
六月各地句会案内……(110)
■編集後記（ひとこと／岸本宏章）……朱夏・憲彦……(112)



座右の句

父のギターポロンと鳴らしゴミに出す　（富　子）

私の句

息子からのメール何度も読み返す　加藤江里子

に安置され一～六の番号がつけられている。

他に二体の仏像を余った木から造っている。一体は娘の遺影を彫ったもので、もう一体は観音像といわれている。

『新編武蔵風土記稿』の第二番の「阿弥陀堂」の項には「かゝる杜撰の寺伝、とるべきにあらず」。〈中略〉「かれを取り是を附会し、又行基菩薩の名を仮りてかゝる妄説を作りしものなるべし」とあり、伝説内容は作り話であると断じているようだが、伝説に異論は付きもの。第三者には諸説が多いほど楽しい。

私の故郷である熊野も、六阿弥陀と繋がっていたとは…。たとえ作り話であっても現代まで伝説として残っているのは凄い。さすがよみがえりの地、熊野だ。

（江戸川柳）

六ツに出て六ツに帰るは六あみだ　水治　樽62

四五番で腰のふらつく六あみだ　柳泉　樽120

六阿弥陀あくる日亭主飯を焚き　柳泉明和五

川柳塔

小島蘭幸選

ひらがなに感謝漢字がでてこない
姑の取説スルーすることだ
夕食後食べないために歯を磨く
大仏に会いたし答貰いたし
キャッチボール楽しく存分にできた
あほやなあも一度聞いてみたかった

大阪市　田中ゆみ子

雨の日を選んで逢いに来てほしい
欠点がひとつあなたを好きになる
雨音を溶かしてふたりミルクティー
長か半しかない賽の目と男
空白は愛しさを増すエッセンス
しなければいいのにキスも指切りも

枚方市　栃尾奏子

侵略の前兵として黄砂降る
こめかみに溜まり始める謙譲語
敵多くなって逆走の毎日

松江市　石橋芳山

鉤括弧語らうこともなく孤独
逆らってみたくてからしマヨネーズ
すりガラス越しのわたしもいやらしい

米子市　成田雨奇

ボツ続き生きているかという電話
CMの子の成長に目を細め
表札のないのがぼくのお家です
袋菓子余ってビールもう一本
空港でハグもしないでやあと子が
がっかりとしてもくれない人ばかり

堺市　桒原道夫

春うらら円をいっぱい描いています
春うつうつあの大鴉さえも
楽器抱いた人には話しかけられぬ
製材所に近づいているスリル
イボガエルとうとう投げた少年よ
ダンプカー昭和は尻を振りながら

笠岡市　藤井智史

君の心にログインをするスパイ
見切りコーナーに飛びつく妻でした
鍼灸師の妻 介護員の夫
お互いが湿布貼り合う夫婦愛
風通し良い財布だなあと思う
人生も愛も句集もカオスです

倉吉市　牧野芳光

昨夜見た夢の続きが出てこない
村雀個人情報てんこ盛り
口きかぬ日々に広がる水溜り
数えるほどの髪をなびかせ闊歩する
古里は眼裏にあり梨の花
ソメイヨシノ人の匂いをたてて咲く

鳥取市　岸本宏章

気の緩み衝いてコロナが生き延びる
延長戦ないのもいいなプロ野球
おもしろい発見があるぶらり旅
乗客は僕だけだった昼のバス
あじさいに土の機嫌を聞いてみる
級友のほとんど遠い星にいる

広島市　岸本清

ウイルスも生き延びるため変異する
私の原動力は好奇心
悩み事熟睡したら消えていた
美酒に酔い宇宙遊泳しています
この一年アベノマスクを見かけない
今が旬そう思わんと生きられん

大阪市　谷口義

明日から歩こうと毎日思う
朝顔を植えた日だけを覚えてる
屋根の上で昼寝しているのは犬だ
これからは未知の世界に突き進む
転けるならもっと真面目に転けなさい
歳なら堂々と言えますおばあさん

桜井市　安土理恵

愛されるかわいいばあちゃんが理想
ショートステイ見てきてからの不眠症
終活を五七五にする悲哀
夫の引出し開けてみる日の来ぬように
不確かな記憶とそろばんをはじく
昨日までたしかにあった笑いじわ

豊中市　きとうこみつ

再婚はまだまだあきらめてはいない
日本語べらべら外国語ぺらぺら
噂話たいてい悪いことを言う
緊急事態解除背中の羽根がスタンバイ
写真捨てても思い出残る元夫
リフレイン巴里が私を呼んでいる

大阪市　古今堂　蕉子

コロナ禍にメンタル鍛え足きたえ
あぐらかいたら才能は嫌われる
ピアソラ百年リベルタンゴに酔いしれる
爪先き立ち良いと聞いたら三日間
私の時計狂うし止まる隠れはる
じいちゃんの遺伝と息子頭撫で

越谷市　久保田　千代

雑菌の中でさらりと生きている
すり減った歯車終章の軋み
あの頃のわたしが生きる懐古談
追伸が手加減のほど物語る
飾らない言葉の中にある深味
恙無き日日てのひらに温める

大阪市　川端　一歩

友は宝妻は神さま仏さま
原爆に竹ヤリコロナには自粛
寂聴さん今日も元気なメッセージ
妻に拉致されて六十年経った
冷戦に丁度よいとこひ孫来る
十指みな顔が違っておもしろい

尼崎市　山田　耕治

合格の子とサッカーの話する
学校の桜見るため遠回り
小遣いでエレキ買ったと驚かす
両方が無口だ犬もじいさんも
娘のメール何か食べたいものないか
仏壇へコロナのことを話する

東京都　川本　真理子

青い青いきれいな津波描いてみる
精一杯明るい花で弔おう
目許似る人形そばに置いておく
やはり取ることにする絹さやの筋
夜になったら会いにいきたいあの桜
身の振り方ばかり考え桜散る

熊本市　杉野　羅天

桜満開淋し淋しと早や二年
コロナ禍に○と×あり五輪かな
陶冶して一人異端を謳歌する
晩節を憂うコロナパンデミック
効率の半席無駄になる座席
阿蘇野焼きついでにコロナ焼くという

河内長野市　山岡　冨美子

巣篭りはつづいて花は散り急ぐ
菌という見えない物の包囲網
カレンダースローなブギで良いのだよ
仏像の憤怒の相よなにを斬る
物忘れこれもわたしの芸の内
いつからかクローゼットはモノトーン

米子市　池田美穂

連休が怖いもうすることがない
暇つぶしの夫婦ゲンカももうあきた
世界中池江璃花子にくぎ付けだ
締切りのカウントダウン鳴り作句
筍に敷地出るなと言いきかす
芭蕉扇あおいで黄砂返したい

三原市　笹重耕三

俺の前にいつも立とうとする影よ
糠床に浸っています老い二人
アメフトの不祥事記憶から消える
母に似て目立たぬ白い彼岸花
貧乏を楽しむ薄味の暮らし
仮置場いずれは処分場になる

鳥取県　斉尾くにこ

お陽さまの機嫌で挨拶もかわる
ひとり言ふっとこぼしてセルフケア
侘助は和菓子屋さんに咲いている
記していく手帳は明日の参考書
楽しくて集う学びという遊び
血管と同じなんだね赤い糸

奈良市　加藤江里子

養老先生書斎に「まる」はもういない
第四波ありきの解除どうなるの
まん防が虚しく響く夜の街
桜咲く少しまあるくなれました
野の花の低き目線に自分置く
よく解る自分に似てる人だから

横浜市　川島良子

喝采を浴びて静かに散るサクラ
白血病からの奇跡に泣く内定
子供の好奇心 大人の恐怖心
ワクチンを二回打ったら考える
自由というリズムの中におくルール
序二段からの復帰ドラマじゃないんだね

岡山市　丹下凱夫

何の芽か知らず小鉢で育てている
人間の絆を破壊する戦車
恋をせよ人愛せよと桜咲く
満開の桜の下に菫咲く
大山を仰ぎ金持(かもち)神社を拝む
大山の麓まで来て深呼吸

松山市　柳田かおる

マンネリを変えてみたくて草をひく
美容室へすこしリセットしたくって
菜の花のピリリッと春をいただく
当たり前だった時計が狂いだす
響かない和音調律しています
足りなくても余るほどあっても困る

堺市　柿花和夫

人柄が伝わってくる駅ピアノ
愛憎の山越えてきた比翼塚
コロナとの戦ヒト科を人にする
礼と義を貫く友に逆らえぬ
家飲みの相手は松鶴師のビデオ
野良猫に名前付けてる車椅子

米子市　吉田陽子

AIに奪われぬよう家事守る
バランス良く拝む神さま仏さま
人間砂漠いよいよマスク外せない
骨抜きにされて浴びてる花吹雪
ホットラインのように柳誌が届けられ
我が儘も言って元気でいて欲しい

香芝市　大内朝子

老いたとて女は女なんですの
チャップリンのライムライトに染みる愛
轉りの節美しいラブコール
ワクチンのクーポン券が舞い込んだ
つぶやきを包んでくれるおぼろ月
蘖のぐんぐん伸びてゆく未来

藤井寺市　鈴木いさお

ワクチンを待つ恋人を待つように
終息を君も待ってるのかポチよ
ディスタンスたとえおしどり夫婦でも
今も貧しいがあの頃は極貧
エラい人偉い仏になりはった
だいじょうぶぼくじいちゃんのまごだもの

大阪市　髙杉力

大根で決まるおでん屋のランク
ふるさとの真下リニアが走るはず
スタンプのハートが招く勘違い
闊歩するミニほど強いものはなし
ゼロ一つとってくれたら考える
深夜メール施設の母も起きている

高槻市　松岡篤

穏やかに孫との対話良い時間
コロナ後の国の財布が気にかかる
黙食のデートもやがて伝説に
老い二人頼りないけど守り合う
照ノ富士根性もんのヒーローに
日本語も話せぬうちに英語塾

大阪市　江島谷勝弘

せちがらい十円玉も落ちてない
一年に6B二本使い切る
ヤバイなあ食べてるだけの自粛です
グッチ好き一度も買ったことないが
私には珍味になったカニとフグ
原発禍十年目でも帰れない

唐津市　坂本蜂朗

蠟燭は燃え尽きたのにまだ女性
家族皆妻の味方で独り酌む
立ち上がる時無意識に出る気合い
女性皆美人に見えている乱視
やれ飲むな食べるな動け妻の指示

唐津市　山口高明

戦争はせぬに軍事費増え続け
睡眠薬代りと聖書読む女性
独り言呟く歳と成り申し
姉上は男まさりと畏怖される
同郷の誼と銭を借りにくる

熊本県　岩切康子

体力の落ち目支える杖と意地
鼾聞きペンを走らす深夜2時
巻爪の痛痛しさを見る無言
美味しいと言われ内心嬉しいよ
遺作品の処理に困り悩んでる

北九州市　小松紀子

老人会名前が嫌で入らない
寝る前のくちテープは欠かせない
はなをくんくんあいさつをしているの
何か変あいさつ返らぬ散歩道
川柳は十七文字で世を収め

札幌市　小沢淳

コロナ太り背筋はピンと深呼吸
三寒四温雪の花見も北ならで
マスク越し病院で会う友も歳
兄弟も豆腐納豆ほど違い
十年の苦節松山のマスターズ

弘前市　稲見則彦

継ぎ接ぎがパッチワークと大手振る
学芸会僕は立ち木のその三で
どの鍵を使えば明日に行けますか
五円玉ぎゅっと握って駄菓子買う
爺ちゃんもマニキュアします保護します

弘前市　今愁女

眉少し引き足すだけの鏡かな
北上のサクラ間もなくひろさきに
プランター用土を買って来 自粛とや
気分転換近間でいいよ五能線
3密なしでじっと見ている西の海

塩竈市　木田比呂朗

曖昧にマスク同士のご挨拶
好いことがあったと日記虚偽記載
仕舞風呂右脳は疾うに眠ってる
竹やりでウイルス退治する日本
巣ごもりの延長のまま梅雨に入る

向い風くるり追い風いい気分
野に咲いて我慢を見せる座禅草
恩返し倍返しでもまだ足りぬ
あと千年だって苦にしない大樹
命の限り旅する心まだ元気

男鹿市　伊藤　のぶよし

さくらもちひとときへやにひろがる香
歩き花見テレビにみつつ桜餅
すみれ咲く春の野とおきベランダに
プランタースカーフのごとすみれ咲く
よいひとのふりをしてますひとさらい

東京都　まえで　とよこ

桜のトンネル心もさくら色
春うらら丸い背が伸びファイト沸く
笑うのが一番ですね福の神
巣ごもりにエールをくれるねこやなぎ
亡き人と会話を交わす春うらら

八王子市　川名　洋子

会うこともかなわず癪な新コロナ
葉桜にまた来年は長過ぎる
晩酌の機嫌へ妻の頼みごと
生い立ちのところどころへ修飾語
アマビエの絵を飾っても効果なし

横浜市　菊地　政勝

治まれば治まったらという希望
愚知を聞く穴になるよと娘の電話
お薬とお酒両立しませんよ
バイエルが聴こえる朝の散歩道
転ばぬよう散歩なさいとお医者さま

上尾市　中村　伸子

センバツに春を実感息を抜く
二年ぶりプレー見守る甲子園
わー春だ友のクギ煮のおくり物
ワクチンまで外食がまんまだ続く
コロナ禍に夢見る故里の磯あそび

朝霞市　前田　洋子

兄に手を引かれて帰る暗い道
胸の内地蔵まつりの灯がゆれる
おちょやんにふと思い出す20・3・13
一か月前の疎開で家族無事
泰と博　御恩我が子の名に貰う

富山市　島　ひかる

遅咲きの子が燃えだした進む道
平日も賑わい目立つ春の山
難民は八千万と聞きショック
明日のこと分からないから食べておく
狭くても楽しい我が家だった頃

可児市　板山　まみ子

名古屋市　山本三樹夫

不況下の株高裏を読んでみる
老木の桜も凜と白く咲く
怖さと疲れそっと抜け出すスーパーへ
コロナ禍で官僚の頭脳が緩む
病床の逼迫リアル悲鳴でる

犬山市　金子美千代

くじ運が良くて町会長外れ
世の中は知らない事で回ってる
つくし摘んだよと子らへ近況報告
この地が好き桜並木の散歩道
日本製ワクチンなぜにまだ出来ぬ

犬山市　関本かつ子

お互いの目は笑っているマスク
鯉のぼりの下でくるくる三輪車
早ばやと出掛けワラビの秘密場所
世の中が荒れても花は裏切らぬ
一年で今が一番好きな春

愛知県　早川遡行

親しい間にも礼儀ありマスク
誰だったかなァ挨拶はしたけれど
長生きはしたい病気はしたくない
街中に住んでぽつんと一軒家
弱いので群れをつくって生きている

和歌山市　上田紀子

青空の大きさ人の愚かさよ
文字見れば性格少し見えてくる
百態の雲生き方はそれぞれに
欲深く五七五に納まらず
どうしても自分を庇う坂がある

和歌山市　柏原夕胡

7月に生まれて寂しがりである
百歳がギネスブックに笑われる
日めくりは余命表みたいでキライ
直線に反発心を持っている
こだわりを捨てると楽になりました

和歌山市　古久保和子

一冊を読み終え葉桜が染みる
さくら前線去って日常取り戻す
各停が止まる私の胸の駅
ガイドブックだけで旅行をするコロナ
柿の種ポリポリゴシップ記事ばかり

和歌山市　松原寿子

輪の中で自分勝手は赦されず
部屋に入ると迎えてくれるぬいぐるみ
歯に衣きせぬ評に思わず燃えてくる
ときめきがまだ残ってる趣味がある
手料理があふれて子等に囲まれる

身の丈に暮らしているが幸せだ
笑顔を見て送る言葉はありがとう
普通ならいいと思える日々である
成績は普通でいいと母が言う
酔うほどに限界ライン越えている

岩出市　藤原ほのか

冬越えのヨモギを摘んで草木染め
タンポポのこぎり葉さえ食べた日よ
ゆるい蛇口ポタリポタリと倦怠期
割り勘のおうち宴会いまひとつ
ぴかぴかのマスクを連れて晴れ姿

海南市　小谷小雪

風媒花ときに黄砂が邪魔をする
机上論大風呂敷を拡げ合う
廃校に遊ぶ鳩やら雀やら
冬眠の覚めた蛙の武者ぶるい
送別の宴で胡坐かくコロナ

紀の川市　山東日出男

冬眠の蛙仰天耕運機
一斉に桜見上げている墓石
花びらの帽子をかぶる村の墓地
桜咲く総理の花見思い出す
コロナ禍に場所取り免除新社員

橋本市　石田隆彦

妍競う桜れんぎょう雪やなぎ
カミさんは花咲か婆か庭に艶
早い遅い開花は桜の勝手でしょ
屈託を折り鶴にして飛んでゆけ
ナンプレという難物に脳すり減らす

京都市　清水英旺

傘寿の今誇りにしとく皺とシミ
大阪弁ずばりが何故か心打つ
転んでもそのままそこでひと休み
大阪の笑い底は見えるが届かない
神戸のお洒落真似てはみるがなるピエロ

京都市　藤井文代

来年も着られますよう服仕舞う
ウイズコロナゆるい絆が増えてゆく
満開の桜バスから観ておわり
何げない味が恋しい若竹煮
桜見て筍食べて花粉症

長岡京市　山田葉子

朝ぼらけひとり芝居のゆきやなぎ
廃校の記念植樹の桜咲く
キャンセルはしない桜の八分咲き
もう一周桜誘うウォーキング
苔だって春夏秋冬知っている

大阪市　石田孝純

大阪市　磯島福貴子

お出かけ用服靴私所在なし
マスターズゴルフ知らぬが偉業らし
夫婦ゲンカだんまり三日終止符を
健診の数値が語る不摂生
涙涙よくぞ復活璃花子さん

大阪市　岩崎公誠

時間かけ悪化している新コロナ
愉しかった思い出のなか生きている
大舞台立つ日に備え鍛えとく
百点はいつも誰かが貰ってる
問題を後にまわして先ず遊ぶ

大阪市　岩崎玲子

一生のこの一年が残念だ
コロナ禍で気力どんどん磨り減らし
鮮やかな色の服着て気を晴らす
弾むもの探しに散歩違う道
万華鏡いつも回して時戻す

大阪市　内田志津子

逝く覚悟出来たここから趣味の日々
来し方を詫びてバチャバチャ墓洗う
平凡が宝と知った癌告知
長旅を終えてツバメの衣更え
密さけてローカル線はまだ佳境

大阪市　宇都満知子

外飲みを自粛の亭主尚無口
バスに乗る二重マスクで本持って
何着も着ないままです衣替え
下駄箱でヒールの靴も欠伸する
怖いです大阪の感染者数

大阪市　榎本舞夢

決算期新規プランが続続と
桜咲く心浮き浮き気もゆるむ
コロナ拡大五輪聖火が走り出す
病気回復五輪出場璃花子ちゃん
コロナ禍に春先の靴買っちゃった

大阪市　大川桃花

笑っとくなるようにしかならぬこと
ひょうきん者に見せているのも処世術
神様は見てはる晩年に期待
ワクチン接種日本の現実見てショック
もうお仕舞と鹿に手の平見せている

大阪市　大治重信

吾が妻が女にもどる琴をひく
結局はおでんが良いと冬の夜
ごろ寝する畳の上にも春がくる
辛口の父が帰りて味噌を足し
躓いた石をそっと隅に置き

大阪市　奥村五月

ノーベルは取るがワクチンまだできず
花ビラの掃除すましてする花見
一発でコロナ止めたらノーベル賞
美しい桜の下にゴザが無い
帰り道知らぬあの世へ呼ぶ閻魔

大阪市　小野雅美

散り際は控えめわたくしの桜
思考パターン変えても同じ着地点
揉み洗い小さな罪が消えました
目は真っ赤笑ってみせる明日こそ
達筆の母にもあった字の乱れ

大阪市　笠嶋惠美

なにげない日々の幸せつかまえる
夢で見る旅行も素敵いいもんだ
最新の電話機使いこなされず
シンプルな電話機にしてほっとする
顔見知りだんだん居なくなる団地

大阪市　金川宣子

脳味噌が働く意欲無くしてる
飴ひとつもらって今日の友となり
アホやなあ手とり足とり教えられ
年一度アイラブユーと四月馬鹿
電線の雀ぎっしり密の春

大阪市　近藤正

親の背に滲む汗見て老舗継ぐ
失敗を糧に活かしてきた盤寿
この頃は飯炊き爺うでを上げ
妻傘寿お互い元気に連れ添うた
馬毛島の訓練基地化許さない

大阪府　坂裕之

何事があったんだろうこの人出
隠さずにはっきり言えば探さない
お花見もマスク黙食二人だけ
迷惑を掛けん程度の我が儘を
良い事は少し遅れてやって来る

大阪市　髙杉千歩

元気です朝の鏡へドレミファソ
白黒をつけないうちが花でしょう
新しいストレスあった九十五
蟻さんを久しく見ない街に住み
食堂へ降りる歩数計つけて

大阪市　田中廣子

熊本城見事な復興目をみはる
噴水に夕日があたり虹を見る
空見上げ腰を伸ばして歩きます
腰痛はいつ治るのか神頼み
痛くても痛い痛いと言えません

大阪市　津村　志華子

三陸を思うわかめのお味噌汁
さくらも散って皐月で映えるB団地
里恋しわらびごはんに豆ごはん
紅させば気恥ずかしいよ九十五
樹木葬も良いではないか花みずき

大阪市　寺本　実

ワクチンを早く打てたと自慢すな
はしゃいでるふりで損得考える
ワクチンも無しで五輪はするという
薄命か私長寿の相がある
豊満と言えば赦してくれますか

大阪市　中井　萠

年齢を重ねて今は自由人
ほどほどに気付け薬のような君
貴方とは答え合わせの出来ぬまま
直球の姑の嫌みについ苦笑
子や孫よ心配いらぬ食べている

大阪市　原田　すみ子

それぞれに夫婦の歴史ふたつ無い
聞く耳は持つイエスばかりじゃないけれど
掴んだけど玉か石かはわからない
もう誰も追わず抜かさずマイペース
思う度笑顔になれる孫快挙

大阪市　平井　美智子

肝心な時に鳴らない非常ベル
三度ほど曲がればみんな過去のこと
七十点くらいで妥協する此の世
エコバッグの底には勉斗雲ひとつ
海までの巨大迷路を楽しまん

大阪市　平賀　国和

残念なり今年も中止通り抜け
戦争よりましとコロナ禍耐えていく
物言わぬ碁会所通い憂さ晴らす
ドラマ見て易しい論語拾い読む
軍の弾圧竪琴響ケミャンマーに

大阪市　宮崎　シマ子

お外へ出たいのにコロナ患者千人も
春だというのに釘煮も出ないホーム食
美容師来て美男美女ができました
老いに拘る本フンフンと読んでいる
ホームに居ても世話をかけずに生きている

大阪市　山本　加お里

足腰をきたえ長生き波にのる
懐メロの昭和元気な顔ばかり
少し距離保ち変わらぬ友がいる
手を合わせ母の口癖ありがとう
住み慣れた我が家で転び医者がよい

大阪市　横山里子

独活よりもタラの芽よりもコシアブラ
今日というまっさらな日を頂いて
羨ましどこへ行くにも杖二人
ブランコに乗る子もおらず世はコロナ
ＬＩＮＥからあなたを捨ててやりました

大阪市　若本安代

たっぷりの時間幸せとも言えず
余分なもの捨てて動きが楽になる
頷いてくれるだけでも嬉しい日
信じれば効いた気がする十薬茶
萌える春やっと五感が始動する

堺市　今井万紗子

ばあばの涙嬉しい時も泣くんだね
しっかり溜めてこっそり寄付し逝きはった
何時か咲くわたしの好きな実を付けて
呟いてもだあれもいないひとりぼち
あと三年高齢免許取っておく

堺市　奥時雄

昔ならコロナ倒産続出か
リモートは故郷で勤務したらいい
さみしさにラインの相手増えてくる
独居には慣れましたかと聞かれても
家事ができるので独居また侘し

堺市　源田八千代

風薫る五月の空に師を仰ぐ
寡黙な少女今はぺらぺらよう喋る
どうでもいい事は忘れるようにする
春耕の色紙絵に亡き叔父想う
収束まで造花で御免墓参り

堺市　齋藤さくら

この頃は夫の母になっている
この本の作者の顔が見たくなる
厳しいがやがて笑えるコロナ去り
助けられ元気な今日に感謝する
本人は自慢してると思てない

堺市　坂上淳司

バリアフリーのマンション暮し終の家
マンションの暮し隣の人知らず
独り居の老いが気になる気密室
孤独死がわからぬマンションの気密
エレベーターのボタン気になるウイルス禍

堺市　澤井敏治

幸せの数だと思う皺の数
コロナ禍に畏友の訃報寒戻り
義理堅い黄砂手ぶらでやって来た
サイフォンがぽこぽこぽこと時は春
レゾンデートル語る一句を詠いたい

堺市　遠山唯教

被災地に春の日差しがもどかしい
疫病の退散いのる二月堂
コロナ去り夜明けの近い朝ぼらけ
愛されて生きていること自覚する
花が散るあとは無情になるだけさ

堺市　内藤憲彦

改札でやっと浮かんだ忘れもの
書いたメモこっそり探す小半日
縄のれん盾と矛とを丸め込む
呑む前に調べる利害関係者
困ったら初心に帰るのが秘訣

堺市　矢倉五月

他人とは思いたくない主治医様
日参をして来るノラの身内顔
生まれ変わって幸せでいて亡母さん
出た杭は打たれたいよな顔してる
見舞状花いっぱいの便箋で

池田市　太田省三

カップ麺各地の味を食べ比べ
すき焼きに霜降り肉があるドラマ
トイレからスマホはここと孫の声
休肝日おやつにそっと洋酒チョコ
飼主の棺の前で伏せる犬

貝塚市　石田ひろ子

心にも栄養老いの好奇心
大声で笑うわたしのエッセンス
レタス剝ぐ若い自分が見えるまで
ちょっと贅沢花屋の春を買いました
川柳が自粛の鬱を掬い取る

河内長野市　大島ともこ

親になり見えてきたこと見えぬこと
消毒と自粛が踊る街の色
打ち勝ってもゼロにはならずウイズコロナ
数独とスマホが自粛リードする
最期まで向かい合えずの親不孝

河内長野市　梶原弘光

オンラインさあ旧交を温めん
我が余生惰性で終わりたくはない
むき出しの闘志諫める土踏まず
ファイティングポーズ解くのは棺の中
小銭なし賽銭箱をスルーする

河内長野市　木見谷孝代

努力は報われるもらい泣きしたよ
マスクなし鼻歌もよし畑仕事
筍はあちらこちらのおすそ分け
若竹煮大好きだったお父さん
再生へ出した絵手紙百枚目

河内長野市　黒岩靖博

夫婦喧嘩生きてる証ご馳走さん
牛すきで一家団欒和み酒
蛍いかのパスタでランチ春を呼ぶ
食い意地はまだ残ってる祝い膳
日に十錠飲んで薬屋儲けさす

河内長野市　辻村ヒロ

表情の豊かさ見える笑い皺
都合により今日は老人らしくする
あれやこれやっと味わう母の歳
デイケアで一週間のおしゃべりだ
身の丈を生きて余生弾ませる

河内長野市　中島一彌

肺の中春の空気に入れ替える
散り際に声を掛けたくなる桜
コロナ禍を奇貨とし進むテレワーク
警戒が緩めば衝いてくる四波
コロナ禍の施設母に会えないやるせなさ

河内長野市　藤塚克三

火の車無事に乗りきる妻凄い
二人暮らし思い違いでけつまずく
大阪弁だじゃれ省くと味気ない
プライドと意地を飾りに頑固爺
新人もお世辞を覚え社に馴染む

河内長野市　村上直樹

着物地のペアのアロハは母譲り
ゼロ金利なのにぱっちり手数料
お若いとの世辞に背筋がまたゾクリ
老練を武器に若さと渡り合う
泣き笑いいくつ峠を越えたやら

河内長野市　森田旅人

夜は独りが嬉しいと寿賀子寂聴わたくしも
桜見て秘仏に会うて吉野山
看破する仏に懺悔蔵王堂
通夜席のように静かなバスツアー
集合にいつも遅れる二人組

岸和田市　岩佐ダン吉

無視されているがそれでも言うている
希望的観測だけど快い
火花飛ぶいま反論の中にいる
しっかりせい　いつも私に言うている
思い込みだった素直に謝ろう

岸和田市　雪本珠子

好奇心錆びない秘訣作句です
割り切れぬ気持が宙に浮いている
思い込み捨てたら視野が広くなる
執着を捨てて心を休ませる
今の幸優しい夫のお蔭です

吹田市　太田　昭

よく喋るきっと寂しい人だろう
自分史は少し汚れた紙に書く
ジャンケンに負けても鬼になりません
よく伸びる爪よお前も気が若い
八十七年の重石少しずつ下ろす

高槻市　片山　かずお

お出かけにマスク財布を確かめる
独り言だれもうなずいてはくれぬ
悪口は呟くだけにしときます
外出自粛ネットサーフィン上手くなる
ジェンダーフリー頭で解っているけれど

高槻市　島田　千鶴子

ランドセルの背押す風の眩しさよ
春うらら軽く口笛吹いてみる
雨のち晴れ乗ってみようか花筏
風を見たよ水面に光る風を見た
ゴルフセットちょっと邪魔だがまだ捨てぬ

高槻市　初代　正彦

巣籠りの今こそできるものがある
パソコンと遊べばすぐに小半日
音もせず刻む時計に急かされる
生真面目に叩けば尽きぬ綿埃
台所へお掃除役という出番

高槻市　富田　保子

その笑顔見れば分かるよ合格が
桜咲く私のドラマ出来てます
なにわっ子お世話しすぎでスミマセン
人の所為独りになれば身に染みる
ハイチーズこれがまさかの遺影とは

高槻市　原　洋志

頼む方も断る方も嘘を吐く
ＡＩに表情までも見抜かれる
慣らされてやっと覚えたゴミ仕分け
後期高齢元気な脚で立ち向かう
認知症の入り口附近徘徊す

高槻市　安田　忠子

コロナ禍で太りマスクが手放せず
慎重に歩き過ぎたか派手に倒け
肩痛く揉んでもらってより痛い
桜もち桜花らんまん匂いして
夕飯時何食べたかな朝と昼

豊中市　上出　修

団塊が駆けて上がった成長期
また自粛万策尽きて店閉める
クリーンと言われ慌てるガソリン車
ｉＰＳに不老長寿の夢託す
文春の記事見て野党動き出す

豊中市　藤井則彦

温かい声には猫も目を閉じる
老いの坂越えればあとはマイペース
もう一人の鏡の僕に挑む日日
苦髪楽爪仲良く伸びる八十路坂
失敗を吐き出し子にも教え乞う

豊中市　松尾美智代

検査検査心配事が増えてゆく
神さまの配慮休みを下さった
さくら吹雪の中で涙が止まらない
自分鍛える先に安らぎ待っている
ひとつひとつ柵を解き老い深む

豊中市　水野黒兎

人の来ぬ山にもさくら咲きそろう
さくらさくらあの人は咲き彼は散る
湯けむりを添えて有馬のさくら咲く
日記帳また空白の家籠り
鍵っ子はママの帰宅に宙を飛ぶ

富田林市　片岡智恵子

罪ひとつ抱いて余生と手をつなぐ
夢一字老僧の墨生きている
嘘つきの本当の嘘探さねば
おとしより私かな知らん振りする
フレッシュマン紺の紳士に様がわり

富田林市　中村惠

ティーカップ春のポエムが転げ出る
空想の翼休める雲の上
ありふれた日常わたしには宝
これからを歩くわたしに応援歌
肋骨私守って無駄がない

富田林市　山野寿之

黄や白の菊に囲まれデスマスク
レシートがアリバイ残す場所時間
集団のカラス不気味なヒッチコック
ありがとう心が温い杖の腕
バイクの子見送る母の気いつけや

寝屋川市　伊達郁夫

いい泡だいい汗かいて来ましたね
春だから少し話が長くなる
褒めなくていいよ一人で咲いてます
自分しか知らぬ記念にバラを買う
妻の目を盗んだ頃は燃えていた

寝屋川市　冨山ルイ子

桜花爛熟心ゆたかな春の日日
まなうらに桜しっかり収めとく
九十歳もうだろうかまだだろか
まだまだと娘の手助けをこまごまと
娘夫婦日本一と褒めている

寝屋川市　平松　かすみ

花咲いて配る友あり五六軒
Vサイン眼科でもらい次は歯科
三婆が比べ合うてる歩数計
目眩いして一日たった七十歩
手の甲の皺を集めて見るアート

寝屋川市　森　茜

役所から封書さくらは満開に
電話きらい手紙大好き花の下
ショール一枚花冷えの肩ひき寄せる
春霞わたしこの頃とんちんかん
通り雨わあっと泣いていきました

羽曳野市　磯本　洋一

満天の空見上げれば母の顔
味噌汁の祖母の味付け星二つ
傘寿来て家族本人皆忘れ
不用品家にないねと妻覗く
鯉幟筍の中で空の夢

羽曳野市　宇都宮　ちづる

シューアイスも買えた今日の三〇〇〇歩
バスケ部の孫が壊してきた眼鏡
一センチ根元白髪に老いを見る
へそくりの諭吉そろそろ世に出そう
三日目に家中替えるカレンダー

羽曳野市　徳山　みつこ

失敗は次の伸び代風みどり
日なたを追って育てている豆苗
亡母に子に育ててもらいやっと母
怖そうだけど話せばとても温い人
ぼおとしてるが儲けに聡くいい男

羽曳野市　藤原　大子

発想の転換せよと新コロナ
私と同じ思いの句に出会う
丸くまるくなれと諍い遠ざける
熟睡のただそれだけで多幸感
忘れたいフラッシュバックする記憶

羽曳野市　三好　専平

コロナ下で生前葬をすませとく
ワクチンはあるとホラ吹く菅首相
ゴタゴタの上に後手後手もう飽きた
ただ酒はいくら飲んでも罪にせず
手の甲に暗証番号書いておく

羽曳野市　吉村　久仁雄

反戦の意志むき出しで叫ばねば
仕事終えシェフがかき込む梅茶づけ
実力を知って狙いは超二流
敗者のぼく助け起こして桜散る
もの静か肚が座って動じない

東大阪市　北村賢子

花ばなに癒やされ日日の家ごもり
巣ごもりの酸素不足の差し向かい
アニマルとお笑い番組見る自粛
家ごもり投句句会は生きるはり
散歩してコロナ収束神詣で

東大阪市　佐々木満作

苛立ちをコロナの所為にしてぼやく
巣ごもりで小遣いタンス貯金する
目を見ればマスクの裏にある決意
今朝も無事ご先祖様に手を合わす
公僕の驕り初心を顧みず

東大阪市　西村哲夫

世直しの待ち人夢は夢のまま
仁王門呼び合う事の無い二人
矯め直し母は夜中も起きていた
朝に読むお経新聞母の顔
やさしさは夕日の彼方涙する

枚方市　谷英也

まだ若いスマホ操る八十路です
投句メポストに入れて晴れ晴れと
コロナ禍で寂しかろうに桜たち
返事せぬ眼鏡呼びかけ歳を知る
ほのぼのと絵文字が癒すメールです

枚方市　藤田武人

一線を退く老兵の涙
肩の荷がこんなに重たかったのか
思い出の夢は勝手に自分色
白と黒いつも自然に生きている
簡単に言うが出来ない努力です

枚方市　藤村亜成

振り向けば居ると信じて前歩く
アルバムに納まる人となる別れ
僕が死に地球が死に太陽も死ぬだろう
頭の中の引き出しは整理されてない
新札に変わると羽根が取れている

枚方市　山口弘委智

春うらら大きくなれと児を挙げる
盛り上がるやんちゃ話や団欒日
手さぐりに歩む人生甘くない
誕生日蒼天という贈物
時雨とも通り雨ともパラダイス

藤井寺市　太田扶美代

ナフタリン母の名残りのそこかしこ
忘れ物一つ恙ない一日
話すのが惜しい失敗談がある
砂糖たっぷりのコーヒ亡父の味
さすがと思う正論に酔うている

藤井寺市　髙田　美代子

耳栓をしても聞こえてくる内緒
浮き雲のひとつに乗って見る下界
溜息がふうっマスクの中である
再生紙ですと態態書いてある
結局は啼かず翔ばずのままエンド

藤井寺市　吉田　喜代子

作句するさてあめ玉をぽんと入れ
怪我をして人指し指の大切さ
亡義母の介護哀しさ辛さ知る事に
誕生日今日はメイクもしっかりと
衣食住たりても哀し籠の鳥

箕面市　大浦　初音

宅急便で誕生祝届けられ
夢よりも目的を持ち前を向く
日本の御辞儀コロナ禍の世に適ってる
墓参りすれば心が軽くなる
逆らわず水の流れに添うてみる

箕面市　酒井　紀華

人の道そしてそしての接続詞
堅い土割って咲きます野のスミレ
春ランの子孫繁栄ひろがる根
数独ののこりの枡は未解決
姫鏡台裏もおもてもお見とおし

箕面市　出口　セツ子

いざと言う時は頼りになる息子
干渉はせずに見守る難かしさ
どうにもならぬ事は悩まず生きている
亡き父母の淋しさ解る年齢になる
適当な距離でほど良い頃に会う

箕面市　中山　春代

祖母を恋うジャンボサイズのよもぎ餅
家飲みの窓を桜がのぞきこむ
○○○マスクで翳む視力表
春眠をせっかちな蚊に破られる
たっぷりとあるのに作る布マスク

箕面市　広島　巴子

亡友の絵のお釈迦ほほ笑む花祭り
衣替えサイズ合うのを選り分ける
ワクチンの数はともかく入荷する
まん防にただ粛粛と粛粛と
ランドセル跳ねて手を振る一年生

八尾市　寺川　はじむ

隣国に手ぬるい国と読まれてる
握らして口止めをしたはずの孫
お若いと言われてマスク外せない
シャワーして今日の未練を吹っ飛ばす
滑ったギャグに孫が愛想の顔つくる

八尾市　村上ミツ子

テレビで済ませた今年の花見吉野山
眠れないときにはずっと起きておく
我慢がまんといつまで続くがまん
子とけんか偶に本気になっている
わだかまりとけて微笑み合う二人

大阪府　米澤俶子

今日からはひとり芝居の幕が開く
冷蔵庫に夫の好物が残る
蘖に明日への生きる力貰う
自分なりのルール見つけて百目指す
怖いのは自分自身の見えぬ時

神戸市　上田和宏

古日記見つけ時計が動き出す
外に出よう五月の風がお待ちです
空家にも春を知らせる椿咲く
明日の平和今日を続けることですよ
八十路坂世間の風が凪いで来た

神戸市　奥澤洋次郎

怒っては負けとは知れているけれど
なっちゃんの生家他人の手に渡る
虫取り網知らず蝶々舞っている
にこにこと近付いてくる税務官
せめて気軽に入りたい喫茶店

神戸市　斎藤隆浩

指名手配街中みんなマスク顔
三ツ星より赤提灯の冷や奴
給料日ペラリ一枚明細書
オークションまさかまさかの五億円
ワクチンと変異株との知恵比べ

神戸市　敏森廣光

令和三年心に沁みる空の青
梅も桜も今年も咲いて意地見せる
つらい嘘ついたら君に笑みもどる
不満も愚痴もたたみ込んでる胸の内
外出は病院だけで日が暮れる

神戸市　冨永恭子

王道を駆ける安定とマンネリ
牡丹より好きと芍薬にささやく
順調に眼鏡かけたりはずしたり
保存食田舎ぐらしの智恵を知る
カート押す母は十歳若く見え

神戸市　能勢利子

孫植えたアーモンド二十輪も咲く
二階から近所の桜見て花見
母と来たスズランの花咲きだした
四月生れの母が苦手な夏が来る
百歳までは生きたくないという百一歳

神戸市　松倉正美

つい手が伸びるレジ横に積む桜餅
目が合った生簀で泳ぐ桜鯛
お役人羽目を外して大失態
老害と言われぬように貝になる
8時で店追い出され路上飲み

神戸市　山口光久

カラフルに庭を彩る木の新芽
葬式の形を変えていくコロナ
川柳を妻が始めて息が合い
鉢植にされて泣いている野草
身の丈に生きる鏡が監視する

神戸市　山口美穂

口中に春をひろげる木の芽あえ
ねる前に飲んだお水に起こされる
コロナニュース日々ストレスが嵩を増し
長電話会いたいねえでやっと切る
しあわせなコロナを知らぬホーホケキョ

明石市　糀谷和郎

赤ぎれの両手が摑む春の午後
テレビ音でかいと孫に叱られる
分かってるくせに好きかと聞いてくる
過ぎし日日綿花のごとき日向ぼこ
ビバルディ右脳をα波がめぐる

尼崎市　永田紀惠

平和呆けコロナにバカにされている
後戻りするの嫌いなスニーカー
賞味期限など気にしない戦中派
タラレバで生きのびて来た半世紀
時として掛かってみせる妻の罠

尼崎市　藤井宏造

耐えがたきほどでないコロナの自粛
久し振り飲みに行ったら貸店舗
どうしてもあと一杯が欲しい夜
晴れるのは時時だけどでも夫婦
百態の風に叩かれ生きている

尼崎市　藤田雪菜

思い切りジャンプ出来ない骨密度
全自動それでも人は忙しく
気に入ったピッタリの靴安く買う
食材の表示日本は安堵する
記憶力おちカレンダーメモ代り

加西市　山端なつみ

マスターズリアルタイムは胃に悪い
重圧を背負い沈める十八番
松山快挙実況アナの涙声
一礼が世界へ伝播日本人
グリーンジャケット仮のサイズを着る王者

川西市　山口不動

啓蟄や気をつけなされコロナの世
末孫が妻の背越える新学期
猫丸く縁側にいる春彼岸
千兆円皆で借金恐くない
遺影撮り遺言作るコロナの世

三田市　足立つな子

気くばりのゆれる思いのくり返し
饒舌の身の程知らず浮き沈み
ノーベル賞もの育毛剤の研究者
治まらぬコロナイライラ事故多発
子が巣立ち御近所さんもひっそりと

三田市　上田ひとみ

どうしてもしんどい方へ行く息子
父さんと母さん少し疲れて来ましたよ
強い人の後ボチボチと歩きます
去年とはやっぱり違う桜咲く
希望とか夢とか持っていなければ

三田市　大西重男

句作りの時間あり過ぎ一歩出ず
週刊誌放つ密偵世を暴く
この頃の届く郵便役所だけ
滑舌も鈍ってきます巣ごもりで
鍋物を一人で食べる無粋者

三田市　尾﨑一子

まつり消え神も男もうなだれる
ひとり立ち孫の覚悟にのし袋
鉛筆を持つとこころも若返る
ひらがなで一句楽しむ筆の文字
夏野菜こころの種も蒔きましょう

三田市　九村義徳

自分らしさ大正ロマン大はやり
ライバルのセンスの良さに負けました
美意識が邪魔しジョークが分からない
大臣はグレーのスーツよく似合う
老いてなお夢追う心忘れない

三田市　多田雅尚

対面じゃ言えぬ事でも書くブログ
散歩には愛犬までもするマスク
片減りのスリッパ左右履き替える
クオータ制導入拒むのは政治
ディスタンスばかり気になり花も見ず

三田市　谷口修平

買い物にストレスの種ついてくる
B級で満足できる俺の舌
廃炉処理吃水線が見え隠れ
通帳はしっかり握る認知症
離農とも知らず田植えを待つ蛙

三途の川あなたと渡るために待ち
虹の橋横目で見つつ夜叉と棲む
春風に呼び止められた戻り寒
変異するコロナがするり逃げをうつ
黄昏時亡き人を待つ戻り橋

三田市　野口真桜子

ワクチンの注射の針が長すぎる
我慢比べ介護する人される人
渋滞で気付く道路の傍のごみ
お土産のお菓子の封が開けられぬ
年寄は嫌われてると気付かない

三田市　福田好文

今日もまた貸切りでした路線バス
あれ以来眠ったままの三つ揃い
昼間から独りで呑めるいい蕎麦屋
頑張れとハッパをかける万歩計
自粛してコクリコクリと日向ぼこ

三田市　堀正和

スプーンから零れる程の幸福度
屑籠ではかる作句の好不調
シャボン玉みたいあっさり逝けたなら
マスクした懇親会はお通夜だな
松山のVひさびさの日本晴れ

三田市　村田博

リバウンドに怯えみんなでする自粛
家時間増えて用事は捗らぬ
孤独癖575が寄り添うて
コロナ禍も季節の花を愛でる幸
世界中一喜一憂する五輪

高砂市　松尾柳右子

黄斑変性で世の中半分見て生きる
洗濯も掃除も済んで茶を淹れる
淋しさよ男は一人酒を飲む
太陽の熱はいつまで保つのやら
気が付けばべったり妻に頼り切り

宝塚市　丸山孔一

好きな歌ふさぐ心の窓を開け
晩酌の切れた夕餉の重い箸
転んでも起きた自分をほめてやる
重い荷を酒が一瞬軽くする
深呼吸わたしを少し入れ替える

丹波篠山市　北澤稠民

憲法と妻に寄り添い生きてます
繁華街人はカメラにさらされる
渡り鳥みなへこたれぬようやるわ
生き生きて治らぬ薬また一つ
釈迦の手に遊んでいても無神論

丹波篠山市　酒井健二

丹波篠山市　長谷川　善　輔

家の庭何の花やら変異株
コロナ禍や天気晴朗金欠病
猫と顔見つめ合ってる日々自粛
ムスカリのごとくつんつん新入生
実は今予備日使って生きている

西宮市　緒　方　美津子

あのおだやかな日日返るのだろうか
鶯餅母の好物供えます
今年のさくら殊の外いとおしい
ルビの要る名前ばかりの新入生
こうなれば投句の会を楽しもう

西宮市　亀　岡　哲　子

咲き急ぐさくら老樹のあでやかさ
バラ園の花よ風よと自粛する
ゆるキャラも暇持て余す春なのに
ポリポリと知恵湧く音の花林糖
長生きをしよう想い出増やしつつ

西宮市　福　島　弘　子

青い鳥連れてスキップ孫が来る
市民農園ヒヨのつついた春キャベツ
盛り上がらぬ聖火リレーがゆるゆると
百歳の出番待ってるベレー帽
タケコプターついた帽子のほしい孫

西宮市　福　田　正　彦

日日変わり人も自然も生きて居る
痛みには思考能力遮断する
病窓の桜満開退院日
平和だなあ戦中防灯ふと思う
削ぎ落とし沈まぬ心鍛えてる

南あわじ市　萩　原　狸　月

余裕ある欲で楽しむ宝くじ
二番手で追う足音にある自信
友に曾孫うちの子はまだ一人者
産んだだけ食わしただけを子に詫びる
バッカスに頭を下げて縄のれん

奈良市　宇　賀　史　郎

ババ抜きで狡さ学んでいる幼児
焦点を暈しやんわり自己主張
夢一つ捨て二つ捨てまだ夢を
悔い数多忘却という助け舟
是是非非の女神と信じ五十年

奈良市　大久保　眞　澄

ワクチン接種に予約という関所
在宅編集編集長はスゴすぎる
そこのけそこのけ老人カーが行く
焼き芋もケーキも敵で大好きで
コロナなどどこ吹く風の若い声

奈良市　高橋敬子

予定変えず予報どおりの雨に遭う
カーナビのわざとのような細い道
傘の列はずれず花の中進む
梅林の土ほくほくと靴包む
連翹や椿浄土の春に居る

奈良市　山本昌代

太陽の優しさたんぽぽが光る
薄闇の平和うっとり見る桜
桜さくら小鳥のこえも嬉嬉として
密やかにこの元気さを卒寿まで
張り合った雑巾絞り孫互角

生駒市　飛永ふりこ

呆れるほど春眠脳も目覚め出す
古稀すぎて好感度など如何許り
一服のお茶に安穏漂って
コロナ増我関せずの金魚たち
温存の力漲る花水木

香芝市　山下純子

プロポーズも親紹介もオンライン
TV画面聖火が走るわが故郷
雑草にも名前と生きる道がある
あの人にはきっとシッポが付いている
この母にこの娘ありごもっとも

奈良県　安福和夫

卒寿越えなお矍鑠の師を亡くす
めざましい八面六臂惜しまれる
師の脳裏いつも被爆の学友が
落手した寄稿奇しくも絶筆に
遺稿には師の温もりがまだ残る

奈良県　谷川憲

目を閉じれば故郷はいつも潮の香に
踏まんといて晩熟の私芽だすとこ
たくさんの命いただき生かされる
塩漬けの株が化けると信じてる
弟の安らかな死にただ涙

奈良県　中原比呂志

殺処分アウシュビッツに似た悲劇
黒潮の自由は遙か生簀中
結婚も葬儀も飛び火静かなり
散りどきを逃がし老害とも言われ
ややこしい世間で二キロの生活圏

奈良県　中堀優

過疎の村川柳友に暮らす日日
老いからの未知の世界へ迷い込む
心中の氷がやっと溶けだした
赴任地へのバックミラーに妻の顔
自宅でのストレス外で削ぎ落とす

奈良県　長谷川　崇明

油断大敵隙をしっかり突くコロナ
つくづくと世界一つと知るコロナ
スケジュール中止か延期花曇り
マスクでもやはり一度は見る鏡
ポケットの握り拳を黙らせる

奈良県　渡辺富子

花吹雪浴びて想い出語り合う
駆け抜けてはるかに望む花浄土
アングルを変える眼鏡で見るまこと
回復のきざしかぽっと友の笑み
何もかもごり押しをする多数決

竹原市　岩本笑子

ちょっとだけ温かくなり蒲団干す
一心に編む日曜日の午後よ
バラ一輪私の前に咲き続け
でもそれは私の事です生かされる
薬十錠毎日飲んでいる仕事

三原市　鴨田昭紀

拭っても消えぬ昭和の蜃気楼
正面に飾られ無視をされている
好きな人だけに投ずる変化球
運命に指図をされながら生きる
微震にもまだ幻想が付きまとう

岩国市　上村夢香

うぐいすに目覚めはぱちり里の宿
応援のチーム連勝進む杯
旬の香をまずご仏前味見請う
乗り遅れひとりとぼとぼ月の夜
さりげなく別れを告げていたなんて

宇部市　平田実男

地下足袋がとっても好きな土踏まず
いい人と言われ仮面も疲れ気味
宣誓の声を天まで届けたい
この野菜が隣近所の潤滑油
親の敷くレール外れたのが出世

防府市　坂本加代

ムダ金が心の大地太らせる
声かけに応えてくれる友がいる
どこにでも転がっている新コロナ
ブランクも体覚えた技がある
マスク顔姿かたちにご挨拶

鳥取市　池澤大鯰

激辛の強さを競い見得を切り
ハンディーを貰ったつもりいつも負け
荷物になるそれでも欲は同居する
沈黙が炎を内に抱えこみ
大樹あり寄らば昼寝にちょうどいい

鳥取市　奥田由美

デリバリーの恩恵がある隣町
信号もなくコンビニに徒歩二キロ
給付金で買った投資の価値下がる
ワクチンの接種でバレた若作り
かかりつけ医が軽い虫歯は先送り

鳥取市　加藤茶人

孫がする事は可愛い事で済み
俺だけは楽観論の鼻づまり
高いからダメダメ安くても買えず
水弾く事も忘れた五十肩
理性でも無いよ損得でも無いよ

鳥取市　岸本孝子

食べなけりゃ太る訳などないのだが
あの頃を思って食べる白いめし
無いない尽くしから始まった新所帯
分相応無い物ねだりなどしない
農に生き土の匂いの父母だった

鳥取市　倉益一瑤

桜ひらひら夢の続きを追っている
わたくしの甘さを突いて来る夕陽
四捨五入されてはならぬ背伸びする
鐘打てど私の想い届かない
負け犬の尻尾にもあるプライドよ

鳥取市　田賀八千代

繰り返す母の話は子守唄
初恋も別れも知っているベンチ
本音言う前に逃げ道捜しとく
失言を取り消す呪文あれば買う
心拍数増えて内緒がバレそうだ

鳥取市　棚田大

最大の幸をつかむも夢だった
今日もまた高い青空元気くれ
わめく子もコロナ情報じっと聞く
早桜こわいコロナ禍忘れさせ
物忘れ聞いただけでもドキッとす

鳥取市　谷口回春子

諦める心の隅に未練の香
服装が夫の価値を値踏みする
午後三時おやつの後に待つ地獄
拘って拘り抜いて掘る墓穴
最大の爺の弱点孫四人

鳥取市　永原昌鼓

百までは自分の足で歩きたい
玉手箱開けぬに髪はまっ白け
K点を越えて晴れやか鳥人間
的中率高くなったな天気予報
最高の褒め言葉です勝ち名のり

鳥取市　中村金祥

早咲きの桜へ気持ちまではやる
合格の御礼しっかり神に告ぐ
薔薇の花活けて華やぐ一人部屋
ホラ吹きがマスク付けたら黙り出し
家電まで古希か次々くたびれる

鳥取市　夏目一粋

嘘ついたことなどないと言えますか
喧嘩して時どき生気もらってる
ゴキブリの吐息を聞いている深夜
わたしより賢い人は避けている
時々は時間を止めて飲んでいる

鳥取市　副井ゆたか

手術する不安を抱いて家を出る
コロナ禍で入院規則厳し目に
両腕にリストバンドの手錠感
点滴がポツリポツリと小言いう
手術後は日にち薬が心地よい

鳥取市　福西茶子

良い人生だったとニコリ向う岸
田舎にもドンと来ました変異株
明日の服揃えて朝は気が変わる
お日様は真上二度寝の愉快夢
ウグイスの下手な初鳴き聞く布団

鳥取市　前田楓花

隠し事出来ない質で生真面目で
オムライス私の味に飼い慣らす
天下取る望み捨てない出世魚
日によって変わる痛みの膝が泣く
離れたらあなたをもっと好きになる

鳥取市　山下凱柳

物忘れ年の所為だとしておくか
記憶力落ちて現実受け入れる
6Bで心の機微を書き残す
富士額に見目麗しいマスク顔
宣言解除喜び出かけコロナ遭う

鳥取市　吉田孔美子

黒い噂はどうだ白い館だ
猫とつばめニューフェースたちの攻防
せめてせめて話してみたい渡り鳥
渡り鳥よコロナも連れて行っとくれ
花びらの泪で送る渡り鳥

鳥取市　吉田弘子

健診に生きる喜び教えられ
今年また短く切ったズボン丈
しりとりをしながら手足の運動
観光慣れした鯉口を開けて待つ
老人会番付表は関脇だ

倉吉市　猪川由美子

先の見えぬコロナ収束暗い世だ
開催の不安抱え聖火リレー
総選挙コロナ下でいつやるのかい
おうち時間増えてお金の溜まる人
休場続きここらで辞めればどうです

倉吉市　岡﨑美知江

思い出を風と遊んで立ち直る
献血車若くて太い腕に笑み
柳腰妹だけが母に似た
残り火がさそう女の底力
ハイチーズ心の底まで写ります

倉吉市　田中紀美恵

楽をして地球温暖つけが来た
コロナきた地球壊滅さけたいな
川柳で賞をいただき励みなる
負け犬がわいわい騒ぐ国会か
私の余生貧乏で終りかな

米子市　伊塚美枝子

葉桜でも女同士は花咲かす
花吹雪舞うゴルフの手止めしばし見る
ゴールポスト狙う老人みな真顔
卒業ソング時代の流れ歳を知る
愚痴くらいいつでも聞くと送り出す

米子市　後藤宏之

ときどきは居眠りをして暇つぶす
ユーモアをタイミングよく出すセンス
深い溝孫が来るまで埋まらない
あの人のうっかり仲間うちのこと
バースデー財布気にせず食べて飲む

米子市　後藤美恵子

スター気取り花吹雪あび散歩する
グラス合わす音が遠退き一人酒
自粛中せめて廊下を往き来する
巣立つ子の荷に針箱を入れておく
庭先を通る野良猫情が湧く

米子市　竹村紀の治

今だから笑える染みが胸の奥
ドックから脳の輪切りのお墨付き
お祝いもお詫びのときも一升瓶
雨の日は忖度をする万歩計
指笛の言いたい事は何ですか

米子市　中原章子

リズムある早寝早起きして暮らす
締め切りに追われ退屈程遠い
自粛中弱らぬようにストレッチ
池江さん奇跡の復帰お手本だ
ありがとう橋田ドラマの幕下りる

米子市　野川宣子

コロナ禍も芽吹く準備をしてたんだ
太っちょも小粒の孫もいとおしい
失敗が増えておろおろ老いの背
花の下病院通い夫婦して
ばあちゃんの安定剤は昼寝です

鳥取県　門村幸子

エライコッチャますます涙脆くなる
アパートが建って目立たぬ局となる
当たり前だった「元気」が遠ざかる
コロナ下の読書三昧苦にならず
頼り癖しっかり気骨要る老後

鳥取県　竹信照彦

白い枠そろり外して春の海
風車頭の中で回る音
老化する骨に差したい潤滑油
寒暖の較差を防御護身術
静止の姿勢内臓も静止

鳥取県　細田裕花

ハッピースタート桜からもエール
密室でたいてい決まる次の人
マスク二枚秘密は決して洩らさない
けむたいと言われる程の芸がない
若者の夢にうっとり聞き惚れる

鳥取県　山下節子

孫が来て会いたかったとしがみつく
おでこにピッ病院に入るハラハラす
あの日から祈り続けてもう十年
山頂に立てた国旗の誇らしさ
授かった生命最大限生きる

松江市　藤井寿代

スマホに呼ばれ溜息はピンク色
ホイッスル鳴れば10歳若返る
せつなさの遥か彼方にみそラーメン
忘れ物探したくて乗る鈍行
ウォッシュレット平和ボケした日本人

松江市　松本知恵子

三つ葉摘む春の香りを一汁に
柿若葉伸びる青春の輝き
辛い冬流そう春の洗濯機
遅霜が降る突然の落とし穴
たわいない話を猫と気が晴れる

出雲市　岸桂子

いただいた寿命と歩く春帽子
文字にして貧しい自分読み返す
演歌聞くこの世の花が咲くところ
簡単に人を許した電話口
仏の花を買うのに値切るのはよそう

雲南市　菅田かつ子

茶封筒せめて切手は春の色
満ち足りた顔で咲いてるチューリップ
五月晴れ風が誘いに来てくれる
パンとジャム買うだけなのにネックレス
投げ出してちょっと昼寝をしています

島根県　伊藤寿美

やさぐれて殻を抜け出す蝸牛
菜種梅雨夫蕭蕭と降っている
母独り残した郷の山桜桃
草書にて母より来る小言かな
卯月の視野にまだ居座っているコロナ

島根県　伊藤玲峰

春の風セットの髪を弄ぶ
錆びぬよう手足しっかり磨いとく
グランドゴルフまだ走れるぞ桜の下
青い海暴れた事は忘れたか
スクランブル交差点出雲訛にほっとする

岡山市　大石洋子

言霊の幸ふ国の桜散る
あと何年ふわふわ生きて桜見る
足元をしっかり見ろと黄のたんぽぽ
春の池ゆうゆうとカモ群れている
めりはりが欲しい暮らしの模様がえ

岡山市　工藤千代子

この土地は行った行かぬと見るテレビ
身の丈と齢が合った年金日
道端の花と挨拶する散歩
冷蔵庫玉子何とかしてくれる
午前九時さあ三時間自由席

岡山市　前田恵美子

黄砂飛ぶこれも季節のご挨拶
梅の木に御礼肥して実が光る
中一の靴の大きさ二十八
春の木々モックモックと背が伸びる
ヨモギ摘みお餅をついて春の色

岡山県　髙岡茂子

しだれ桜祝ってくれる子の昇進
庭仕事箇条書して待つ子の帰郷
クヨクヨから逃れるのには許すこと
許すのに三年かかり脱皮する
葉桜に強くなれよと風が吹く

岡山県　田中恵

外出自粛罹ってからじゃ遅すぎる
ほっこりと微笑む母がいる安堵
五七五の歩幅で越えている八十路
にらめっこさらりと流す梅茶漬
ゆらゆらをかばい合っては手を繋ぐ

岡山県　藤澤照代

公園の桜を夫と分かち合う
来年の約束をして花吹雪
春のタクト振られた野辺は花ざかり
カタカナが増え日本語が淋しがる
洗顔はもう水でいい春の風

土佐清水市　辻内次根

潮の香をさせて渚が呼んでいる
一通の便りいい日にしてくれる
追ってくる影に津波の夢をみる
ネガティブなことばは禁句春四月
グーグルで二つ覚えた花の道

高知県　小澤幸泉

ゆっくりと御国（くに）へ帰ろう春だから
寒椿落ちて友だちできました
天国へ続く線路の長い旅
給付金十万円は要りません
野菜畑妻のやさしさ育てられ

東かがわ市　川﨑ひかり

全世界笑顔平和のパスポート
ガンに勝ち世界制覇の夢舞台
世界地図消える国ある温暖化
手にスマホもう慣れましたひきこもり
大海を知らぬメダカの生き上手

松山市　栗田忠士

七十億分の一のあなたとここに居る
春愁か金魚もあぶく出している
浮き世なら溺れぬように泳ぎ切る
怒っていません笑ってもいません
神さまもガラガラポンが好きらしい

松山市　古手川光

久しぶり桜吹雪を浴びてくる
なぜなぜと思う元気が有ればいい
買って来た翌日激安のチラシ
平和とは嬉しほのぼの夜が明ける
殺し合うヒト科嗤っているコロナ

松山市　宮尾みのり

不要不急いいえ覚悟の人となる
デリバリー箸もスプーンも付いてない
高騰と無配コロナ禍株上下
ばあちゃんの耳へ内緒の恋話
電話ではその場の空気読みとれず

今治市　永井松柏

木の芽どき運命論に酔ってみる
四コマ目賞味期限を書きかえる
飲もうやと賀状に書いてくる癖字
それはそれとして笑顔で受け入れる
変異株に徒手空拳で立ち向かう

有名になったわたしの蜜柑好き　西予市　黒田茂代

クロモジ飴舐めて風邪から逃げている
口のリハビリに毎日ガムを噛む
またなっているなと思う前かがみ
揺すっても撫でても今を変えられぬ　西予市　西田美恵子

日向ぼこに私を呼んでくださった
日本語でも英語でもないカタカナ語
灰汁抜いてしまうと魅力無いあなた
ひらがなで話すほっこりする妻だ
仕方ない人ねと叱る目が笑う　（前月分）高知県　小澤幸泉

もう帰ろコロナふるさとあるだろう
政治家の答えちぐはぐ煙にまく
後ろ向きそこには何も見えません
セピア色の写真一枚産みの母
日本は好きや奥さん愛してる　（前月分）出雲市　岸桂子

忘れない人の名前の封を切る
ひとときを無心にさせるカタツムリ
老いた今海はいよいよ深くなる
想い出と遊ぶ故郷の山が好き
くすり飲むこの世にしがみつくために

名句選・この一句

ひん抜いた大根で道をおしへられ

宝暦11年（一七六一）智3・柳多留初18

畑で仕事をしている百姓に、道をたずねたところ、今まさにひん抜いた大根で、方角を示されたというのである。百姓の粗野な振る舞いに、かえって躍動感を覚える句である。

小林一茶の句集『七番日記』に、

大根引大根で道を教えけり

という句がある。この句集は文化七年以後の一茶の作品を集めたものだから、あるいは川柳の句を知っていて発句にしたのかも知れない。「大根引」は冬の季語だから、冬の景色を詠んだ句ということになろうか。

同じ題材を句に詠みながら、川柳と発句では、まったく異なった印象を受けることになる。各々に持ち味の異なった面白さがあるといえようか。（清）

川柳塔の川柳讃歌 ⑲⑥

上方芸能評論家　木津川　計

家建ててあげると孫の貯金箱

藤澤　照代

笑福亭松鶴さん（鶴瓶の師匠）はタクシーの運転手にチップを渡すとき、「家建てるときの足しにしとくんなはれ」と言った。「おおきに、豪邸建てますわ」と洒落を解する運転手もおれば、「こんなんで建ちまっかいな」とマジで答える不粋な運転手もいた。照代さんは幸せやなあ。お孫さんは家を建ててくれるために小さな貯金箱にお金を貯めているのです。足しにするためにではない。本気で幼い彼は思っているのです。涙が出そうです。

ご職業上皇とでも書いとくか

成田　雨奇

〈天皇陛下の御為に死ねと教えた父母の、赤い心を受けついで、心に決死の白だすき、掛けて勇んで突撃だ」。曲名を思い出せないが僕は今も歌える。只今の上皇の父親の為に死ねと親が教える時代が僕の少年期だった。その時代に雨奇さんがこの句を詠めば勿論不敬罪、治安維持法違反で逮捕され監獄へぶち込まれた。表現の自由を保障された民主主義のなんという有難さだろう。雨奇さん、「上皇」と書いてびっくりさせるのも一興です。

八十五歳百にはまだまだ　いやすぐだ

川端　一歩

そうか、一歩さんは百歳を想定しておいでなのか。同い年の僕は九十を一期と決めているからあと五年、もう「すぐだ」。ときにどんな死に方をするかを考える。「壮絶なガン死」をさせるバカな医者はいなくなったが、生き残りがいるから油断できない。僕は終末を看取る医者への願いを家人に託してある。「睡眠薬で眠らせ、意識不明にしてください」との頼みだ。一歩さんはあと十五年もの余命。まだ遠い先まで川柳と共にどうかお元気で。

病院の日はシャンプーとヒゲを剃る

竹村　紀の治

バーのママが税務署へ行くときは髪はバサバサ、よれよれの衣装をまとう。掬模の現行犯は打ちしおれて引っ張られていく。介護申請で役所へ行くときはいまにも倒れそうな様子で窓口に向かう。行先によって立ち居振る舞いと身ごしらえは違う。紀の治さんは病院へ行く日、シャンプーをしヒゲを剃る。さっぱりした表情、しゃっきとした姿に医者は安心して「大丈夫です」と言ってくれる。なるほど、紀の治さん、そういう魂胆でしたか。

大正生まれ時々唱歌口ずさむ

津村　志華子

「チューリップ畑でボール探しつつ『咲いた咲いた』とテニス部歌う」（朝日歌壇、21年5月2日）。平成生まれのテニス部員も懐しい唱歌を歌っているのだ。子供ごころに納得のいく唱歌は生涯の愛唱歌になる。僕はなぜか「牧場の朝」を口ずさんでいる。昭和7年作曲の唱歌だ。「ただ一面に立ちこめた　牧場の朝の霧の海…」。志華子さんは大正生まれ。失礼ながら、高齢のおばあちゃんにして唱歌を歌う。だから、いまも若いのです。

たっぷりと時間ができて認知症

久保田　千代

辛い人生があるなあ。懸命に働き続けたあげくの認知症というのだ。「神も佛もないものか」とはこのことをいうのだろう。僕と妻の共働きは同居の義母の子育てで支えられた。世話をしてくれた三人の子供の手が離れるや、なんということか、義母は急速にボケ、徘徊するまでになった。やはり人間には目的が要るのだ。楽しみ、いたすべき課題がなければ人間はボケる。川柳のある千代さんは安心だ。

西尾栞句集『水鶏笛』

「旅　枕」

旅や旅情緒というを見のがさず
人恋し人煩わし波の音
イメージの踊子もみず伊豆の秋
桑の葉をたたいてバスの行き違い
盃に島の唄ありひとり旅
宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来
蟹の身をせせって故郷の雪話
望遠鏡島の煙でもめている
河鹿きく妻も同んなじ宿浴衣
白樺の道　団体でゆくあほらしさ
絵葉書は水量のあった頃の滝
滝を背に逆光線も已むを得ず
スーツケース僕が持つうちが持つ
茶碗一つ置いて清水店となり
展望台落人部落夕餉らし
夫婦滝親子滝とてバススリル
河童橋写真を撮す順があり
奉仕料だけの奉仕という旅愁
大阪弁で信濃の空の碧さほめ
日本ライン盃洗にして酌み交わし
団参の探し合うたる声となり
一歩出ずれば吾れ旅人となる心
旅や憂しおばはん団体と乗り合わせ
プラットに佇った姿も旅のもの
船酔いへ港の見えたことを云い

訪　台

日本語で見送られ台湾語で迎えられ
燕翔ぶ港の街の旅鞄
観光ずれを口々喞つ宿浴衣
逝く春を句便りにして独り旅
釣人も景色となった雨の瀞
筏乗り絶景のとこが忙がしい
名園の借景となる東山
旅枕雨にしあれば雨の詩
一列車おくれるプラン独り旅
山菜をつけた流れのかくれ里
これはこれ美人の里という清水

自選集

一週間に一度は髭を剃るコロナ
コロナ去ったらぼっくり寺へ行きますか
コロナなんてなんて大観の富士を見る
北斎の眼だ絶筆の龍の眼だ
弟の祝儀と比べないように

小島蘭幸

お薬に色と数あり自画自賛
一日に一句と一首自画自賛
新書版月に一冊自画自賛
裏紙で作るメモ帖自画自賛
日に一度ニュースを叱る自画自賛

仁部四郎

独居老人という響きが重い
歯目耳と老いが拍車を掛けてくる
足腰が痛い生きてる証です
あの頃の想い出語る人も無く
就寝に明日の目覚めは疑わず

福士慕情

桜咲く散る　来年も宜しくね
毎日が日曜暇な時間を切り刻む
もう少しそっとしておく枯れた花
オドリコ草ノゲシ今年も会えた土手
花を見る星を眺める昨日の私振りかえる

松本文子

コロナ禍のどこ吹く風と梅桜
国会にいま「文春」という野党
ＩＴの進化に人情の退化
物忘れ己忘れる日が怖い
スター逝く浮かぶ名画とミュージック

三浦強一

半分こ母は小さい方を取る
若気の至りと言えない歳になり
最寄り駅からとことん歩くマイホーム
ご健勝のことと勝手に決めないで
ピカソよりうまいと褒めてくれたけど

三宅保州

新緑の空気も今はマスク越し
少なくなった余生コロナの所為で無為
退屈な一日なのにすぐ過ぎる
書くことのない日が続く日記帳
女房は今日も朝から探し物

村上玄也

団栗の中にも不等号がある
中和剤ですが役に立ちませんか
七変化位じゃ渡れない世間
HにもBにも味方せず生きる
蛮勇の話を聞かされるティッシュ

森山盛桜

直線

三角に陽が差す初夏のバルコニー
角切りのパンにママレードが似合う
見上げれば並列をする今朝の雲
ブラインドの襞から横縞の緑
退院の日にはボーダー着るつもり

八木千代

半分になった視力も聴力も
喜怒哀楽混ぜて余生の水が澄み
闇ひとつふたつと抜けてきた命
ペンならば伝えられそう我がこころ
一番の苦手ソーシャルディスタンス

山本希久子

始めての孫に稚児が出来て夏
ゴキブリと仲良くなって出て来ない
最後のひと黄泉から便りまだ来ない
仏壇の亡母が見ていた盗み酒
白寿までゆっくり歩む朝の道

板尾岳人

こんなにも綺麗に散るなんて 卑怯
摩天楼迷彩服を着て一人
本心をねじふせるためする化粧
褒め言葉人工甘味料入りの
眠りから覚めても蛇のままだった

居谷真理子

何回も見るなと辞書に叱られる
ボロボロになっても辞書は手放せぬ
電子辞書機嫌の悪い時もある
電子辞書時どき知らん振りをする
時どきは溜め息もつく電子辞書

川上大輪

思い出が揃い踏みして寝付かれぬ
卒寿でも日々を楽しみ明日を待つ
俎の音が止んだら起きる刻
夏物のクリーニングの封を切る
五七五机の前で座礁中

北野哲男

忘れものに気づく人生八合目
たまご焼きのあまさをははの想い出に
肉が来て花来て母の日が暮れる
弁えてわたしはここで咲いて散る
涙腺がゆるむコロナは二年目に

木本朱夏

一年中うまい舞茸エノキタケ
寝不足は日向ぼっこで取り戻す
ふるさとは昭和レトロの飲み屋街
順調に焼酎が減る家籠もり
居酒屋の温い密度が懐かしい

新家完司

飲んで寝りゃ治ってたのに風邪なんて
神さまに叩かれ1センチ縮む
ライバルもおんなじ薬飲んでいる
ブレーキを踏まずに生きてきた遺影
川柳本に押しつぶされる夢を見る

高瀬霜石

温い言葉に触れる出雲の地
勝手にも雑草というひとくくり
飯食って帰れと幸を分かち合う
励ましも叱咤も呉れて巡る四季
郷愁にかられて歳を確かめる

竹治ちかし

衣食住溢れ米寿の家ごもり
戦後史へ耳傾けているペット
柳友の安否伺う月刊誌
退屈はしないスマホと格闘中
盆まいり予定に組んで老い支度

津守柳伸

内密の話鳩尾から洩れる
ご褒美はＰＰＫに願います
買い溜めたマスクよ早く無駄になれ
コロナ明け見越し頑張るスクワット
阿波踊りかと思ったらフラダンス

西出楓楽

どないしょ つれない妻の夢をみた
おかあちゃん今夜は湯上がり火照ってる
陰膳はお茶だけだけど笑ってる
コロナ禍の数字に鈍感になる日暮れ
寝返りもせずに朝まで寝るベッド

都倉求芽

麻生路郎語録

豆秋君の一番優れた処は飄逸さ、脱俗さにあって四角のものを三角の目で見ているような処に味が出ているのであるが、一つやりぞこなうと誠に変哲もない句、馳け出しとあんまり差のない句となっていることが往々にしてある。

（「川柳雑誌」NO・305より）

句集の森

『地下鉄』

児島（こじま）　与呂志（よろし）

子沢山市電で行ける花に決め
瓦斯臭い台所やなと妻の留守
観劇へ夫の知らぬ帯の数
花びらを顔にかぶって酔いつぶれ
酒の出る謡へ今日も誘われる
おとう様などと呼ばれて気味悪し
月末の暦止めたい二　三日
酔うてきて嘘がつぎつぎよく続き
後輩に介抱させる梯子酒
先頭に立つ鉢巻きを締め直し
くつ下を脱げば我が家の足となり
旅だより小さな駅の善意書く
長女二女三女も妻と同じ声
鈴ふれば浄土につづく土のいろ
孫やっと男の空に鯉を上げ

（昭和五四年六月七日　発行）

温故知新

田中正坊川柳句文集『ペンシル』から

悪玉がきっと撃たれる西部劇
無事息災まだその上に何の欲
鳳仙花　待ちかねていたプロポーズ
煩悩が去ったら虹も消えていた
純白のマフラー散りし雲の果て
年金で何とか食えている不思議
正論が人情論に押し切られ
妻の死という十字架を負う余生

長男渡米・長女結婚（五句）

父は父　子は子の道を行く別離
巣立ち行くために育てた二人の子
式場で泣かんといてやお父ちゃん
僕の娘奪った男と酒を酌む
もともとは一人だったとひとり言
ネクタイはストックで足る定年後
寅さんの港にいつも居るさくら
起承転結　七言絶句　唐詩選

西出楓楽選

風の声聴きたい言葉ただ一つ
逆風も背中向ければ追い風に
矢印の向きを恵方に変えておく
隣家からアイサツもせず落葉来る
お隣の門前も掃き嫌がられ
転居したら老人会に入らされ

神戸市　みぎわ　はな

洗面所今朝のやる気が写り込む
良質な番組潰す視聴率
老害と気付かず椅子を恋しがる
デマ中傷誰もが被害加害者に
大金を失くし届けぬ裏事情
訃報欄昭和の偉人また一人

奈良県　室田行久

さよならのメールにハートつけるって
どんちゃん騒ぎ夜は咲きたくない桜
素直さを描けばまるいシャボン玉

松山市　大内せつ子

まるとまる接点ばかり多すぎて
伝言板錆びて傾く無人駅
めんどうな風に従う笹の舟

神戸市　石川克美

雨の中しおらしそうに咲くサクラ
群らすずめコロナ知らない騒がしさ
黄砂なの春がすみだと思ってた
予定ない一日のなんて長いこと
忘れぬようメモした紙が見つからず
句作りはストレス楽しむことかしら

大阪市　大沢のり子

当分は目力だけで話します
二階から花見て春の義理果たす
手を洗い笑う覚悟の長期戦
返信のメール了解だけにする
納豆を食う明日のため老い二人
たっぷりのお湯に丸ごと春キャベツ

学校の先生あだ名覚えてる
花見頃さくらの咲かぬ生徒いる
お気の毒式典なしの生徒さん
花粉症助かりましたマスク顔
いつまでも卒業できぬ医者通い
迷いますワクチン打つか打たないか

和歌山市　福島一雄

正直で亀裂の種を撒き散らす
この句よりオレの句いいと愚痴る没
割り勘のペースを合わし飲む律儀
約柄を着て無口とは言わせない
舌ペロリ許せた歳は大昔
浪速には笑いの種が吹き溜まる

明石市　瀬島流れ星

信じるとサプリメントに救われる
からだ中いっぱい撫でて褒めてやる
習慣になってしないとヘン散歩
筋力を回復できたスクワット
愛犬を送ったメール深夜二時
断酒した夫にも買う甘いもの

豊橋市　西郷紀美代

流し読み後で後でと積ん読に
黙トレのジムで閃く五七五
大食いの競争無駄な思いして

沖縄県　禱モモト

嘘重ねばれる嘘吐き白状を
礼状を先ず出してから読む句集
目力で見分けた友のマスク顔

和歌山県　森下よりこ

植木鉢ひっくり返し春の風
畑では小さな地震気付かない
高齢者の自覚ないのですみません
悪口のかぎりを国が言い合って
押し寄せる危機感コロナ第四波
いい日またあるを信じて自粛する

竹原市　若年幸子

オペ受けるドボルザークに包まれて
院内食桜に負けぬちらし寿司
介護士さん優しく誉めてノセ上手
リハビリしつつ宇宙旅行の話など
リハビリも本番となり汗の量
注射嫌いワクチンだけは外せない

伊丹市　岡村風琴

散歩道コロナ忘れて二輪草
ややこしい話はせずにリンゴ剥く
鹿威ししじまを破る鄙の宿
崖っ縁立って度胸がしかと付き
ガバナンス慣れない言葉またふえる
ポケットにいつか咲かせる夢ひとつ

孫は髪伸ばしてかつら贈るらし
痛いと痒い薬付け合う二人
カットして顔そりしたらそれなりに
葬式は任すと言われ困ってる
少々の財産喧嘩しないでね

横浜市　巌田かず枝

早い春コロナの憂さを吹き飛ばす
濃密な春を酔わせる八重桜
八重桜ぎんぎらぎんに咲いてほし
ワクチンを打てば自由になれるかな
人恋し友の電話が鳴り響く

横浜市　加藤佳子

何しても早い遅いと人の口
コロナ禍の自粛生活趣味と生き
カラオケ喫茶介護施設の役担う
食事前小腹満たしてスーパーへ
たまじゃない回数増えた物忘れ

豊橋市　小松くみ子

吉報におじぎおじぎの茶封筒
バス停に案山子のように並んでる
ワンランク下げて呼吸が楽になる
溜めた元気取り崩しつつ生き延びる
雨の日は濃いコーヒーと文庫本

八幡市　武田悦寛

ラブレター重い気持ちを軽く書く
花散らし髪を揺らして遊ぶ風
ハッピーエンドから始まった長い昼
一斉に飛び立つ鳥と残る鳥
せせらぎの渡り切れない老いの川

大阪市　今村和男

喧嘩してもやっぱり君へさす磁石
かくれんぼ見つけて欲しい寂しがり
胸の奥棘を残して終わる恋
法螺吹いて納められない二枚舌
赤提灯きえてまっすぐ帰る蟻

大阪市　岡田恵子

テレワークもう一部屋が欲しいです
子等話すデジタル用語わからない
はしご酒コロナのせいで死語にされ
しっかりと旧漢字書く九十歳
GPSうちの洗濯まで見える

大阪市　尾崎文子

じゃれあいつ道行くさらのランドセル
新入の社員ネクタイ折り目良し
マスクして会食ならば家で呑む
甘き夢追うていつしか五里霧中
深呼吸するにもコツのあるらしく

大阪市　近藤風羅

大阪市　阪本秀子

第四波それじゃコロナの思うまま
日本の誇り春なら桜だな
花粉舞い黄砂もふって湿っぽい
彫る人の思いが仏像にとける
悔いのない明日をと天の父母の声

大阪市　柴本ばっは

昭和生れ再生紙ではありません
母ちゃんは今でも強い活火山
老い先の傾斜わたしも世間並
衣食住足りているのも呆ける元
春休みも花見もわやにしたコロナ

大阪市　森廣子

花筏ゴミと仲良く流される
角曲がるまたもコロナの壁が有る
コロナ禍に吹き溜っては居られない
筍一本何やかんやと遊ばれる
のんびりと遊んで行きな紋黄蝶

大阪市　樋口眞

老境で見る夢若い頃ばかり
重い物運べて自信甦る
大の字になって我が家はパラダイス
通販は便利ついつい無駄も買う
民主主義壊されそうで胸痛む

泉大津市　助川和美

邪魔するコロナキッスも出来ぬ初デート
バレなけりゃそんな政治家甘い汁
金の夢抱いているから頑張れる
愚痴ばかり並べてちっぽけな私
雑踏にいるかも知れぬ宇宙人

茨木市　細田マキコ

骨董の仏買ってと合掌す
日想観沈む夕陽はちぬの海
春霞と思ってたら黄砂とは
車座の花より団子遠い日に
母逝きてたまという名のねこのこり

交野市　山野双葉

花びらの絨毯犬もそっと踏み
墓石には夢と刻んで母の逝く
深呼吸してから語る僕の夢
子の夢を初めて知った文集で
春爛漫途方に暮れてばかりいる

門真市　坂本星雨

春の陽と寄り添うように散歩する
コロナの世清く正しく慎ましく
生かされているのに愚痴をたらたらと
風に散る桜へ来年を思う
今はただ心静かに時を編む

堺市　楠井輝子

ベッピンさんええ塩梅に年老いて
あんたほんまにいらちやな早よ死にまっせ
老い二人お互いに手を貸す散歩
ユニークで輪の中におさまり切れぬ
定年後亭主生きがい畑仕事

堺市　古川光雄

巣籠りで小遣い減らず財布ずしっ
飲み屋街シャッター通りにしたコロナ
あれこれと飲んだ薬で正常値
諭吉殿五人そろって財布暖
ボランティアするよりされる側に居る

吹田市　岩口のぞみ

インスタに映えれど味はわからない
入院の父を見舞えぬもどかしさ
大盛りはやめると誓う食事あと
神々し車窓の富士に願い事
忘れないメモを忘れる情けなさ

吹田市　西沢司郎

キューポラの時から今もサユリスト
CMは自粛何ぞと煽り立て
リバウンド懸念も平気人の渦
今日もまた勝って一杯やるムード
忙しいお方で舌もよく回る

高槻市　鳥居宏

春の庭つぐみひょこひょこ餌をほじる
コロナかとヒヤリ一夜で熱は引く
コロナ守備緩めて悪化繰返す
子雀も育ちかしまし群雀
川柳塔いつもの友の句が見えぬ

寝屋川市　川本信子

一大事ワクチン打つ前変異株
喋りたい口を押さえて飴一つ
我が庭に去年の倍の花咲かす
モリモリと胃袋だけは絶好調
子には子の暮らしがあって距離を置く

羽曳野市　黒木ひとみ

八十路生き感謝ばかりの日を重ね
人となり生活見える川柳句
餌を運ぶ蟻にも言葉ありそうな
しとしとと草木育てる春の雨
春のどか亀の親子が甲羅干し

大阪府　大浦福子

体重計片足あげて息止めて
「五十肩」とっくに五十過ぎた今
腹まわり慌て引っこめメタボ診
サプリ好きどれが効くやら効かぬやら
子等に世話させぬようにと日日散歩

初対面たがいにジャブをさぐりあう
成行きにまかしたいけど意地もあり
ピー缶をデスクに置けたいい時代
惚けてない僕のはたんに物忘れ
五六人マイクで拾い街の声

大阪府　奥野健一郎

コロナコロナのマスク不満が立て籠る
観音の猫背も在す山の春
お互いに切りそびれてる長電話
思い出の蓋閉じ込めた前頭葉
小癪だが娘とカーナビに同化する

大阪府　高木道子

頼りないボタンが胸で光ってる
手の込んだ芝居するなと神が言う
逆風が恋の雫をさげて来た
静かに回り始めた恋のルーレット
風が運んで来たセレナーデその他

神戸市　青木公輔

二度三度波をかぶってまだ懲りぬ
自粛して外の空気の味忘れ
自由吟コロナの句しか浮かばない
民衆は踊ってくれぬ笛吹けど
通天閣みどりの服に焦がれてる

神戸市　近藤勝正

ああ残念今年の花見また自粛
いつも来る小鳥待ちつつ昼寝する
いつ見ても孫の動画が笑わせる
門灯の点灯少し遅くする
定食のご飯少なめちょうどいい

神戸市　櫻井崇史

コンビニの明かりが街を眠らせぬ
儚さの感慨残し桜散る
まん防で大人の時間なくなった
わからないマスクしてまで会食を
世にまみれピュアな私はもういない

神戸市　田本古鈴

そっとしておこう見守る愛もある
回復期に転び明日が遠くなる
入学式明日に向かって跳ぶかまえ
また来てねタクシー代を握らせる
欠点はわたしにもある仲直り

神戸市　米田利惠子

阪神の背番号8に癒される
抜歯後の痛み顳顬刺激する
口角を上げて少し綺麗になる私
惜し気なく和服を捨てて楽になる
コロナうつから抜け切れぬ怠け癖

尼崎市　清水久美子

三田市　住吉　美和子

ふる里の山はツツジでピンク色
水彩画何を画こうか迷う春
喜寿だけどマニキュア塗って紅さして
国会にささやき大臣居てござる
老害の目立つ議員が多過ぎる

三田市　中山　昭美

知らぬ間に声が出ているよいこらしょ
猫でさえ自分で探す良い居場所
古希の夢こわさず飛ばそシャボン玉
お下がりは娘の飽きた物ばかり
道端にエヘンと並ぶ旬野菜

三田市　馬場　貴美江

満開だ自粛忘れて密の中
夜桜は日々の暮しを忘れさす
まん防だ収束みえぬ夜の街
皺の数年輪なれば納得す
デジタルについていけない高齢者

宝塚市　太田　としお

子や孫も神さまからの贈りもの
日記帖コロナコロナで埋められる
正直に生きて涙と縁遠い
他人に負けても負けたらあかん自分には
許したら優しい顔になってくる

宝塚市　岸田　万彩

太陽が布団にチャージする電気
ストレスはコロナだけだという老後
おかーちゃんと呼んでた日々の若い母
追伸と足して本音をチラリ述べ
アルコールで揉み手しながらコンニチワ

和歌山市　倉橋　悦子

ぶつかって方向性が見えてくる
リバウンド大丈夫かな五月晴れ
遠い日の記憶をたどる墓参り
ああ言えばこう言う人とお友達
マスク越しどうもどうもで暮れる日々

和歌山市　定松　宏枝

入学は親も子離れする一歩
手間隙をかけて子を待つ母の味
新人の息子何度も見る鏡
始まったくしゃみ連発花粉症
仲間ゆえだから貸したくないお金

和歌山市　西川　千鶴

青臭い文が連なる古日記
退屈な男だけれど隙がない
春の月ちょっとつれない顔で出る
凹凸の道を凌いだ土踏まず
寝返りを打つたび夢がでかくなる

鳥取市　吾郷天遊

隙間風埋めるジョークが出てこない
合格へダンクシュートを決めました
いい人の前では嘘が弾まない
鬼滅の刃アニメを馬鹿にしてました
最大の武器はチャーミングな笑顔

鳥取市　山野すみれ

アルバムを開けば子供踊り出す
春も過ぎいつまで続く自粛の日
失敗のたびにへこんでまだ懲りず
小手先で燃やした炎すぐに消え
パスポート出番が無くて期限切れ

鳥取県　本庄汪

失敗の無い人生が有るものか
寿の命じゃないか祝い膳
お気楽な人とやゆされ気にもせず
輪番で丸く収まる町役員
バラ色の未来でないが今で良い

松江市　中筋弘充

レコードも針もわからぬ現代っ子
現代っ子の言葉ちっともわからない
神さまの言うこと聞いてする介護
褒められてやる気を出してする介護
介護日誌に叫びたいこと書いておく

松江市　山根邦代

ささやかな幸せ祈る八十五
仲良しの友はだまって星となる
巣ごもりでボケそうになる頭なで
雑草も春だはるだと花咲かす
ツバメ来た嬉しい友の声を聞く

瀬戸内市　宮宅比佐恵

山桜咲いて彩る過疎の四季
コロナ禍も卒入学に笑顔でる
逆らわず風にのってるまだ卒寿
医療ミスきいて血圧はねあがる
主逝きて草が守りする空屋ふえ

広島市　田桑恵子

不用意な言葉を吐いた夜の悔い
ハンコなし紙の威厳が衰える
規格外届いたみかんの甘いこと
私には緩めのゴムが楽でいい
第四波変異コロナが隙をつく

広島市　松尾信彦

暖冬のツケは夏場の水不足
糸通し孫が祖母への初バイト
大丈夫囁くように押し切られ
主夫業へ時短簡素化大雑把
煩悩のひとつや二つ道連れに

亡き父母よ今の時代をどう生きる
風ひとつ抱いて難局のりきろう
雑草の命にエール贈る雨
あの頃は脇目振らずにまっしぐら
平凡な名前で強く生きてます

尾道市　小川道子

何もかも片付かぬまま寝てしまう
いいかげんにせよと言いたいことばかり
衆目の中でも嘘のつける人
手ぶらでは行けぬ負目を思い出す
友として嘘です神よ許されよ

府中市　岸田武

病気して良かった事を拾い出す
リハビリの先生はみんなイケメンよ
スッピンの中でもランク付けられる
調理士の愛を感じたお献立
闘病という戦友が出来た幸

三次市　伊藤寿子

渇いた街のシグナルはずっと赤
風の詩雑木林で聴く孤愁
涸渇した右脳へ薫風のエール
葉桜になって別れた人を恋う
まわり椅子とても楽しい童話です

山口市　中前幸子

追伸の二行はボクの心です
極楽へ行くポイントを貯めている
補聴器が聞いてしまった嫌なこと
才媛の嫁との距離が掴めない
年金で遊んで暮らす筈だった

阿南市　小畑定弘

落書きのアート消すには惜しい出来
私には読めぬ筆だが美しい
ドジ踏んだわたしを鏡まで笑う
身を引いた人の扱いには困る
遅くなってゴメンは逝ってから言おう

大洲市　花岡順子

詫び状を落とすポストが冷えている
バカボンのパパは明日も生きている
切り貼りをしたヨレヨレの自己弁護
ちょうどいいところに風が置いてある
ドキンちゃんみたいと言ってくる鏡

佐賀県　真島久美子

草を食む牛の顔にも春の風
ほろほろと泣くかのように散る桜
見放した倅が持っていた絆
言うまいと思いながらも口挟む
わたくしの願いひっそり樹木葬

宮崎県　黒木栄子

福岡県　本田さくら

一本松何を想うかこの十年
たんぽぽの綿毛ふんわり旅に出る
月のうさぎ子どもの夢のままでよい
はえ一匹小林一茶現われる

宮崎県　惠利菊江

広辞苑から貰いだす語彙の知恵
山盛りの茶碗に若さ誇ってる
戻せない一本の紐苦戦する
服着替え犬とデートの散歩道

沖縄県　宮すみれ

聞くもよし自慢話に茶茶入れる
ほこり取り襟をととのえ背中ポン
つかれたら休め休めと天の声
我が家は支出が多く火の車

黒石市　石澤はる子

水に流すコツを覚えた笑い皺
コンビニで間に合っている冷蔵庫
少し嘘まじえて保つ車間距離
ペチャンコの紙風船が抱く野望

黒石市　北山まみどり

ようやくの桜に水をさす寒さ
明日には溶けてなくなるなごり雪
むくむくと顔を出し始めた緑
天ぷらの時期を逃したふきのとう

青森県　月波与生

句読点忘れ迷子になる明日
一曲はちゃんと歌える歌を持つ
撮り貯めたVHSをゴミに出す
あの頃の記憶もフロッピーもゴミに

白河市　鈴木たけし

聞き耳が玄関前を掃いている
陽炎にレールの歪み教えられ
腰痛も頭痛も生きている証し
家計簿の隅へ歩数を書き入れる

富士見市　中島通則

啓蟄を過ぎて未だに巣に籠る
人として理解できない鼻ピアス
「行けたら行く」は行かない人の常套句
口だって耳目に負けず舌二枚

東京都　髙岡弥生

身の回り整理必要歳になる
夕飯も掃除もすべてパパがする
親は子を子は親を見て生きている
アルバイト社会勉強してきてね

横浜市　長島亜希子

長電話言えぬ苦労をしてるらし
いくらでも聞くよしゃべって吐き出して
三割負担ありがたいよな辛いよな
花日和ステイホームはしてられぬ

山梨県　小林金剛

いい加減よして下さいコロナさん
元気出せ古い手紙に命あり
情のあるゲゲゲの女房底力
いい思いばかりじゃないよ苦い酒

石川県　堀本のりひろ

軽く一杯ストレス吐いて月夜道
軽く一杯今日のストレス肴にし
軽く一杯妻待つ家へ空元気
軽く一杯何にも理由いりません

岐阜県　喜多村正儀

一芸に遊ぶコロナの禍は避けて
深窓へ届け夜更けのセレナーデ
山の気を抱いて走った石清水
胸底の青い記憶が疼く夜

静岡市　渡辺芳子

生かされている人生に感謝のみ
若き日の習い事今生かされて
今の幸守って生きて感謝して
それぞれの命みなぎる友の庭

浜松市　中田尚

えらい人マスク外してバカさわぎ
薬価十円今日もしっかり生きている
生きているコップの水が美味である
一日一句生きている証

名古屋市　冨田末男

ときめいて来たらしている深呼吸
情のある人の心を学びたい
雑学を話の中で活かしたい
充電をしてくれそうな日本晴れ

江南市　脇田雅美

寒風にマスクにメガネ曇りだす
法要日ちゃんと寺には書いてある
リーダーは協調性を発揮させ
スポーツジム通いにシニア余暇過ごす

京都府　北野クニオ

初咲きの桜に集う目白かな
花水木我が家の庭にアクセント
パンジーがすました顔で咲いている
土筆坊タンポポ堇競い合い

大阪市　東敏郎

奈良の車夫鹿にあいさつして走る
夫には強い母親ついてます
俺の過去叩けば多分埃飛ぶ
受験には失敗してもサクラ咲く

大阪市　中村民子

夫婦とは持ちつ持たれつ信じあう
前向きに生きて心の闇は無い
コロナ禍を忘れさす程空は青
スキップで春を楽しむスニーカー

疎まれて揺らぐ心を持て余す
ガラクタは生きた証しだとっておく
いい言葉あっという間になんだっけ
機嫌よく一日終えて床につく

大阪市　中村峰子

休業の飲食店が泣いている
手がかかるうちはまだまだかわいい子
レジ待ちで余計なものをカゴに入れ
のんびりとピザ食べ過ごす休みの日

大阪市　降幡弘美

オリンピック繋ぐ聖火が全国へ
人として生きてほしいと春の風
満開の桜の命七日間
生きるのに苦労するのは当り前

大阪市　前川善之

ワクチンの順番はいつ来るのやら
ペリカンで認める句は命持つ
好きやから知らんふりする恋心
新コロナ案じた通りリバウンド

大阪市　松田聰

ビートルズ未だ愛され駅ピアノ
スキヤキソング今の私の応援歌
義母の南天持ち去ったのはどこの誰
復活の池江選手にもらい泣き

大阪市　宮本千恵子

年金の眼を光らせる五割引
それ以上言うなお酒が不味くなる
うっかりと漏らした秘密飛び回る
ほどほどに結ばれ続く無二の友

池田市　上山堅坊

気遣いが過ぎて女房の不興買う
まだいいかへそくりの額告げるのは
お隣の噂話に口結ぶ
杖持つ夫見守る老いた妻そろり

池田市　倉本一弥

応援は旗と大声あればこそ
朝はパン昼は冷凍夜仕出し
その答弁誰も納得しませんよ
娘より親が必死で婿探し

泉佐野市　樫葉良子

嫁さんに握られている塩加減
へそくりを忘れんうちに一ヶ所へ
生きてゆくやんわり老いに溶け込んで
じんわりと夫婦で惚けて許し合う

河内長野市　穂口正子

退屈で老友電話高価です
葉書来て自慢の絵です友の顔
夢で便り声出して読む目がさめた
一人家にカラオケ歌う自分ほめ

寝屋川市　坂本ミヨノ

寝屋川市　廣田和織

コロナストレス妻の口調がきつくなる
四面楚歌顔を上げれば青い空
プランコで過去と未来を行き来する
日の当たる場所に出たいという秘密

高槻市　三谷白黒

婆喋り爺聞くだけの食事です
日本の国力判るワクチンで
偉い人嘘をつくのがうまい人
記憶ない答えてないと同じです

豊中市　荒木郁子

歩数計膝の痛みで伸び悩む
コロナ禍で口を開けば愚痴ばかり
池江さんの明るいニュース拍手する
ワクチンの不安引きずる高齢者

豊中市　貝塚正子

歳いくつ薮から棒に孫が聞く
我に返るメガネをかけて見た値札
そろそろか　いやまだ早いケアハウス
着古したシャツはやさしく肌に添う

豊中市　齋藤奈津子

リハビリの私を犬が連れ歩く
花便り聞いても行けぬ自粛中
治療中筆談したい歯医者さん
人づてに聞いて嬉しい誉め言葉

豊中市　松田蟻日路

少しばかりの夢ポケットに日々歩む
夢だって見ますよ生きてるんだもの
一段め跨ぎ二段め躓躓く
散る花は潔さなど知りもせず

八尾市　田邊浩三

命より大事なお酒止めよとは
マスクってこんなに種類あったんだ
腰痛が治まり桜下の初詣
妻呼ぶが来るはずがない三本目

神戸市　輿水弘

澱む空気老いのひと言千の風
老活にだらだら坂を駆けのぼる
古稀の坂しがらみ対峙ゆるりいく
酔眼の奥で残り火腰すえる

神戸市　山根弘華

鮮明な野菜が光る道の駅
また会う日そして忘れぬ指切りを
家ごもりスマホ片手に日が落ちる
卒寿でも希望を胸に日々感謝

芦屋市　新阜義明

引越しで断捨離好期急かされた
死角へもお辞儀好感照ノ富士
小が大制す相撲の痛快さ
まん防で北杜夫さん思い出す

ファンタジー始まる予感春の風　尼崎市　宗　和夫

巣ごもりに心は痩せる身は肥える
スマホ手に抜け出せるのかラビリンス
立ち位置が判らぬままに愚痴を聞く　尼崎市　羽奈和子

好き勝手気ままに生きる猫と住む
お腹見せ開けっぴろげに眠る猫
ゆるキャラの元祖昭和のブーフーウー
孫連れてご飯と昼寝娘来る　尼崎市　山田厚江

おばちゃんのマスク談義に花が咲く
おばちゃんは色取り取りのマスクする
子や孫の生きる手本が母に有る
自粛中三食だけが楽しみだ　伊丹市　延寿庵野鶴

人間を脱皮してます座禅堂
捨て石を投げて本気を確かめる
ピーピーとケトル呼んでる夕餉の灯
絵具箱明日を描く夢無限　伊丹市　平井富夫

記憶無し妻にはそれは通じない
宝くじ2文字違いを3度見る
何故痩せぬ飲み食い水まで我慢して
老いを知る散歩姿の老犬で

団体も消えて耳入る鳥の声
桜花爛漫自粛のはずの笑い声
お日柄も良いようですとアリの列
親代り大きい兄も星になる　三田市　生田えい子

初しぼり名酒の味が春をよぶ
命日に酒器に一輪春の声
たまゆらの縁の母よ夏つばき
悲しさを分けあう心きき上手　三田市　稲角優子

残念だ平成の三四郎逝く
若さゆえ失敗談義許された
コロコロとコロナ対策先見えず
おどりこ草風にゆらゆらフラダンス　三田市　木村マユミ

新色の口紅春のメッセージ
忘れない未曽有の地獄黒い海
老女でも女医を選んだ婦人科へ
宝物妻と言わせた金婚酒　三田市　幸田厚子

連休は故郷の山旬探し
危険だよコロナで花見パスが良い
平凡で無事で現実生きたいな
初孫が社会人だとラインくれ　三田市　辻　開子

三田市　森　玲子

公園に子供の声もなく静か
起きるまで何度も猫に起こされる
友の名を思い出せずにア行から
子ら夫婦仲良きことが親孝行

丹波篠山市　澤　良子

コロナ禍の咳するだけで振り向かれ
久しぶりミシンの調子損ねてる
日記帳三月まではつけてます
好天気昼はすぐチン急ぎ足

丹波篠山市　藤井美智子

ひらめきをすぐメモらねば逃げていく
諺へ昔の人は良く言った
したたかに生きて八十路は穏やかに
始まった聖火リレーへ不安大

西宮市　高瀬照枝

雨の日は泣いてみたいよ思い切り
桜通り人波コロナ邪魔をする
さりげなく気遣う身なり粋に出る
桜笑うテレビで観てる昨日今日

西宮市　高橋千賀子

やけ食いで治まりきらぬ腹の虫
コロナ禍で渡る世間も狭くなり
愛犬が鎹となる夫婦仲
ワクチンを終えてもすぐに来ぬ平和

三木市　山口ヨシエ

新緑に囲まれ歩く満ちみちて
風を切るマスクが邪魔になる歩幅
ウィズコロナ笑う日信じがんばろう
温もりが欲しくてみすゞの詩を繰る

奈良市　東定生

哲学を学びたくなる事ばかり
当たりくじ隠し切れないえびす顔
雨上がり同じところに水溜まる
雑魚だって人には言えぬ意地がある

奈良市　尾畑なを江

忘却の彼方と言えぬ過去のキズ
先代が髭でもの言う額の中
商魂と言うにふさわし面がまえ
商売が何より好きで儲からず

奈良市　仲西賛郎

退院でやっと減量成功す
風呂替えた途端にトイレ悪くなる
節酒するこれまた辛いことだけど
優勝やまだ気早いでタイガース

生駒市　饗庭風鈴

声放つからだが軽くなってゆく
聞こえくる沈黙の声しみわたる
また会おう命の声に耳すます
舞い落ちる命の花弁しきつめる

故里に想い出だけを残してる　生駒市　児玉規雄
想い出は甘茶祭りの山の寺
釣る人も釣見る人も暇な人
難問の数独解いて五月晴れ

飛行雲まっすぐ伸びて春の空　和歌山市　北原昭枝
ほろ苦い青春の日の日記帳
ありがたくいただく旬の夏野菜
蒲団干す偶にいい夢みるように

ガラケーを替えてスマホの持ちぐされ　和歌山市　佐藤まき
怯えている指一本で飛ぶ電波
コロナ禍に歌や歌舞伎もデジタルで
新時代やっぱりスマホ必需品

夫婦ですむすんだ縁半世紀　和歌山市　鍋嶋澄子
久しぶり頭揃えて墓参り
メジロ来て元気だせよと歌うよに
淡いピンクふわっと優し椿咲く

地獄にもお花畑があるらしい　和歌山市　まつもと　もとこ
グチが増え無口になって考える
空の青に染まってしまう雲になり
パワハラの政治家達の密の会

ストレスは考えすぎと思いつく　岩出市　村中悦男
切り株に新芽の息吹き命見る
銃後に生きて今の生活夢の国
恙ない西日を送る妻と居て

外食を控え一年口侘し　和歌山県　三枝眞智子
出来ることは遣り通すまで気が抜けぬ
一日を笑って暮らす朝を起き
時ならぬ雪に笑顔の雪だるま

いつのまに敬称つけておじいさん　鳥取市　上山一平
茶碗酒歌って寝るに丁度いい
深々と不気味な軋み築四十
菜種畑黄砂も晴れてまばゆい黄

春の陽へああ生きている深呼吸　鳥取市　大前安子
ひらがなの日本語が好きさくら咲く
うっかりを笑って許す人の側
残すもの背中の汗となれば良い

気づいたか飲んでカラオケ家でする　倉吉市　伊藤嘉昭
熱燗が今日の仕事にご苦労さん
新聞に我が川柳句照れくさい
有難い七十九だけど仕事でき

先生が好きでずる休みはしない
マスクない顔にちらりとマスクの目
わざとらしエヘン気付かす長電話
ゆっくりと歩けば見える広い空

倉吉市　大羽雄大

春の風窓開け背のび深呼吸
みてごらんお天とさまも味方だよ
またあした言える一日過ごしたい
わたくしはひとりじゃないよ言いきかせ

倉吉市　堀かずこ

過疎地にはコロナも来ないバスも来ぬ
まぼろしの汽車が走るよ廃線路
ちょっとだけ小言いったら背を向けた
紙ヒコーキ愚痴を背負って飛んで行け

倉吉市　宮田風露

洗濯機気に入りの服小さくし
コロナ禍に帰らないでと娘に電話
決心のつかぬ子の背をそっと押す
富士は無理せめて大山登る夢

倉吉市　若松由紀子

おしん見て涙橋田氏死に涙
しつこさは尖閣沖のチャイナ船
照ノ富士地獄に耐えて復帰する
うそつかぬうそを信じて言っただけ

境港市　中井虎尾

満開のビオラ見るたび癒される
飾らずに平に生きる傘寿です
口車乗ったら危険電話口
いの一番コロナ収束願う日々

境港市　藤原久直

幸福を貰った様な虹を見て
猫2匹話し相手のボケ防止
喫茶店恋の始めと終わり知る
機嫌とる孫は知ってる年金日

米子市　川本美津子

取り合った農地今では草ボウボウだ
八十七歳川柳あって生きる幸
独り居に紙コップとは便利です
忘れてることを忘れて注意され

鳥取県　下田茂登子

朝は陽に夕は仏に手を合わす
桜土手コロナで消えた屋台店
夜桜やコロナで消えた酔っ払い
赤ランプ点滅してる預金残

鳥取県　田中重忠

足音がすると君かなと想うよ
願うのは元の彼女の幸せだ
安心だ生まれ変わりのこと知って
髪型の変化に気づく笑顔見る

松江市　相見柳歩

妙案を前頭葉に託したい
「世界平和」願い戦略練っている
ワクチンを無償で贈るしたたかさ
照ノ富士不屈の闘志大関に

出雲市　黒目　ひでお

花の名が今日は出ないよまた明日
吊橋のあった古里さまがわり
くじけないまさかの坂で強くなり
さわやかな風の中には沈丁花

雲南市　永見　安子

乗用車じゃできぬウィリー運転
幸せの字をクルクル回す風
座礁した俺を助けるタグボート
日の丸の旗もすまぬと垂れている

安来市　原　徳利

句碑建立晴れて飛び立つ十七字
そしてまた芽吹く古木を撫でてやる
手に取ってみれば可愛いほとけの座
竹林は切るなと父は言い遺す

津山市　髙橋　由紀女

老いてさえ気分昂揚する五月
転寝に昼寝に誘う温い風
体力を補うほどはある気力
死を見つめ考えるのも心得か

美作市　岡本　余光

砂時計残りの砂もあと僅か
人はみな生まれながらの死刑囚
大丈夫まだ食欲はたんとある
リハビリの長い廊下に夢がある

広島市　常國　喜好

八十路坂ゆっくり来いよ父の声
認知症防止に声を出して読む
引き際が大切特に政治家は
潔白と言う政治家の目は踊る

尾道市　小畑　宣之

日捲りとひと日ひと日の未知の旅
コロナを脱み練り直す旅プラン
わたしには中間色がよく似合う
字足らずや字余りもある人生譜

尾道市　村上　和子

八十二ストレッチから腰痛に
散水で出来た虹にも夢がある
缶切りという小道具に暇が出る
壽賀子さん逝きて茶の間の寂しさよ

竹原市　土井　輝恵

ややこしい事は言わずにハイとだけ
朝決まる今日の私の時間割
別れ際ハイタッチする小さな手
ウイニングパットに溢れ出す涙

松山市　郷田　みや

高知市　三谷松太郎

初鳴きもナイスツミーツユウ横文字に
犬引いてサクラ散ったと言って過ぎ
加齢デスそう言われつつクスリ漬け
あイタタタ年寄りイヤと言われても

（前月分）尾道市　小畑宣之

ペットにも主人と同じ成人病
森が消え小鳥も消えて人も消え
乗り越えし病数える友傘寿
記念品ばかりが増える食器棚

（前月分）神戸市　青木公輔

形容詞やたら並べた茶封筒
現ナマが幻と成るこの世かな
昔に切り替えるスイッチ見当らず
弱い男を責めに来る募金箱

（前月分）仙台市　月波与生

三合で酔うとは今日は楽しい日
百均で買えないものは無駄なもの
転ばないように神籤を持ち帰る
一目惚れできず人生損したなぁ

（前々月分）豊中市　松田蟻日路

鳶一羽空の青にも染まれずに
日に焼けた身体に似合うユニホーム
街の声わかったような事を言う
忍耐力あるなあコメンテーターは

第13回「ふるさと」川柳募集案内

課　題　「　激　」
（一口2句・12人による共選・複数応募可・清記選）

選　者　伊藤　寿子・渡辺　松風・吉崎　柳歩・米山明日歌・石橋　芳山・赤松ますみ・梅崎流青・浅利猪一郎　他

締　切　**7月31日（消印有効）**

投句料　1000円（切手不可）
★添付の誌上大会投句用紙他　便箋等使用・2句を1枚の用紙に記入

賞　最優秀賞　1点
（樺細工色紙掛・仙北市産品）
優秀賞　2～10位（仙北市産品）

発　表　柳誌「湖」13号
（2021年10月発行予定）

投句先・問合せ
〒014－0602
秋田県仙北市ひのきない字長戸呂85
浅利亥一郎方
第13回「ふるさと」川柳事務局　宛
電話　0187－48－2236

主　催　**川柳「湖」（うみ）**

第3回　橿原市民川柳大会　誌上大会

宿　題　（各題2句）

「パ　ン」	植野美津江　選
「きれい」	笠川　嘉一　選
「アニメ」	更谷　風見　選
「ぐらぐら」	新家　完司　選
「流れる」	たむらあきこ　選
「　星　」	阪本　高士　選

締　切　**令和3年7月31日(土)当日消印有効**

投句料　1000円　（切手不可）

投句用紙　指定用紙（コピー可）

賞　各秀句に賞

投句先　〒634－0831
橿原市曽我町729－18
西澤知子まで

連絡先　植野美津江
TEL/FAX　0744－24－0273

英語 de Senryu⑭

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

哀れ哀れ税に苦しむ役者とか

pity the poor actor
who suffers from
expensive taxes

自分すら救えぬ人の立候補

the candidate
who can't save himself
stands for Parliament

---

pity 哀れな　*poor* 貧しい　*actor* 役者　*suffer from* 苦しむ　こうむる
expensive 費用の掛かる 高い　*tax* 税　*candidate* 候補者　*save* 救う
stand for Parliament 議員に立候補する

～リバーウィローのため息～世界の詩歌㊹：棚橋嘉代子の詩歌活動

棚橋嘉代子さんに初めて会ったのは、「大垣結びの地芭蕉記念館」で開催された大垣市主催の英語俳句教室でした。長年、教職に就き、退職後は大好きな英語を使って何かしたいと思っていたときに、英語俳句教室の案内を見て来られました。お聞きするとわたしの出身校の先輩でした。その後、大垣に英語俳句の会 *IBUKI*（伊吹）が生まれ、現在は英語俳句を楽しんでいる棚橋さんです。彼女は 2016 年に 80 歳を前にして、日英語エッセイ集 *Old Women's Friendship*（合同出版）を出版しました。このエッセイ集は高校生の英語副読本にも最適で、辞書をさほど引かずとも読むことができます。日常の出来事、戦争の記憶、身近な人々との交流など、元英語教師が 79 年の生涯を振り返った内容です。この頁では、*IBUKI* に投句された彼女の日英俳句作品を紹介しましょう。

cherries in full bloom--/don't miss the moment/of falling!
　咲き満ちて花散らんとす刹那かな

Fukushima dogs/look sad--/the finest weather in May
　五月晴　被災地の犬　伏し目がち

far away are the days--/setting off fireflies/in my mosquito nets
　蛍獲り蚊帳に放ちし日は遠く

誹風柳多留一三篇研究 10

山田昭夫・小栗清吾
細井龍夫・伊吹和男
高野範雄
清博美

76 **かきつはたいたまぬやうに公家ハ折**

山田 在原業平が東下りの途中、三洲八橋に来た時、「その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、『かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、旅の心をよめ』といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば
はるゞゝきぬる旅をしぞ思ふ」（『伊勢物語』九段）

これは折句の形式だから、「公家は折り」という次第。

かきつはたあたまをはつて在伍よみ　天六桜2

小栗 賛。庶民が折るといたむ。

細井 賛。本物の杜若ではないから痛まない。

清 賛。

77 **御師のとも岩戸をひらくはさみ箱**

山田 伊勢の御師。年末になると伊勢暦や伊勢神宮のお札、それにひじき、晒し鯨等を供の者に担がせて江戸へ出て、各々の得意先に配って歩いた。その時、供の者が挟み箱を開ける動作を、伊勢神宮の祭神・天照大神の「天の岩戸」の故事に因んで、「岩戸を開く」と詠んだもの。

御師の供へし折ルやうにふたを明　三42

清 賛。

78 **毛せんを立ててうたいふかく入**

山田 吉原の張見世。毛氈を敷いた中央には、お職を張る女郎が座っていた。

毛せんへ孔雀は、たきして居ハり　拾六26

人同シからずもふせんしいて居る　天五宝1

その上妓が見立てられ、「毛氈を立って帳台深く入り」。帳台は貴人の寝台のことだから、当然ながら三蒲団であろう。

因みに帳台を含む句は、他には次の三句のみ。

御てうあひていだいあさく出てしやべり　安八礼2

淀殿ハ帳台浅く出てしやべり　九六28

帳台浅く将門ハ真ッはたか　梅一〇22

小栗 句意は賛。礎稿お示しの例句もあわせて考えると、「帳台浅く」または「帳台深く」が文句取と思うのだがわからす。

伊吹 賛。「帳台深く」は、『絵本太閤記』の「六月朔日・二条城配膳の段」に、「『必ず油断いたすな』と、しめし合はして春長公、帳台深く入り給ふ」と、『妹背山婦女庭訓』の「蝦夷子館の段」に「『身体今日の一挙に極まる、装束せん』と不敵の蝦夷子、帳台深く入りにけり」がありました。

清 賛。文句取謝。

79　一にふじ二にたかの羽の夜討也

山田　富士は富士の裾野での曽我兄弟の仇討ち、鷹の羽は播州赤穂の浅野家の紋所（丸に鷹の羽のぶっちがい紋）で、赤穂義士の吉良邸への討ち入り。共に「夜討ちなり」。初夢に縁起が良いといわれる一富士二鷹三茄子利かせたものだが、初夢は夜見るもので、曽我兄弟も赤穂義士も共に縁起が良かったという次第。

一に富士二に鷹の羽ハ士の鏡　一六二15
一富士二鷹親の仇主の仇　五一15

清　賛。

80　小田原の魚をすそのへかつぎこみ

山田　雨譚註「かしから駿河丁」。小田原は小田原町の魚河岸で、日本橋北詰東の魚河岸。裾野は富士の裾野で、駿河町の越後屋。主題句は、日本橋小田原丁の魚河岸に上がった初鰹を、駿河町の越後屋へ「担ぎ込み」。しかし、初鰹と越後屋を詠んだ句は、管見の限り見たことが無く、不安である。なお、「史伝」では、「富士の巻狩」の項に分類されているが、それなら平凡過ぎて面白味が無いように思う。諸兄のご見解を賜りたい。

小栗　礎稿でよろしいと思う。初鰹でなく普通の魚。「小田原の魚」を「富士」と関係付けて詠もうと思っただけの句だから、あまり現実的なことを考えても仕方がない。

清　賛。

81　わづうかな毛をすつことすおしい事

山田　元服は「少年の男女が始めて大人になる時の礼にて、（略）女子は通例婚期に及んで髪の風を変へ歯を染めたものである。（略）お歯黒だけ附けるを半元服と称し、更に眉毛を剃落すを本元服と称し、通例は懐妊或は分娩の後になすもの」（『川柳風俗志』）。主題句は、女の本元服で、眉毛を剃り落とすというものだが、女性の愛嬌のシンボルたる「僅かな（眉）毛をすっことす」とは、如何に慣わしとは言え、まことに「惜しい事」だというのだ。今でも眉毛を剃り落として、描き眉毛にしている女高生などを見かけるが、まことに「惜しい事」、慚愧に堪えない。

三日月を二ツこそげるおしい事　傍一5

清　賛。

82　かごかきがかえるてうしを一ッふち

小栗「駕昇」とあるが、特に駕籠を担ぐ人間を言うのではなく、駕籠一般、川柳でお馴染みの四つ手駕籠のことと考えていいだろう。さっき追い抜いて行った駕籠が、目的地まで行って客を降ろしてもう帰ってきた。それなのにこちらの牛の歩みはノロノロとして一向に進まない。「さあ、頑張って早く歩け」と牛方が牛を一つ打つのである。

ただ、「駕籠」と「牛」の組み合わせの句はいくつかあるが、先人はいずれも品川遊廓の句としておられる。

かけるかご見て牛かたも壱ツぶち　一二12
駕がきハ帰るに牛ハひとつ所コ　一二15
四ツ手駕牛の小百もかけぬける　一〇11
四手かご牛をぬけると馬かこミ　安八梅2

これは、「牛」から高輪「牛町（うしまち）」を連想させる趣向と思われる。牛町は「高輪車町前の道の俗称」（江戸文学地名辞典）で、『江戸名所図会』には「牛小屋　牛町にあり。牛を畜する家多く、牛の数一千疋に余れり」とあって、絵には多数の牛や牛車が描かれている。

これらを勘案、主題句も単なる写生句ではなく、前述の句と同じパターン句の一つとしておく。

清　賛。

愛染帖

新家　完司　選

（投句274名）

君が代はただ聞くだけの一年生

三田市　北野　哲男

（評）「ゲッゲゲのゲ～と違うなあ、変な歌だなあ」と聞いている一年生。そう、これからちょっとややこしい世界が始まるのだ。

火種などなくても恋はできるのよ

松山市　大内せつ子

（評）特別なキッカケなどないのに、いつの間にかその人のことばかり考えて仕事も捗らない。これは痴呆症ではなく「恋」だろう。

収入は無いがスマホは手放さぬ

三原市　鴨田　昭紀

（評）起きてから寝るまで、片時も身から離さず、何かにつけてタップしたりフリックしたり。スマホが無いと狂ってしまいそう。

「美味しい！」が得意料理にしてくれた

羽曳野市　宇都宮ちづる

（評）料理をした人への何よりお礼は「おいしい！」の一言。それは、「よし、また頑張ろう！」と元気づけてくれる魔法の言葉だ。

メール良しFAXも良し手書き良し

浜松市　中田　尚

（評）自筆でないと味がない、などとワガママは言わない。悪意を持たず私に繋がろうとしている通信手段は総てウエルカム！

国中に桜ヶ丘という地名

橿原市　居谷真理子

（評）桜の文字が美しい。「さくらがおか」という響きが心地好い。一年中花の季節のようなムードで、地名のみならず校名も多い。

「加齢です」言葉変えれば「治らない」

松江市　栂瀬みちを

（評）医者の逃げ口上のような「加齢現象」。要するに「これ以上は良くなりません。現状維持に務めましょう」ということだろう。

私はデート断らない女

豊中市　きとうこみつ

（評）お誘いを拒絶するのは失礼。食事程度ならいつでもOKだが、その先は冷静に判断させていただく、ということだろう。

高画質映る番組低俗化

福井市　伊藤　良一

（評）ハード面はどんどん進化しているが、肝心の中身はくだらなくなるばかり。特に高齢者向けの番組に見るべきものがない。

太ろうがヤセようがもうかまへんわ

三田市　上田ひとみ

（評）大切なのは「いま楽しく生きているか」ということ。見栄や体裁に振り回されている間はまだまだ修行が足りないのである。

墓石がみな見上げだす桜咲く　橋本市　石田　隆彦

止せと言われしきりに花見したくなる　海南市　小谷　小雪

躓いて母校の桜会いに行く　大阪市　石田　孝純

派手な服ルンルン気分花の下　奈良県　渡辺　富子

散る桜見送る梨の花の陣　鳥取県　竹信　照彦

花吹雪がいいな僕のお葬式　岡山市　丹下　凱夫

故郷の桜見物今年パス　三田市　辻　開子

ええお天気やからユニクロに行こか　大阪市　谷口　義

大好きなアンパン買いに行く散歩　大阪市　江島谷勝弘

朝一番ちりるれろ～はよく回る　岡山県　田中　恵

母校とは渾名の系図あるところ　唐津市　仁部　四郎

遺影でも撮るかと不意に言う夫　奈良市　大久保眞澄

お先にもいいけど遺影決めといて　尼崎市　山田　耕治

大阪市　高杉　力
厚化粧も怖いがすっぴんも怖い

河内長野市　山岡冨美子
歳月に付いてはいないバックギヤ

寝屋川市　廣田　和織
慢性の金欠病はステージ4

大阪市　平井美智子
骨のない魚ばかりを食べている

青森県　月波　与生
多数決一度も勝ったことがない

大阪市　大沢のり子
企業戦士の子が筍の味を知る

広島市　岸本　清
お人好しの医者に縋って老い二人

鳥取県　斉尾くにこ
解凍に時間がかかる仲間割れ

弘前市　高瀬　霜石
広島に住めば赤シャツ当たり前

松江市　石橋　芳山
八十歳過ぎたころからお年寄り

大阪市　金川　宣子
アドバイスのポンでパソコンよみがえる

大阪市　小野　雅美
日記帳買ったままですもう四月

奈良県　長谷川崇明
スーパーへ行って帰ってああしんど

米子市　成田　雨奇
酔っぱらいかならず酔ってないと言う

大阪府　米澤　俶子
よく曲がるツムジは左ヘソは右

明石市　糀谷　和郎
大丈夫今度はワタシ世帯主

佐賀県　真島久美子
大阪市　高杉　千歩
若手俳優の名前覚えるのはやめた

石川県　堀本のりひろ
ひひひひひひひひひひ孫の名を忘れ

黒石市　北山まみどり
鳥取市　上山　一平
サイン色紙読めても知らぬ人ばかり

大阪市　岩崎　公誠
理科体育社会数学苦手です

尼崎市　清水久美子
産院の脈打っている窓明かり

羽曳野市　徳山みつこ
南瓜の苗がひょっこりゴミ捨て場

三田市　谷口　修平
尼崎市　宗　和夫
手を合わせ思い悩むは墓仕舞い

岡山県　高岡　茂子
長岡京市　山田　葉子
筍はきっと誰かがくれるはず

大阪市　古今堂蕉子
筍茹でる大鍋やっと出番だよ

三田市　福田　好文
予定なし晩酌までをどう生きる

松江市　相見　柳歩
お隣の葬式さえも御呼びない

神戸市　能勢　利子
チューリップの数数えてる百一歳

来年は二人で植えよ百二本

二度とない八十一よ花と飲む

風呂場ならよしと昭和の流行り歌

夕焼けの奥から亡夫の声がする

古シャツがモップに化けてデビューする

無題だなこんなときにも寝て食べて

その意固地たたんでしまえ蝶になれ

伸び代があるなと思う不協和音

霜ふりの筋肉になりパワー出ぬ

エンディング・ノートに書いた隠し金

そういえば位牌磨いた事が無い

物忘れ良しひょんなとこから万札が

馴れ馴れしいツバメ座敷に巣を作る

コンビニの灯りに心盗まれる

平均点で生きる幸せ噛みしめる

元気なのが子供孝行ジム通う

好きなんて言うた？　酔うててんなあ

気のせいじゃないよ仏も神もいる

大阪市　山本加お里
まだ傘寿川柳好きで呆けられぬ

熊本市　杉野　羅天
無駄を楽しむ川柳という陶冶

西宮市　髙橋千賀子
正解は一つじゃないさ五七五

防府市　坂本　加代
取り組めば理屈に合わぬ難解句

堺　市　村上　玄也
体調の良くない時は句も抜けず

堺　市　澤井　敏治
偏西風に欧州からは異種コロナ

奈良市　加藤江里子
ウイルスも瀬戸大橋を渡り増え

松山市　郷田　みや
春雨を言い訳にして自粛する

枚方市　山口弘委智
更にまた自粛の報せ春遠く

豊中市　藤井　則彦
コロナ禍に癒しのラジオ深夜便

箕面市　広島　巴子
ステイホーム　ビデオで夫婦花見酒

箕面市　中山　春代
家ごもり洋画のビデオにも飽きた

塩竈市　木田比呂朗
グータッチ一年経って様になり

大阪市　大川　桃花
怠け癖みんなコロナの所為にする

豊橋市　西郷紀美代
銀行も郵便局も暇そうだ

豊中市　松尾美智代
マスクしてジムでマシンと遊んでる

鳥取市　前田　楓花
困ったらマスクで隠す手があった

和歌山県　森下よりこ
マスクしているので知らんふり出来る

神戸市　米田利惠子
そこそこの顔をマスクが邪魔をする

寝屋川市　川本　信子
自信ない顔がマスクに救われる

神戸市　みぎわはな
サングラス二重マスクであんた誰

貝塚市　石田ひろ子
マスク越し亡夫と話す墓参り

米子市　野川　宣子
マスク手洗い後は静かにしてなさい

西宮市　福田　正彦
ワクチンに鍵を預けた沈静化

池田市　倉本　一弥
在宅勤務ママは指示語がふえだした

横浜市　菊地　政勝
最近はスキンシップも死語となる

豊中市　松田蟻日路
会話より大音量の換気扇

岩国市　上村　夢香
友にノック遠くて音が届かない

鳥取市　山下　凱柳
幸せ太りコロナ太りとコラボする

東大阪市　佐々木満作
コロナ禍をよそに自然は四季巡る

神戸市　冨永　恭子
コロナ禍もいつも通りに梨の花

横浜市　川島　良子
解除でも人混み躊躇してしまう

大阪市　島田　明美
まあだだよワクチン打ってからあそぼ

高槻市　初代　正彦
逆風の聖火リレーも辛かろう

三木市　山口ヨシエ
輪になって盃交わす日は遥か

河内長野市　梶原　弘光
ダイエット小腹が邪魔をして困る

生駒市　饗庭　風鈴
お三時はシルクスウィート焼き芋の

伊丹市　延寿庵野鶴
トッピングしたジェラードへ黄砂降り

鳥取県　山下　節子
血糖値砂糖一つに思案する

枚方市　藤田　武人
老兵の汗しみ込んだ土踏まず

越谷市　久保田千代
他人には許せることが胃の淵に

大阪府　大浦　福子
五ツ六ツ玉子を割ってウサ晴らす

倉吉市　大羽　雄大
三千歩歩いて酒に許可もらう

和歌山市　柏原　夕胡
晩酌に癒されているコロナ禍よ

枚方市　栃尾　奏子
ワンカップ今日を許しておくとする

三田市　堀　正和
我が家でも八時までだと酒終う

松江市　中筋　弘充
阪神が引き分けたって要るお酒

三田市　村田　博
松山のVを祝ってもう二合

大阪市　今村　和男
高級酒少しついでは固く締め

香芝市　山下　純子
バカラグラス千円ワインも色冴える

土佐清水市　辻内　次根
飲み比べしたがどちらもみな美味い

米子市　伊塚美枝子
スナックの灯り恋しいでも自粛

富田林市　山野　寿之
立ち飲みに通うぐらいはある財布

豊中市　水野　黒兎
晩酌とは言えない今日の薬用酒

香南市　桑名　孝雄
老い先はないのになんでひとり酒

奈良市　山本　昌代
三口ほどのお酒に眠り誘われる

羽曳野市　吉村久仁雄
酒と睡魔の闘い余生は忙しい

鳥取市　山野すみれ
端っこに付いているけど地獄耳

美作市　岡本　余光
予想超え長く生きたがあと少し

大阪市　内田志津子
何できる残り少ない年月で

松山市　柳田かおる
喝采もなくて腐葉土にもなれず

西宮市　緒方美津子
鋏にメガネあっちこっちとよく歩く

男鹿市　伊藤のぶよし
ヒントがあれば思い出す脳である

河内長野市　森田　旅人
ルノアール観て体形に自信持つ

大阪市　森　廣子
あの辺の空気美味そう冬銀河

豊中市　上出　修
クリーンな空気地球も欲しかろう

鳥取市　田賀八千代
骨折と言われた途端痛み増す

宝塚市　丸山　孔一
ふる里に墓地だけ残し遠く住む

大阪市　岡田　恵子
終活はまだ煩悩が邪魔をする

境港市　藤原　久直
ピカピカにクラブ磨いて初ゴルフ

大阪市　宇都満知子
跳ねるからカレーうどんは黒い服

高槻市　片山かずお
捨てませんまずメルカリへ出してみる

米子市　吉田　陽子
会いたいなあ金魚すくいに綿飴屋

高槻市　松岡　篤
入社式だとすぐわかる一張羅

西予市　黒田　茂代
つまらぬ時はどのチャンネルもつまらない

南あわじ市　萩原　狸月
アナログの温み楽しむ老いの日日

宮崎県　恵利　菊江
鍋物に好物さがし笑む家族

河内長野市　藤塚　克三
妻旅行俺は留守番猫恋路

岡山県　藤澤　照代
ちゃんづけで呼ばれ夫より古い友

鳥取市　副井ゆたか
指先を怪我して気付くその役目

大洲市　花岡　順子
見てほしいとこだけガラス張りにする

江南市　脇田　雅美
マイナンバーいくつもの紐付いている

神戸市　横田　次郎
まだ青い削るに惜しい角がある

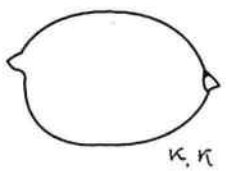
豊中市　齋藤奈津子
雨の葬傘の雫に目の雫

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句342名）



「リアル」　石橋芳山選

生焼けのリアルを炙るヨガファイア　笠岡市　藤井　智史
手も足ももちろん口も良く動く　米子市　伊塚美枝子
またひとつ歳をとるのがめでたいか　和歌山市　まつもともとこ
断りもなく胃袋へ内視鏡　米子市　竹村紀の治
甚五郎の猫が毎晩出歩くと　神戸市　みぎははな
芸術と言われ観ている下心　安来市　原　徳利
経済か命かさてさてさてさて　橿原市　居谷真理子
ちゃんと見てください庶民の現実　奈良市　大久保眞澄
リアルよりドラマの恋に溺れてる　箕面市　出口セツ子
レプリカをリアルに飾る美術館　横浜市　菊地　政勝
涙腺をぐぐっと突いてくるリアル　奈良市　山本　昌代
免許証返すか車探すかだ　米子市　成田　雨奇
時事吟も二ヶ月経てば冷めたピザ　三田市　多田　雅尚
妻が入院右往左往のカタツムリ　神戸市　輿水　弘

「リアル」　古今堂蕉子選

若冲の鶏に毎朝起こされる　和歌山市　西川　千鶴
気のゆるみをリアルに見せる棒グラフ　堺　市　坂上　淳司
ロシアンルーレット六番目のリアル　青森県　月波　与生
ドラマなら辞表破ってくれたのに　大阪市　小野　雅美
意気軒昂なれども老化はリアル　塩竈市　木田比呂朗
マスターズリアルタイムで見て遅刻　加西市　山端なつみ
五年ごと証明写真は正直で　大阪市　宇都満知子
二世代で組んだローンに悩まされ　広島市　有田　澄子
高齢化車庫の空いてる家ばかり　長岡京市　山田　葉子
原爆の翌日に見た腐敗臭　唐津市　坂本　蜂朗
桜の下に埋めてほしいと書いてある　大阪市　島田　明美
クシャミ三回肋骨が折れました　大阪市　横山　里子
ままごとに内輪もめまでさらされる　犬山市　金子美千代
レシートは忘れずもろてくるんやで　桜井市　安土　理恵

あるがまま知ると心が海になる　名古屋市　冨田　末男
夕陽にも都合沈んでいきました　芦屋市　上野多惠子
ない袖は振れぬと頭下げに行く　吹田市　西沢　司郎
しあわせでいますが風が吹き抜ける　鳥取県　斉尾くにこ
重箱の隅をほじくるリアリスト　河内長野市　梶原　弘光
なるほどなあ敵は夜中に鍛えてる　堺　市　内藤　憲彦
目元だけちょっと化粧でお買物　越谷市　久保田千代
思いきり笑い飛ばして生きてます　生駒市　飛永ふりこ
七十歳のリアル矢沢に魅せられる　和歌山市　佐藤　まき
スポーツは現場に限る球の音　可児市　板山まみ子
マニキュアの爪でいわしの腹を裂く　大阪市　森　廣子
メイクしたゾンビのままでするランチ　枚方市　藤田　武人
本気度を試されているダイビング　松山市　栗田　忠士
国産と聞けば美味しくなるお肉　神戸市　能勢　利子
ゴミの日をカラスのほうが覚えてる　大阪市　島田　明美
フィクションかノンフィクションかミャンマーよ　鳥取県　竹信　照彦
切除した胆嚢医師に見せられる　藤井寺市　鈴木いさお
よく視れば才なし金なし色気なし　枚方市　藤村　亜成
しっかりと鏡をみたらしょげるだけ　長岡京市　山田　葉子
内面を知りたいけれど怖い気も　上尾市　中村　伸子
アップでは撮られたくない女優さん　西宮市　高橋千賀子
今日もまたリアルタイムで鶴を折る　松山市　大内せつ子

逼迫な医療現場にカメラ入れ　犬山市　関本かつ子
リアルタイム自国に銃を向ける軍　和歌山市　佐藤　まき
今更に歩幅合わせてみたとても　越谷市　久保田千代
戦争経験リアルな語り口　吹田市　太田　昭
聞こえぬように馬鹿じゃないのと言ってみる　上尾市　中村　伸子
夕陽にも都合沈んでいきました　芦屋市　上野多惠子
川柳なら広辞苑より明鏡派　大阪市　江島谷勝弘
密談を寝返りさせる茶封筒　河内長野市　坂野　澄子
リアル過剰見る気削がれる歳になり　大阪市　樋口　眞
リアルタイム電話の先が揉めている　和歌山市　古久保和子
詰め放題欲がリアルにこぼれ出す　倉吉市　岡崎美知江
ＩＴが築く温度の無いリアル　宝塚市　丸山　孔一
当確とリアルタイムの味気なさ　奈良県　中原比呂志
鶴の一声漁民の声は届かない　河内長野市　木見谷孝代
通帳を振るとチャリンと音がする　寝屋川市　廣田　和織
あわよくばしかしリアルな試着室　奈良県　長谷川崇明
アメリカの汚点リアルに届く朝　広島市　松尾　信彦
没句ですノートの隅で耐え忍ぶ　三田市　野口真桜子
国産と聞けば美味しくなるお肉　神戸市　能勢　利子
現金で呉れと言われた半返し　尼崎市　清水久美子
トカラ列島ゆれはリアルを加速する　岡山市　永見　心咲
突然の死別を癒す保険金　池田市　太田　省三

迷路から脱出できぬ赤いペン　黒石市　北山まみどり
嘘などはつかぬと言ったひとなのに　和歌山市　北原　昭枝
本物より高い贋作あるのです　三田市　村田　博
夫婦だと思う他人だとも思う　岡山市　工藤千代子
玉手箱開けてリアルを見る懼れ　河内長野市　森田　旅人
見間違い信じられない厚化粧　鳥取県　本庄　汪
リアルタイム電話の先が揉めている　和歌山市　古久保和子
造花とは気付かずせっせ水をやる　大阪府　大浦　福子
顔芸は歌舞伎役者のど迫力　池田市　倉本　一弥
密談を寝返りさせる茶封筒　河内長野市　坂野　澄子
現実から一時避難の繭の中　海南市　小谷　小雪
リアルな音だ体を輪切るガガガガガ　松江市　中筋　弘充
真実は三割ほどの私小説　尼崎市　藤井　宏造
家の中覗いたようなおままごと　豊橋市　西郷紀美代
インスタ映えするけど不味いお弁当　宝塚市　岸田　万彩
死に際の演技に賭ける斬られ役　河内長野市　中島　一彌
効果音わたしの胸の鼓動など　藤井寺市　太田扶美代
腰抜けていたとは言えぬ震度六　唐津市　山口　高明
リアルとは財布の中の景色です　唐津市　仁部　四郎
波かぜの立てぬくらしにいる　どうぞ　大阪市　柴本ばっは
先の事私自身も分からない　奈良市　仲西　賛郎
恋詩集より豚饅の方が良い　大阪市　平井美智子

マニキュアの爪でいわしの腹を裂く　大阪市　森　廣子
おっとっとリアルな疑似餌ご用心　大阪府　大浦　福子
スタメンの故障待ってる二軍の目　神戸市　青山ひろし
ワクチンの通知来ました九十歳　島根県　伊藤　寿美
人間をリアルに抉る五七五　大阪市　阪本　秀子
銭払うだけの男を誘い出す　唐津市　山口　高明
もう一人の父さんを見た草野球　和歌山県　三枝眞智子
ジェンダーに後ろめたさのある盤寿　大阪市　近藤　正
オレオレのリアルに負けて二百万　寝屋川市　平松かすみ
インスタ映えするけど不味いお弁当　宝塚市　岸田　万彩
側溝のヘドロまみれになるリアル　笠岡市　藤井　智史
GPSリアルタイムで縛られる　岡山県　藤澤　照代
濡れ場シーン何も感じぬ情けなさ　奈良県　安福　和夫
切り取った写真の裏に物語　富山市　伴　よしお
知人感染リアルさ増してくるコロナ　豊中市　きとうこみつ
涙腺をぐぐっと突いてくるリアル　奈良市　山本　昌代
よく見れば案山子がしてた野良仕事　大阪市　大川　桃花
残酷なほどにリアルな解像度　大阪市　髙杉　力
かたり部も老化リアルに聞く昭和　河内長野市　辻村　ヒロ
甚五郎の猫が毎晩出歩くと　神戸市　みぎわはな
嫌なほどリアルだミャンマーの悲劇　鳥取県　竹信　照彦
バーチャルリアル所詮にせ物無味無臭　京都市　清水　英旺
天気図のリアル一段と今朝の冷え　京都市　都倉　求芽

ステージ4だとさ　さみしく笑う友　弘前市　高瀬　霜石
年棒がほんにリアルなプロ野球　丹波篠山市　酒井　健二
あわよくばしかしリアルな試着室　奈良県　長谷川崇明
高画質心の襞も写し出す　大阪市　岡田　恵子
写真かと目をしばたたく鉛筆画　加西市　山端なつみ
通帳を振るとチャリンと音がする　寝屋川市　廣田　和織
何故だろう大人になるとズルくなる　神戸市　槇田　次郎
心電図嘘がつけずにあからさま　三田市　辻　開子
ウっと来るコロナ感染棒グラフ　高槻市　松岡　篤
ビチピチのヒップラインがリアルすぎ　豊橋市　小松くみ子
病名を隠してくれぬ内視鏡　大阪市　小野　雅美
ワクチンも打てぬ体になりました　阿南市　小畑　定弘
浮気って法律違反なんですよ　枚方市　栃尾　奏子
どう見ても噂じゃないよあのふたり　三田市　上田ひとみ
私をリアルな波にする恋よ　岡山市　永見　心咲
葬式の終りリアルに金のこと　大洲市　花岡　順子
鏡よ鏡少し脚色出来ないか　黒石市　石澤はる子
ロシアンルーレット六番目のリアル　青森県　月波　与生

秀　句

立ったまま下着穿けなくなってきた　三田市　福田　好文
レシートは忘れずもろてくるんやで　桜井市　安土　理恵
本当に刺した気がする右隣　佐賀県　真島久美子

自傷痕リアルと夢のリフレーン　神戸市　米田利恵子
本物の波よりリアル北斎画　丹波篠山市　酒井　健二
ロボットが人間らしくなってきた　松山市　柳田かおる
醒めた眼でぼくに現実突きつける　枚方市　藤村　亜成
あるがまま知ると心が海になる　名古屋市　冨田　末男
幸せをバラバラにした立ち話　枚方市　栃尾　奏子
妻が入院右往左往のカタツムリ　神戸市　輿水　弘
格差の世曾孫の夢は正社員　神戸市　奥澤洋次郎
医と経が戦うコロナ禍のリアル　熊本市　杉野　羅天
メイクしたゾンビのままでするランチ　枚方市　藤田　武人
一人が巣立って廃校となる過疎　橋本市　石田　隆彦
時事吟も二ヶ月経てば冷めたピザ　三田市　多田　雅尚
敗者のリアルを美談で終らせず　大阪市　原田すみ子
チャップリンのパントマイムの底力　沖縄県　宮　すみれ
黄昏れて遊び相手も医者通い　島根県　伊藤　玲峰
フィリップも田中邦衛も逝きました　生駒市　饗庭　風鈴
手話の指リアルタイムを追っかける　宇部市　平田　実男
死に際の演技に賭ける斬られ役　河内長野市　中島　一彌

秀　句

リアルとは財布の中の景色です　唐津市　仁部　四郎
ニセモノになる瞬間を見届ける　佐賀県　真島久美子
病葉のハラリと音のする訃報　藤井寺市　太田扶美代

「帽子」

（投句　242名）

西村哲夫選

弱いから別のチームの野球帽　横浜市　長島亜希子
生えたツノなんとか帽子隠してる　大阪府　大浦　福子
ビル風に枯れ葉と帽子戯れる　高槻市　島田千鶴子
胎動に無限の夢を編む帽子　貝塚市　石田ひろ子
一年生未来は無限黄な帽子　香芝市　大内　朝子
追いかけて子等に被せる夏帽子　堺　市　今井万紗子
カツラの事帽子帽子と言うジイジ　大阪市　岩崎　玲子
絵画入門まずベレー帽を買う　奈良市　大久保眞澄
ベレー帽鉄腕アトム連れてきた　西宮市　福田　正彦
斜に被りウィンク一つして出かけ　大阪市　古今堂蕉子
身仕度と言っても帽子かぶるだけ　岐阜県　喜多村正儀
肩書きを被りピチピチ初鰹　大阪市　石田　孝純
爺ちゃんの赤い帽子ではしゃぐ孫　鳥取市　谷口回春子
半額の帽子が頭守ります　海南市　小谷　小雪
大道芸おひねり待っている帽子　三田市　村田　博
つば広の帽子が邪魔なキスシーン　奈良市　宇賀　史郎
少しだけ後ろめたさのある帽子　富田林市　中村　惠
現実を晒したくないニット帽　三田市　多田　雅尚
懸命に黄色い帽子渡り切る　神戸市　土田　和宏
桜吹雪帽子も飛んでいっちゃった　岡山市　丹下　凱夫
土筆坊待ちかねている春帽子　鳥取県　門村　幸子
あの人は只の帽子で終えた人　宝塚市　丸山　孔一
春夏秋冬帽子も恋も変えてみる　箕面市　酒井　紀華
野球帽かぶると実にいい男　奈良県　安福　和夫
ナースキャップ外し自由に歩きたい　奈良市　長谷川崇明
綿帽子遠い昔のお嫁入り　大阪市　田中　廣子
被るから禿げる　禿げてるから被る　藤井寺市　鈴木いさお
町工場　世界の技に脱帽だ　弘前市　福士　慕情
どこいったジュリーの投げたあの帽子　大阪市　岡田　恵子
旅さきの隠れ蓑にもした帽子　津山市　高橋由紀女
制帽に社会を守る決意見る　鳥取市　山下　凱柳
ご自慢の正ちゃん帽を形見分け　交野市　山野　双葉

佳　句

大将の帽子を取った騎乗の娘　尼崎市　山田　厚江
断捨離の帽子案山子に良く似合う　米子市　後藤美恵子
つくも髪帽子と揺れる気高さよ　熊本市　杉野　羅天
辛抱が撮った富士山の笠雲　岡山県　藤澤　照代
駅長の帽子が似合う招き猫　三田市　谷口　修平

人

制帽も凜凜しく女性運転手　西予市　黒田　茂代

地

余所行きをかぶるとポチが離れない　大阪市　島田　明美

天

抗ガン剤の苦しみを知る帽子　尼崎市　清水久美子

軸

囲碁で言う帽子打たれて進めない

「群れる」

（投句　241名）

緒方　美津子　選

群れを出て風の動きがよく見える　松尾美智代　豊中市
温暖化魚の群れが遠ざかる　太田扶美代　藤井寺市
スキャンダルへどどっと群れる週刊誌　米澤　俶子　大阪府
群れ騒ぐ若者削除キーの中　徳山みつこ　羽曳野市
輪の中に入ればこころ軽くなる　榎本　舞夢　大阪市
群れること避けてコロナ禍独り酒　藤井　智史　笠岡市
徒党組み弱い自分を守ってる　山下　節子　鳥取県
白鳥の群れのトップにある矜持　米田　恭昌　奈良市
鍋奉行一度もせずにもう四月　上田ひとみ　三田市
コンビニの灯りに群れる塾カバン　真島久美子　佐賀県
一匹では生きていけないアリである　黒田　茂代　西予市
群れたいな句会飲み会カラオケへ　髙瀬　霜石　弘前市
勝ったのは弱くて数の多い方　岸本　宏章　鳥取市
群れて咲き墓守ってる彼岸花　鴨田　昭紀　三原市
人の群れ目掛けてコロナ忍び寄る　久保田千代　越谷市
雑魚だから群れて敵から身を守る　大内　朝子　香芝市
大海で群れて大きく見せる雑魚　奥澤洋次郎　神戸市
とんぼりの灯が寂しいと泣くグリコ　柴本ばっは　大阪市
安心のできる優しい群れの中　谷口　修平　三田市
群衆は機関銃にも恐れない　柏原　夕胡　和歌山市

鰯の群れの中でみすゞの詩が浮かぶ　柳田かおる　松山市
群れを出てガイドになった奈良の鹿　藤塚　克三　河内長野市
騒がしい葉裏蟷螂の子群れる　渡辺　富子　奈良県
SDGs除草を担う山羊の群れ　古今堂蕉子　大阪市
いかなごの群れに出合って春きざし　伴　よしお　富山市
半額の値札に群れる午後六時　瀬島流れ星　明石市
海猫の群れる海です日本海　村上　玄也　堺市
人の群れ蠢く朝のターミナル　山下　純子　香芝市
多勢の中でおぼれそうな私　堀　正和　三田市
大群で女の口が攻めてくる　山野　寿之　富田林市
ゆるやかに蛍群れ飛ぶ過疎が好き　栗田　忠士　松山市
群れるのはご免尻尾は切り捨てた　江島谷勝弘　大阪市

佳句

一斉に咲くから桜美しい　居谷真理子　橿原市
標的にされないように群れている　岡崎美知江　倉吉市
中心がずれると脆い雑魚の群れ　福士　慕情　弘前市
信念へ山を動かす雑魚の群れ　中原　章子　米子市
自粛の堰切れて自制のきかぬ群れ　齋藤奈津子　豊中市

人

五百羅漢力まず群れておられます　村田　博　三田市

地

錆びついた原爆ドーム鳩の群れ　花岡　順子　大洲市

天

臆病で何かというとすぐ群れる　太田としお　宝塚市

軸

元気げんき群れて親持つ燕の巣

初しぐれ教室

題 ― 鳥

居谷 真理子

今回、投句の中にどうしても判読できない文字がありました。作者に、というよりその句に対して申し訳ない思いです。

どうぞ皆さん、達筆である必要はまったくありませんが（むしろ達筆の書き流しは読み取れません）、川は川、柳は柳と、はっきり分かる字でお書き下さい。老眼の進んできた私からのお願いです。

（原は原句　参は参考句）

原 ムクドリに邪魔されながら餌付けする　紀美代

餌をあげたいのはどんな鳥？

参 ムクドリが奪うスズメに撒いた餌

参 ムクドリが来ぬ間に小鳥たちに餌

原 タカの声テープで流すカラス駆除　えい子

駆除という言葉が重いです

参 タカの声テープで流すカラスよけ

参 カラスまだテープと知らぬタカの声

原 欲目でも鷹にはなれぬ子や孫は　行久

参 欲目でも鷹にはなれぬ子も孫も

参 子や孫は鷹にはならず仲が良い

原 庭の木に宿を求める雀たち　ひとみ

「雀のお宿」、メルヘンですね。

参 庭の木が雀の宿になりました

原 への字書く鳶の姿見ぬ都会　光雄

辞書には「空中を輪を描きながら飛び」とあります。そういえば〈トンビがくるりと輪をかいた〉という歌もありましたっけ

参 大空にトンビのの字見ぬ都会

次の三句はもうひとひねりプラス

原 籠の鳥ならぬ自粛で出られない　蟻日路

参 籠の鳥自粛自粛と鳴いている

原 ゴミの日を待ってるカラス集団化　(川)信子

参 ゴミの日を待ってカラスのワンチーム

原 焼鳥は手軽に酒の友になる　風露

参 酒は友ヤキトリ友の友である

原 ついばむように手紙読み翔ぶ孫青空（そら）へ　弘

色々入れすぎて難しい句になりましたね。「ついばむ」は面白い表現です。

参 幼子のついばむように読む手紙

参 文字読めて孫の心は空を翔ぶ

原 居心地が悪くて逃げた青い鳥　照枝

このままでもいいのですが

参 居心地が悪いと逃げた青い鳥

参 居心地が悪かったのか青い鳥

原 白鳥水面に浮く白い花　ミヨノ

ハクチョウ、シラトリ、どう読んでも四音ですね。また、スイメンよりミナモの方がこの句に合います。

参 白鳥は水面に咲いた花である

原 メジロ来る桜の花が目白押し　風鈴

メジロと目白押し、洒落ですか？う～む

参 満開でメジロ迎えるおもてなし

原 うぐいすが鳴くぎこちなさ弥生空　くみ子

うぐいすは別名「春告鳥」。弥生は不要。

参 うぐいすはまだぎこちない山の道

原 鶯は梅に聴かせる谷渡り　眞智子

「谷渡り」があるので鶯は不要。

参 山かげの梅に聴かせる谷渡り

原 あのつばめ今年も来たが来ぬ息子　勝正

参 コロナ禍につばめは来たが来ぬ息子

参 律儀にもつばめは来たが来ぬ息子

原 復興を遂げただろうか燕の巣　令位子

いい句ですねえ。明るさを添えて

参 復興の途上の軒に燕の巣

原 鳥の目で眺める空の青さ欲し　風羅

参 鳥の目で眺めてみたい空の青

参 鳥の目が欲しいな空が真っ青だ

原 ゴミ出し日カラスと私知恵比べ　(樫)良子

参 ゴミ出し日カラスの知恵も進化中

参 ゴミ出し日カラスの知恵に今日も負け

原 春になり鳥のさえずりにぎやかに　ひでお

雄鳥が雌を呼ぶ「さえずり」。

参 つややかなさえずりを聞く春となり

原 九官鳥笑い上戸の高わらい　閑

笑い上戸、高わらい。くどくなりました。

参 九官鳥笑い上戸が一羽いる

原 鳴きさわぐ猫は裏声鳥来たと　ゆき

猫の裏声とは言い得て妙。

参 鳥来たと猫裏声で騒ぎたて

原 数しれず鳥のさえずり三田の地　マユミ

作者は三田（さんだ）市の方。関東人には「みた」と読まれたそうです。

参 様々なさえずり聞ける里に住む　次郎

原 職を去りカラスの鳴かぬ街に生む

生む？住むの間違いかと思いますが…

参 定年後もカラスの鳴かぬ街に住む

原 知っちゃった白い鷗の冷たい目　不二夫

鷗はたいてい白いですよ。

参 旅先で知った鷗の冷たい目

原 渡り鳥環境変わり戸惑って　弥生

もう少し具体的に

参 渡り鳥池が団地になっていた

原 野鳥の巣箱設置して春を待つ　(澤)良子

心優しい内容ですのに言葉が固いです。

参 木に巣箱かけてやがての春を待つ

原 ニワトリか玉子が先か朝になり　尚

玉子は料理用の言葉。この場合は卵の方がいいでしょう。でも本当にどちらが先？

参 ニワトリか卵が先か大議論

原 はね閉じた孔雀は人に阿ねない　睦子

こまかいところが気になりました。三カ所変えてます。

参 羽根閉じて孔雀は人に阿ない

原 地域猫カラスと分け合う晩御飯　双葉

地域猫という言葉も一般的になりましたね。中八が残念です。

参 地域猫カラスと分ける晩御飯

原 往生の夢海原渡る鳥になる　一弥

同感！

参 逝く時は海原渡る鳥であれ

原 鳥から見ればヒトは地を這う巨大アリ　通則

上七も巨大アリの例えもちょっとしんどい。

参 鳥の目にヒトは地を這う不自由さ

原 渋滞を抜け出したいよ鳥になり　義明

参 大渋滞愛車に羽根があったなら

参 渋滞の空をカラスの二羽三羽

原 二度寝中ケキョと聞こえた起きなけりゃ　開子

春はとにかく眠い。二度寝が効いてます。

参 二度寝する私を叱るケキョの声

廣子さん、課題を「島」と勘違いなさいました。掲載できませんが悪しからず。

[佳句]

閑古鳥いつまで鳴かす繁華街　厚子

母さんの声でオウムが起きなさい　(貝)正子

[今月の推せん句]

ゴミ散乱カラスが晒す暮らし向き　押川胡坐

テンションの高さインコに罪はない　髙木道子

伝書鳩ぼくの意見はありません　秀爷

川柳塔鑑賞

同人吟　早川遡行

―5月号から

中庭でくすぶっている似非詩人

桑原道夫

コロナ自粛も一年を過ぎ一向に収まる気配もない。大会も句会も中止のなか、似非詩人は自宅に籠り中庭でくすぶっている他ない。

友達が来るので鍵は掛けてない

谷口義

鍵をかけない、山村ならともかく大都市の大阪で。余程親しい友人のようだが、セールスマンや、怪しい人が突然訪ねてきたらと思うとやはり気にかかる。心の鍵は確り閉めておいた方がいいのでは。

一病という爆弾を抱いている

永井松柏

六十過ぎると誰でも気になる病気の一つは持っている。老境に向かって元気になっていくことはない。重いか軽いかの差だけである。しかしいつ爆発するか判らないというのは尋常な病ではない。

お先にどうぞ喜寿には喜寿の車間距離

吉田陽子

追い越され腹がたったのは若いころのこと。喜寿を迎えたいまでは、気持ちよく道を開けやり過ごすこともできる。

マスクして今日もわが身の置き所

髙田美代子

もう一年もマスク生活が続いている。さらに感染率の強い変異種が出て、いつ収まるか判らない第四波へと突入、「移らない、移さない」の脅えた生活がこれからも続くと思うと、悲しいー。

受賞してそれから険し趣味の道

川島良子

私もそうでした。初心のころたまたま「川柳塔賞二席」を受賞、川柳塔まつりで表彰されて以来悪戦苦闘の毎日でした。

以来、駄作を続けながらも川柳塔の諸先輩に見守られて今日に至っている。継続は力なり。めげずに頑張ってほしい。

物忘れ言った言わない日が暮れる

榎本舞夢

私も毎日そんな生活を過ごしています。確りしているようでも八十四にもなると、言った言わない、薬飲んだか、めしは食ったか、など些細なことがもとで一日が過ぎていく。でも不思議にいのちの源、晩酌だけは忘れたことはない。

惜しくても切らねばならぬ枝もある

大川桃花

盆栽をやっていると、植え替え、肥料、水やり、剪定など、実にさまざまな作業があり一年中手を抜くことがない。中でも剪定は盆栽の命にもかかわる重要な作業である。一と枝を落とすのに三日も一週間も思案することがある。

投げつけてみたい時さえあるスマホ

小野雅美

ワハハハハー、思わず笑ってしまう愉しい句。私も先日まで二つ折りの携帯電話でした。この歳でスマホと笑われましたが、手にして驚いたことには簡単だと思った操作の危なっかしいこと、不必要な機能の多いこと。思わず投げつけて仕舞いたくなってしまった。全く同感。

断らぬ女が落ちた浅い溝

古今堂　蕉　子

誘われても断れぬ、頼まれても引き受けてしまう。時には思わぬ難題を抱え込んで後悔することも。深い傷でなくてよかった。これからは充分注意することに。

厳しかった父にもあった優しい目

今　井　万紗子

戦後の日本を、貧しさと戦いながら生き抜いてきた厳しい父。そんな父が結婚式の時に見せたあの涙を、私はいつまでも忘れることができない。

苦労して小さな沢が川になる

遠　山　唯　教

一滴の水音から渓流となり川となる。やがては大河となって海に出る。今はまだその途上でこれからが本当の修羅場となる。大成は望まずして成らず。今までの苦労を糧に精進してほしい。

ひと呼吸おけばやさしい風になる

倉　益　一　瑤

昂ぶった感情を抑えるには深呼吸するのが一番。激高して得するものは何もない。穏やかに話し合えばどちらも傷つくことはない。幸せになれる。

有名になった途端に文春砲

内　藤　憲　彦

政治家はもとより、芸能人、アスリート、時の人など、週刊文春を恐れない人はまずいない。隠れ記者（一般）からの情報量がいかに凄いか想像できる。一社のスタッフだけであれだけの情報確信は難しい。私も気を付けることにしよう。

恥ずかしいものが無くなる怖い歳

太　田　昭

今まで外見を気にしていたことが躊躇なくできてしまう。我儘になる、図々しくなる。世間を憚らず生きていけるようになるのは七十歳過ぎたあたりから。

人様の迷惑にならぬよう心して生きていきたいと思う。

残業の電話はすでに酔っている

山　﨑　武　彦

自分にも覚えがある。勤め人なら誰でも経験するサラリーマンの一齣。夕食を準備して待っている妻にそんな見え透いた嘘がわからない筈はない。

電話するだけで主人の誠実感は分かって貰えそうだが、そう度々では家庭崩壊も覚悟しなければならない。

結び目に少し油を差してみる

近　兼　敦　子

結び目がきついと窮屈であり、緩いと不安になる。人間関係はつかず離れずの関係が理想的。そして浅く長くー。

永らえて言葉の裏を探るくせ

萩　原　狸　月

好々爺ならずとも、親切は素直にうけとった方がいい。何も深読みをして世間を狭く生きていく必要はない。

ワクチンを打ったらすぐに旅に出る

池　田　美　穂

二度のワクチンを打ち終えると、グリーンパスポート（世界的信用を得るワクチンパスポートのこと）を貰うことができ、国内は勿論のこと、世界を自由に旅することが可能となる。国際人にとってこんな嬉しいことはない。

日当たりのここが私の指定席

栗　田　忠　士

家の中でいちばん日当たりのいい場所。庭木があり、季節の花が咲いていて、ソファーで寛いでいると猫が膝に乗ってくる。そんな恵まれた老後を想像してしまうが、現実はそう甘くない。

水煙抄鑑賞

—5月号から

坂本加代

何の鍵わからないけどまた仕舞う

髙木道子

転勤族だった我が家にも、前住所関係の鍵や車の鍵など鍵入れに入っている。もう不要なのだが、何となく愛着があるのでサッと捨てられないで溜まっている。

頑張った私とハグをする夕陽

吾郷天遊

夕方まで作業して、クタクタになった体を夕焼けがやさしく包んでくれる。明日は良い天気だ。残った作業も頑張って片付けよう。

雪解けが加速していく雨の音

北山まみどり

雨が降るのは暖かくなった証拠だ。積もった雪もたちまち溶けてくる。耳を澄ましていると春の気配を感じてくる。北国の暮らしに明るい喜びが伝わる。

本気度が毎度毎夜に降りてくる

髙森一呑

頼まれた仕事を思案している。断れば男がすたる。夜明けまで考えているうち閃いた。よし、やってやるぞと力が入る。

骨密度測ってからはスクワット

高岡弥生

年齢に応じたら100という数字の骨密度。測ってみたらそれ以上あった。スクワットも大丈夫。ますます元気になる。

沢山の答えを貰う好奇心

冨田末男

好奇心があれば生き生きした目になる。なぜ？　どうして？　を探求していくと納得する答えに満足するのである。

戦時よりましとコロナ禍我慢する

樋口眞

自粛して外出はせず、じっと我慢の日々である。でも戦時中よりコロナ禍の今のほうがまだましだと思って諦めている。

神様はいるのか仏様に聞く

坂本星雨

神も仏もないものかと人間は嘆く。その声を聴いてお互い顔を見合わせて「返事はあなたから」。面白い図である。

家籠り自問自答の日が増える

廣田和織

コロナ禍で家にいることが多い。時間を持て余し、越し方を走馬灯のように振り返ることが多くなっている。

近道の標示勾配書いてない

青山ひろし

車のナビに最短距離をセットすると本道を離れ狭い山道に入り込む。これで良いのかと不安になる。

向こう岸とんでみようかやめようか

永見安子

病院で知りあった婦人は90歳。手のギプスの理由を聞くと田の溝の向こうへ飛んで手を付いて骨折したとか。

コロナ禍で期限が切れたパスポート

宮田風露

不要不急の旅行は自粛している。パスポートも切れたがジパングも使わずに一年過ぎてしまった。

ほい来たとサギの電話にウソならべ

横溝安子

ウチにも時々怪しい電話が掛るがすぐに切る。会話を楽しんでおられても、サギのプロにうっかり騙されないように。

126

お酒いろいろ（4）

三月号の本欄(1)で、「ワインは紀元前四千年頃にメソポタミアで作られていた記録がある」と書きましたが、紀元前八千年頃にはコーカサス地方ですでに飲まれていたとも言われています。いずれにしましても酒類の中ではいちばん歴史が古いのは間違いないようです。

ワインの赤とシャンソンを聞いている　小島　蘭幸
赤ワインロマンの橋を編んで行く　森　廣子
赤ワインすこし分かってきた傘寿　森田　旅人
赤ワインに炭酸足して自分流　井手ゆう子
わたしの何処を切っても赤ワイン　みぎわはな
こなごなのあなたさかなに赤ワイン　肥後和香子
赤よりも深く酔いそう白ワイン　居谷真理子
ワインの旅今日はイタリア明日はチリ　平賀　国和

ワインには「白」と呼ばれている透明や、「ロゼ」と呼ばれている薔薇色もありますが、やはり代表は「ワインカラー」や「ワインレッド」の言葉を生んでいる「赤」でしょう。

その鮮やかな赤紫は他の酒類にはない美しさで、ロマンティックなムードを醸し出してくれます。気心が知れた仲になれば清酒や焼酎もいいでしょうが、初めてのデートとか慣れ親しむまでは赤ワインでほんのりがベストです。

いつからかワインたしなむ妻となり　岩崎　實
我がためにハーフサイズのボージョレー　斉尾くにこ
飲みたいなロマネ・コンティを月一で　杉野　羅天
ほろよいにあこがれワイン舐めている　能勢　利子
手の伸びるところにワイン置いてある　高森　一呑
花冷えにホットワインであたたまる　若本　安代
再会の揺れる心を知るワイン　伊藤　良一
結界を越える覚悟のワイン注ぐ　上嶋　幸雀

ボジョレー・ヌーヴォーは9月に収穫された葡萄を仕込んで11月の第3木曜日に解禁するフレッシュ&フルーティーなワインで、特に女性のファンが多いようです。

一方、ロマネ・コンティは世界最高級の赤ワインで、一本(七百五十ml)が百万～二百万円とのこと。月一本ゲットしても年間ン千万円！　一本一万円か二万円も出せば国産で最高級のワインがあります。その程度で我慢しましょう。

ロゼワイン二杯で行けるパラダイス　大内　朝子
セレブ感ほしい日記念日ロゼワイン　野口真桜子
好きだよと軽く言わせたロゼワイン　永井　玲子
失恋の器にポトリロゼワイン　小谷　小雪
マイグラスキープしているワインバー　清水久美子
しあわせのワイン百円サイゼリヤ　まつもともこ
ばあちゃんの生前葬はワイン付き　今井万紗子
ワイン飲みながらサブちゃん聞いている　笹重　耕三

赤ワインもロマンティックですが、より一層妖しげなムードを醸し出すのがロゼワイン。グラスに二杯でパラダイスに行くこともできますが、失恋を慰めてもくれます。

サブちゃんの演歌に会うのは焼酎か清酒だと思いますが人それぞれ。ワイングラスを傾けながらの「♪　与作は木をきる～ヘイヘイホ～～」も乙なものでしょう。

『麻生路郎読本』余滴 (64)

また、また、路郎の著作見つかる②

桒原道夫

『カタカナ 世界お伽集一』の前書き（／は改行を示す）と目次を記しておく。

〈セカイジユウ カラ アツメタ オトギバナシ／ヲ、ヨミヤスイ シン カナズカイ デ カイ／タ ホンデス。／オモシロイ ウレシイ オハナシ バカリ デ／ス。／ヨミカタ ノ ベンキヨウ ニモ ナリマス／ヨ。〉

◎コイヌ……一
◎ヒツジノ オジサン……六
◎ナイタネコ……一三
◎エンドウノキヨウダイ……一九
◎シアワセモノ……三一
◎ウサギノキヨウダイ……三七
◎コウコウナムスメ……四七
◎カイコニナツタヒメ……五三
◎イナカネズミトマチネズミ……六〇
◎ゲナントキユウリ……六七
◎タイコトカビン……七一
◎オウニユウドウトタビビト……七四
◎ヒバリトヒバリ……八四
◎シカニナツタクマ……九〇
◎キツネトツル……一〇一
◎カタワドリ……一〇六
◎コナヤノユメ……一一八
◎ゲジヨトニワトリ……一二六
◎ウシトウマ……一三〇
◎ジユンバン……一三七
◎十二ニンノヒメ……一四〇
◎キツネトワシ……一五五
◎ユビタロウノハナシ……一五九

「キツネ ト ツル」は、イソップ物語である。路郎の『新譯 イソップ物語』（大13）の本文に続けて、『カタカナ 世界お伽集一』、『万治絵入本 伊曾保物語』（岩波文庫）の本文を挙げておく。

〈狐が夕飯に鶴を招きました。

豆で作つたスウプの外には、何も御馳走がなく、其スウプを廣い、平たい、石の皿の上へ注ぎました。スウプは食べる毎に鶴の長い嘴から流れて出て、鶴は何も食べる事が出來ないのを迷惑がつてゐましたが、狐はそれを見て非常に慰みました。

鶴はこんどは自分と夕飯を食べる樣に狐を招きました。そして口の長い瓶を其前に置いて、其頸を差し込むで食事をしました。狐の方ではスウプを舐める事さへも出來ませんでした。狐は自分が行つた親切に做つて、適當な復讐をされました。〉

〈「コンニチワ ツルサン、キヨウ ボクノ トコロニ、エンカイ ガ アリマスカラ、オキヤクニ キテ クダサイ。」

「アリガトウ ゴザイマス。」

デ ツル ハ キツネノ トコロ ヘ オキャクニ イキマシタ。スルト イジノワルイ キツネ ハ、ツル ニモ ヤツパリ、ウスイ サラ ニ スープ ヲ イレテ ススメマシタ。

「サア ゴエンリヨナク オアガリ ナサイ。」

デモ ツルノ クチ ハ ナガイ ノデ、ウスイ サラ カラ ハ、ドウシテモスープ ガ タベラレマセン、デ ツルガ マゴマゴ シテイマスト、キツネ ハ

「ドウシテ　ソンナニ　エンリヨ　ヲ　スルノデス　カ、サア　ドウゾ　オアガリナサイ。」ト　イイマシタ。
ソコデ　ツル　ハ、カオ　ヲ　アカク　シテ、一ツモ　タベラレナイデ　カエツテシマイマシタ。
サテ　ソレカラ　マモナク、コンド　ハツル　ガ　キツネ　ヲ　マネキマシタ。キツネ　ハ　イヤシンボウ　デス　カラ、スグ　ヤツテキマシタ。
「コンニチワ　ツルサン、ゴアンナイ　アリガトウ。」
「キツネ　サン　ヨク　イラツシヤイマシタ。サア　ゴエンリヨナク　メシアガレ。」
　デ　キツネ　ガ　タベヨウト　シマスト、オイシソウナ　ゴチソウ　ハ、ミンナ　フカイ　ツボ　ニ　ハイツテイマス。
ミナサン　モ　ゴゾンジノ　トホリ、キツネ　ハ　イヌ　ノ　ヨウナ　クチ　ヲ　シテイテ、ツルノ　ヨウナ　クチバシ　デハナイモノデス　カラ、フカイ　ツボノ　ナカ　ヘハ　ハイリマセン。
デ　キツネ　ガ　カオ　ヲ　アカクシテマゴマゴ　ハジメ　マスト、ツル　ハ、「サア　サア」ト　イイマシタ。
「ナゼ　ソンナニ　ゴエンリヨ　ナサルノデス　カ、イクラ　デモ　メシアガツテクダサイ、オカワリ　ハ　タクサン　アリマス。」ソシテ　ツル　ハ、サモ　オイシソウニ　イロイロナ　モノ　ヲ　タベマシタ。デ　トウトウ　キツネ　ハ、コノ　アイダノ　カタキウチ　ヲ　セラレテ、ニゲルヨウニ　カエツテシマイマシタ。ヒトニ　シタ　フシンセツ　ハ、ジブン　ノトコロヘ　カエツテ　クル。〉

〈ある田地に、鶴、餌食を求めて居たりしに、古老の狐、渠を見て、「誑らばや」と思ひて、側に近付きて云く、「いかに鶴殿。御辺は何をか尋ね給へる。もし、乏しく侍らば、我が宅所へ来らせよ。珍しき物、与へん」と、いと睦まじく、かたらひければ、鶴、「得たりや賢し」と慶びて同心す。狐、急ぎ走り帰りて、粥のやうなる食物を、浅き金鉢に入れて、鶴に向つて、「御辺は、堅き物を嫌ひ給ふなれば、態と粥をこそ」とて捧げければ、鶴、件の長き嘴にて、食わん〳〵とすれども、叶はざれば、狐、これを見て、「御辺は不食と見えたり。かゝる珍物を、空しく捨てんよりは、我に給はれ」と、皆、己れが取り食らふて、「奇怪なり」と嘲れば、鶴、甚だ無念に思ひて、「いか様にも、この返報をせばや」と思ひて帰りしが、やゝ程を経て、鶴、件の狐に逢ひていふやう、「我、只今、珍しき食物を儲けたり。来りて食し給へかし」と進めければ、狐、「すはや、先度の返報か」とて、鶴の在宅に至りけり。その時、鶴、口の細き入物に、匂ひよき食い物を入れて、狐の前に置き侍りければ、狐、これを見るよりも、好ましく思ひて、入物のまはりを、かなたこなたへ廻りけれども、叶はざるを、鶴、「をかしの有様や。さても御辺は、愚かなる人かな。只今めしの時分なるに、何とて舞い踊られけるぞ。食い果たしてこそ舞はんずれ。いで、食い様を教へん」とて、件の口ばしをさし伸べて、とく〳〵と食いつくし侍れば、狐、面目を失ひて、立去りぬ。その如く、みだりに人を軽れば、人又、己れを軽るべし。人を懇ろにせば、人又、我を憐れむものなり。これによつて、いか程も、あなづらるゝとも、我は人を軽る事なかれ。たとひ愚かにするとも、へりくだりて従はんには、若かじとぞ、見えけるなり。〉

エッセイ

人の世、仮の世に棲む

～小出智子句集『蕗の薹』を読んで

月波与生（つきなみよじょう）

小出智子さんの句集『蕗の薹』の中の最後の句を憶えているだろうか。

人の世に病院があり寺があり

である。六月二二日は小出智子さんの命日。『蕗の薹』を読んで故人を偲びたい。

人の世には病院や寺の他にも市場とか役所とかいろいろあるのに病院と寺を書いたのは何故だろう。この二つは人間個人の死生観がはっきりと表出される場所だからだろう。どう生きるか、どう死ぬか。句集『蕗の薹』は小出智子個人の死生観が川柳で綴られている。

仮の世に生きているのをつい忘れ
月見草ひとりの湖をもつひとに
あじさい寺の冬を想像せぬことだ
久方に逢えば柩の中にいる
素晴らしい素顔で逢いに来てくれる

仮の世であることを忘れつい現世に執着してしまう。人生百年でも何ひとつ持って行けるものはない。「ひとりの湖」は人間それぞれが持っている静謐な心の内のことだろうか。水面に映す月見草の波紋までイメージできる。「ひとりの湖」を持って生きたい。あじさい寺の冬はまさしく「死」を予見させる風景である。あじさいの死を乗り越えた先にまた新しい「生」があることを暗示させる。六月はそんなあじさいの「生」が感じられる季節だ。人は柩に入り「死」を見せる人もいれば、素晴らしい素顔の「生」を見せに来る人もいる。仮の世の生と死は毎日目まぐるしく変わる。

句集『蕗の薹』にはもうひとつ大切な言葉があるが憶えているだろうか。

姑となる大きな傘を買いにゆく

こんなに年をとってしまっていた日傘
知らん振りできない傘を差してから
けったいなとこに忘れてあった傘
新しい傘を雪の日におろす

と、他にも数句あり「傘」を書いた句が多い。「傘」は何を象徴させたものなのだろう。小出智子さんは生前「川柳塔のお母さん」と言われ慕われていたときく。「姑となる…」や「知らんぷり…」の句を読むとまさに川柳塔の傘のような人だったのだろう。が、それだけでもないようで「新しい傘を…」の句は、雪という未知の世界を新しい傘（となる人）に見せたい、と読める。「傘」は生きていくための力、矜持の象徴でもあるようだ。

このように死生観を書きながら『蕗の薹』からは悲壮感、虚無感は感じられない。かといって軽いわけでもない。書かれていないが読み取れる言葉が豊潤にある。当時よりさらに閉塞感が増した現代を生きそれを川柳で詠むとき、小出智子さんの川柳は、大いなる励ましとなる。

五十九歳これから川へ洗濯に
七十はさほどに遠きことならず

追悼

吉岡（よしおか） 修（おさむ）さんを偲んで

伊達郁夫

吉岡修さんが2021年3月10日94歳でご逝去されたとの訃報を15日に知らされました。最近まで、お元気に句会に参加されていましたのに驚くばかりでした。

修さんは、2000年に川柳塔同人になられ、吐田公一氏の後、橘高薫風先生のご推薦で城北川柳会の3代目の会長に就任されました。薫風先生が〝川柳の申し子〟〝川柳の硬骨漢〟と絶賛されました。

2004年朝日新聞なにわ柳壇100句集に、祝吟として、「硬骨漢の今に見ておれ　薫風」と詠まれています。

また番傘主幹・田中新一さんも、「修さんは何事にも情熱をもってぶつかる頑固で、お人好しの川柳作家である」と手放しに褒めておられます。

城北川柳会をはじめとして、川柳ねやがわ、川柳塔なら、くらわんか番傘、大阪川柳の会等の句会にご一緒させていただきました。特にパナソニック電工松寿会では、いろいろとお世話になりました。

5年前頃から、パソコンをはじめられ、お一人で苦戦されていました。毎週の様にパソコンの使い方の質問の電話を頂いていました。

川柳塔本社句会やくらわんか番傘では、いつも隣に席を取ってくれていました。いつもにこにこと笑みを絶やさぬソフトタッチの好々爺でした。

正直、修さんの句が大好きです。修先輩の様な句が出来たらといつも羨望の的でした。私にとって正に〝巨星墜つ〟の思いでいっぱいです。

薫風先生の選んだ句

老人の群れでも美人にはよいしょ
無理しても一番槍の他にない
羅漢さま雪に埋まって是非もなし
二階でも同じ番組見てる父
空手形妻は覚えているだろか

新一さんの選んだ句

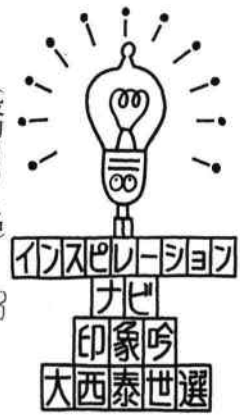
酒の味知った頃から人が好き
嫁ぐ荷に親の思いを積みきれぬ
ほんとなの好きなんですのまじめなの
率直に本音を言うて片がつく
負けたけど手応えだけは掴んだぞ

私の好きな句

たくさんの道があるけどどこへ行く
すんなりと100まで生きるつもりです
会社より大きな椅子が家にある
男から老人になる誕生日
どう叱る子は10センチ背が高い

修さんご冥福をお祈りいたします。本当にお世話になりました。

合掌



（投句２０１名）

大型連休だというのに、またまた緊急事態宣言です。でも、人出が減っているという感じがあまりしないのもちょっと怖いですが。

桜が散って、新緑が眩しい今頃は、自然の中で思いきり手足を伸ばしたい衝動に駆られますが、ガマンガマン、テレビに映る美しい風景を見て、そこに行った気分を無理矢理味わっています。

一番いい季節に巣ごもりとは寂しいですが、想像力を駆使した皆様の川柳をお楽しみ下さいね。では、ナビを。

大阪市　平井美智子

ときどきは丸洗いする二枚舌

（評）丸洗いしてキレイになった二枚舌の使い心地はいかがですか。エッ、もう汚れたからまた洗濯中って、スゴイ！

今治市　永井　松柏

ぶっちゃけた話雀の涙です

（評）他人様が思っているのと実際の話はものすごーい差があるんですね。それ聞いて羨ましさも少し減ったかも。

大阪市　若本　安代

おんおんと泣けばそこから変りそう

（評）泣くだけ泣いたら超スッキリ、何だか思い詰めていたのがばかばかしくなったりして、女は強いでー。

堺　市　内藤　憲彦

じんわりと老人力がついてきた

（評）老人力というコトバ、もはや懐かしく感じるけれど、最近は実体験で納得すること多し、ツライわぁ。

松山市　郷田　みや

正解がひとつだけとは限らない

（評）十人居れば十人の感じ方があり、答えの出し方も違う。それで救われればいいけどややこしい事も増えたりして。

青森県　月波　与生

自粛にも慣れ自粛疲れにも慣れ

（評）これって一番シンドイ慣れ方やねえ。肩、凝りまくって、家の中の薄ーい空気吸い続けて、もう泣きそう！

尼崎市　藤田　雪菜

幕下で終った人のチャンコ鍋

（評）力士として名を挙げた人はいいけど、しんみりしてしまうワ。でも、仕事を変えて成功している人も多いよね。

米子市　伊塚美枝子

懐かしい菓子から昔はずみ出す

（評）ホントよねえ。今も残っている駄菓子なんか見ると、ガキ大将だった子を思い出したりして。

河内長野市　大島ともこ

つらつらと全て白状なさいませ

（評）白状なさいませ、なんて、優しそうな口調で言われると、よけいにコワイものでございまする、と違う？

高槻市　松岡　篤

借金を国家のように出来ません

（評）赤ちゃんから老人まで、人口で国の借金を割ればとんでもない額、そんなお金、個人には絶対貸してくれへんで。

寝屋川市　森　茜

サバンナを行く列　小象まん中に

貝塚市　石田ひろ子

ゆっくりと自分に合うた縄を綯う

鳥取市　福西　茶子

家庭内別居境界線はここ

羽曳野市　吉村久仁雄

汗と笑顔が花いっぱいの路地にする

犬山市　金子美千代

腹筋をしても今更ここの肉

大阪市　坂　裕之

神様の贈物です旨い酒

米子市　八木　千代

咲いて散ってもう涙腺のない桜

南あわじ市　萩原　狸月

徳利を逆さに振って妻の顔

箕面市　酒井　紀華

下町からロボット飛んだ心意気

和歌山市　上田　紀子
やさしさへ流す涙はまだ涸れず

枚方市　栃尾　奏子
胡麻和えにしてねワタシは春キャベツ

池田市　太田　省三
大海を知った蛙が帰る井戸

松山市　柳田かおる
思いきり泣いて明日は晴れにする

黒石市　北山まみどり
雑巾も知恵も絞れなくなった

三原市　笹重　耕三
ふる里の大地に沁みる父の汗

奈良市　山本　昌代
ググッと胸に迫ってくる歓喜

津山市　高橋由紀女
右利きか左利きなのどっちなの

大阪市　石橋　直子
スカーフに愛でた桜を染め残す

弘前市　高瀬　霜石
ショーケンはあの世ジュリーはビヤ樽に

鳥取県　斉尾くにこ
ゆっくりと地球を絞る温暖化

高槻市　初代　正彦
もうちょっと汗をかいたら艶もでる

大阪市　柴本ばっは
やわらかで美味しそうやなひと休み

土佐清水市　辻内　次根
春の日に一日かけて拭き掃除

神戸市　みぎわはな
血も涙も無い姑は乾燥肌

宝塚市　丸山　孔一
あの時のあとひと言が足らなんだ

鳥取市　奥田　由美
安物を着ると気になる他人の目

唐津市　山口　高明
サヨナラのキスを見ていたお月様

松江市　石橋　芳山
群れること嫌って一匹の男

箕面市　出口セツ子
細い脛絞り出せない残余金

西宮市　亀岡　哲子
万緑へバンジージャンプ跳ねかえる

東大阪市　佐々木満作
たっぷりと熟成を経たレアな酒

高槻市　富田　保子
ハイテクにリストラされた伝書鳩

寝屋川市　平松かすみ
何もかも中止で花が泣いている

大阪市　江島谷勝弘
喜寿ですが出雲大社に行こうかな

熊本市　杉野　羅天
断捨離をして見えて来た身の軽さ

大阪市　岡田　恵子
青空に噴水の先つき刺さり

札幌市　三浦　強一
貸す金は無いが汗なら惜しまない

河内長野市　梶原　弘光
だんまりの会議座持ちが口火切る

大阪市　小野　雅美
愛のある叱責ならば受け入れる

豊中市　水野　黒兎
死の際のアリア朗々椿姫

和歌山市　定松　宏枝
聞き飽きた明日あしたのダイエット

鳥取市　山下　凱柳
ポタポタポタ次から次と嘘の山

河内長野市　山岡冨美子
ギブアップしません余滴あるうちは

生駒市　飛永ふりこ
ひあがった脳にレモンを滴らす

米子市　池田　美穂
一滴で十才若くなる薬

東京都　川本真理子
やり切って見上げる空の青くあれ

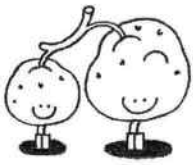
富田林市　片岡智恵子
一本道欲捨ててから見えてくる

奈良県　長谷川崇明
今年はと燃やす炎もすぐ鎮火

神戸市　冨永　恭子
桜餅まずはこしあん作りから

大阪市　石田　孝純
一滴の中に明日の光る虹

8月号発表
(6月15日締切)



(平本　霧石人　画)
柳箋に2句

二〇二一年（令和三年）

四月本社誌上句会

投句者238人

兼題「空　気」

柳田かおる　選

新しい空気に入れ替る4月　大阪　きとうこみつ
空気よんでタマがすごすごおりる膝　大阪　北村　賢子
場の空気読むのが下手でヒラのまま　大阪　片山かずお
夫がいないと空気がおいしいわ　大阪　谷口　義
空気のような人だが大切なあなた　大阪　鈴木いさお
深呼吸だあれも居ない墓参り　大阪　両澤行兵衛
張り詰めた空気へ鶯が鳴いた　奈良　大内　朝子
君が来てバラの匂いになる空気　大阪　栃尾　奏子
潮の香と競う岬の水仙香　和歌山　佐藤　まき
聖歌隊空気洗っているような　大阪　森田　旅人
バイオリン音色が空気切っている　兵庫　藤田　雪菜
冗談も言えず沈黙続くなり　大阪　西村　哲夫
合格へ一気に空気春になる　奈良　渡辺　富子
山頂の空気の味は五つ星　奈良　山下　純子
空気など読まない心の声を聞く　大阪　吉村久仁雄
ほんわかと空気が温いボランティア　大阪　山岡冨美子
会社の空気ガラリと変えた新社長　東京　井上つよし
ふる里の空気も詰めるダンボール　鳥取　竹村紀の治
敵も味方も同じ空気を吸っている　和歌山　三宅　保州
空気だけ誉めて帰った樹木葬　大阪　酒井　紀華
場の空気読んで小さくなる器　奈良　大久保眞澄
あなたとは空気みたいな間柄　愛媛　栗田　忠士
言い勝って薄い空気の中に居る　大阪　西出　楓楽
トンネルを抜けて空気が一変し　奈良　加藤江里子
この空気もう冗談は通じない　兵庫　米田利惠子
産声を聴いて空気が笑いだす　鳥取　田賀八千代
しあわせは君と同じ空気吸う　奈良　安土　理恵
ルンルンと空気が躍る恋かしら　大阪　岡田　恵子
あなたとの空気が起こす静電気　大阪　小野　雅美
通夜の席空気よまない笑い声　大阪　齋藤奈津子
薄ピンクあたりを目指す空気感　東京　川本真理子

コロナ禍になって実感した空気　兵庫　藤岡　りこ
新人を入れて動かす社の空気　兵庫　萩原　狸月
きみが来て部屋に空気が満ちてくる　鳥取　斉尾くにこ
やわらかい空気になった聞き上手　兵庫　緒方美津子
大笑いしたあとひとりだと気づく　青森　髙瀬　霜石
車座のムードにきっと実は結ぶ　鳥取　大羽　雄大
妻病んで空気もシャツも湿っぽい　大阪　原　洋志
生き方に馴染む空気が心地よい　広島　小川　道子
円陣を組んでひとつにする空気　大阪　鈴木　栄子
脇役が空気になるとおもしろい　静岡　中田　尚
場の空気洒落たジョークで温める　大阪　長髙　俊雄
一管の笛から百色の風が　奈良　居谷真理子
窓全開きのうと違う風入れる　兵庫　上田ひとみ
場の空気読めていたのはピエロだけ　大阪　髙杉　力
平和とは空気のように気付かない　鳥取　牧野　芳光
最高にうまい空気は無味無臭　大阪　松岡　篤
満開の桜ピンクになる空気　大阪　山野　寿之
張り詰めた空気萎ますヘソさがす　大阪　藤村　亜成
窓際に座って読めた社の空気　兵庫　福田　好文
空気読み急いで仕舞う二枚舌　岡山　椎葉　勉
あの人が座ると風が春になる　兵庫　みぎわはな

佳

居酒屋の空気常習性がある　鳥取　新家　完司
一冊の句集が空気清浄器　大阪　平井美智子
ストレスの爆発酸素足りないで　大阪　柴本ばっは
空気と言われ昼行灯と言われ　大阪　太田　昭
へこんだら山の空気を吸いに行く　大阪　佐々木満作

人

酸欠の蛍よ八日目の蝉よ　岡山　永見　心咲

地

胸いっぱい香り吸い込む新刊書　兵庫　稲角　優子

天

大気汚染地球は今や瀕死です　愛媛　黒田　茂代

軸

心地よい空気の中でハーブティー

兼題「アウト」

松原　寿子　選

サイレンが鳴ってアウトが泣き崩れ　徳島　小畑　定弘

見逃しの三振見ると腹が立つ　大阪　谷口　東風

勝負あり写真判定やり場なし　奈良　安福　和夫

桜花爛漫こころは既にアウトドア　山口　中前　幸子

またアウト辛い世間の風を知る　兵庫　稲角　優子

文春に写真撮られてもうアウト　大阪　齋藤奈津子

その立場それを言ったらアウトだろう　大阪　長髙　俊雄

アウトでしょう自腹で飲めば旨い酒　大阪　穂口　正子

ステージ4奇跡回復今生きる　兵庫　新阜　義明

アウトロー覚悟で本音ぶちまける　大阪　西沢　司郎

アウトにも始発のチャンス待っている　岡山　高橋由紀女

アウトです決めは忖度ないビデオ　広島　田桑　恵子

星を観におひとりさまのアウトドア　和歌山　木本　朱夏

雀蜂の巣がアウトにさせたキノコ狩り　鳥取　田中　重忠

ホワイトアウト近ごろ脳にかかる靄　大阪　吉村久仁雄

野球拳前田伍健が発案者　大阪　江島谷勝弘

そんなこと妻が知ったらアウトやろ　奈良　安土　理恵

友だけは売るまい闇が深くなる　大阪　岩佐ダン吉

言い訳をすればどんどん深い穴　兵庫　上田ひとみ

ツーアウト満塁からの風の向き　大阪　内田志津子

アウトレットどうやら妻もお気に入り　大阪　初代　正彦

左耳アウト悪口聞こえない　鳥取　新家　完司

危なっかしくて見てはおれないヒト科　和歌山　三宅　保州

ツウアウトそれからドラマ始まった　大阪　藤原　大子

理由どうあれハラスメントはアウトです　大阪　西出　楓楽

平服で来た式場は五つ星　大阪　平井美智子

人としてアウトかセーフか見極める　大阪　藤村　亜成

刑法のアウトラインを読んでいる　鳥取　牧野　芳光

官僚の「ごっつぉはんです」みなアウト　大阪　村上　玄也

ホームランホームベースを踏み忘れ　愛媛　柳田かおる

満員で手首つかまれたらアウト　兵庫　山田　耕治

婚活アウト就活に切り換える　大阪　山本希久子

五分おくれて幸福行きのバス乗れず　大阪　松尾美智代

世の中の差別用語は皆アウト　兵庫　松倉　正美

推敲にもう締切りは過ぎている　大阪　両澤行兵衛

アウトかも知れない　昭和史の汚点　島根　竹治ちかし

ワクチンでコロナアウトに仕留めたい　大阪　出口セツ子

アウトだと言われヤル気が燃え上がる　大阪　伊達　郁夫

核ボタン押せば地球の明日消える　岡山　藤澤　照代

検品をすればアウトになる私　岡山　岡本　余光
持ち直す天気アウトが遠くなる　大阪　津守　柳伸
本当のことを言うたら怒られる　兵庫　斎藤　隆浩
可哀相なんて言われたならアウト　鳥取　斉尾くにこ
断捨離の古日記から足がつく　大阪　澤井　敏治
大臣の三振アウトにはならず　兵庫　奥澤洋次郎
アウトカウント聞こえませんか菅総理　大阪　太田　昭
あと一人アウトを祈る虎ファン　奈良　長谷川崇明
ツーアウト満塁　愛のホームラン　岡山　藤井　智史
不夜城のテイクアウトは慎重に　岡山　永見　心咲
完全にアウトだったよその態度　兵庫　近兼　敦子
速攻アウト女性軽視の石頭　大阪　きとうこみつ
心までアウトにならぬよう励む　兵庫　藤田　雪菜

佳

先着順１００名様の１０１番　青森　高瀬　霜石
極上のアウトドアです通り抜け　大阪　山岡冨美子
選外でも没にできない私の句　愛媛　栗田　忠士
一と言があなたの胸の戸を閉めた　兵庫　みぎわはな
アウトだと言われるたびに前を向く　愛知　冨田　末男

人

粘り抜くここでアウトになるものか　大阪　坂　裕之

地

シャットアウトしたいコロナという魔物　奈良　大久保眞澄

天

またアウトへこたれへんで明日がある　奈良　山本　昌代

軸

アウトから積みあげた日の汗ひかる

兼題「忘れる」　仁部　四郎　選

忘れても良いことばかり覚えてる　広島　小畑　宣之
忘れたい過去懐かしくなる余生　宮崎　惠利　菊江
そのうちに忘れる甘い思い出は　大阪　立蔵　信子
披露宴忘れた罪を持ち続け　熊本　杉野　羅天
疲れないように早目に忘れます　兵庫　冨永　恭子
聞き上手忘れ上手で丸く老い　大阪　西出　楓楽
忘れたね僕のことまで母さんは　兵庫　敏森　廣光
忘れてもいいことだけど覚えてる　兵庫　住吉美和子
たくさん忘れたくさん忘れられ　岡山　大石　洋子

忘れたいことは得てして忘れない　兵庫　清水久美子

忖度と記憶にないでした出世　兵庫　北野　哲男

人が見てるおっとマスクを忘れてる　大阪　穂口　正子

同じ字を引かれて辞書の電池切れ　大阪　澤井　敏治

神さまのご褒美だってものわすれ　奈良　安土　理恵

身の程を忘れ背伸びをしてしまう　愛媛　黒田　茂代

死んでいたことを忘れて棺を出る　兵庫　糀谷　和郎

ワッハッハ忘れたで済む年となる　岡山　椎葉　勉

忘れたかい腹から笑い合えたこと　大阪　藤村　亜成

宿題が出来ず忘れたことにする　大阪　藤田　武人

冷蔵庫奥から気味の悪い物　岡山　工藤千代子

小銭でも貸したお金は忘れない　兵庫　福田　好文

恩返し忘れるなんて滅相な　大阪　柴本ばっは

忘れたい事がどろりとまなうらに　大阪　徳山みつこ

忘れたいことがくっきり脳の隅　大阪　山岡冨美子

忘れたい過去が目覚める午前四時　大阪　平賀　国和

そうだった天皇誕生日も変わる　青森　高瀬　霜石

忘れ物多くマンションには住めぬ　大阪　小野　雅美

指切りのくどさが逆効果に成った　兵庫　青木　公輔

聞き上手だけど忘れるのも上手　大阪　高杉　力

度忘れを恐れず明日へ突っ走れ　奈良　飛永ふりこ

記憶にはございませんと陳謝する　兵庫　斎藤　隆浩

忖度へ霞ケ関の物忘れ　奈良　長谷川崇明

控え目なわたしはいつも忘れられ　兵庫　米田利惠子

忘れるという字は心失くすこと　大阪　大浦　初音

相馬灯関白忘れ妻介護　広島　松尾　信彦

忘れましょたった一度の過ちを　徳島　小畑　定弘

いま聞いてもう残らないデジタル語　大阪　美馬りゅうこ

忘れるもんか君が一番好きだった　大阪　森　廣子

忘れたと言わず記憶にないと言う　大阪　古今堂蕉子

あのあのとそれそれだけで会話する　鳥取　大前　安子

忘れたと思いたいのに夢にでる　兵庫　松本ゆかり

手のひらにメモを見るよう「メモ」と書く　大阪　齋藤奈津子

うっかりと忘れた振りを忘れてた　兵庫　堀　正和

痴話げんか忘れたように朝ごはん　大阪　内藤　憲彦

ありがとうを忘れてました転ぶまで　大阪　廣田　和織

忘れない飢えた昭和の一ページ　大阪　石田ひろ子

フードロス飢えた時代を忘れるな　兵庫　永田　紀恵

幸せだった母の笑顔は忘れまい　大阪　今井万紗子
父の日をスーパーで知る五月晴　兵庫　稲角　優子
気遣いのリレーで届く忘れ物　岡山　藤澤　照代
露天風呂主婦を忘れた顔ばかり　大阪　中村　惠
シュレッダーにかけた昨日の武勇伝　大阪　石田　孝純

佳

毎日のノルマのように物忘れ　兵庫　岸田　万彩
順調な加齢の証拠もの忘れ　広島　田桑　恵子
あの頃の日の丸弁当忘れない　東京　井上つよし
神さまが楽に生きよと物忘れ　大阪　宇都満知子
私を忘れた母を明日見舞う　大阪　原　洋志

人

忘れたら進軍ラッパ鳴りますよ　奈良　居谷真理子

地

忘れたと記憶にないの大きな差　大阪　太田　省三

天

夫婦坂忘れられないあの辺り　大阪　太田扶美代

軸

忘れたいことではあるが十五日

兼題「ぺらぺら」　月波　与生　選

ぺらぺらと喋ったあとで内緒だよ　兵庫　山田　耕治
ペラペラな紙が秘密を知っている　鳥取　大前　安子
ぺらぺらと後ろめたいかよく喋る　大阪　岡田　恵子
何かある聞きもせぬ事よく喋る　大阪　内田志津子
自粛慣れペラペラ口が回らない　大阪　横山　里子
ペラペラは無理ゼスチャーで切り抜ける　京都　山田　葉子
ぺらぺらで味ある河豚の薄造り　大阪　穂口　正子
盛りつける皿の絵見える薄造り　大阪　谷口　東風
苛められた遺書はぺらぺら喋らない　兵庫　米田利惠子
待ち疲れ夜風が雑誌覗き見る　大阪　松田蟻日路
ぺらぺらとめくり読む気のないわたし　大阪　松本あや子
ぺらぺらな紙の詫状重くなる　宮崎　惠利　菊江
透き通る肌着で春を謳歌する　大阪　両澤行兵衛
指に唾付けぬば頁めくれない　兵庫　福田　好文
ぺらぺらめくる白いページのカレンダー　大阪　今井万紗子
春風にはためく私のプライド　大阪　宇都満知子
解釈は自由ぺらぺら語らない　兵庫　冨永　恭子
見境なく喋る男の血の流れ　岡山　岡本　余光

よく喋る人だ迂闊に明かせない　大阪　鈴木いさお
ペラペラとしゃべる男に見る孤独　大阪　森田　旅人
ペラペラとクレヨンの赤夢を言い　兵庫　野口真桜子
ペラペラの鯉と戯るはぐれ雲　奈良　高橋　敬子
歎異抄ぺらぺらめくりつまみ食い　岡山　折鶴　翔
ステーキはぺらぺらだけど黒毛です　奈良　山下　純子
ぺらぺらの紙一枚で飛んで往く　島根　原　徳利
皐月風本のページとよく遊ぶ　兵庫　稲角　優子
蟻地獄まで饒舌がずり落ちる　大阪　山野　寿之
ぺらぺらとご機嫌だったころの友　広島　小川　道子
おしゃべりと笑顔が味を丸くする　埼玉　久保田千代
ぺらぺらと家ではとても喋る子で　兵庫　近兼　敦子
これがまあ大海生きて花鰹　大阪　今村　和男
ペラペラの肉にふところ笑われる　広島　田辺与志魚
どの国の人とも流暢に話す　兵庫　上野多惠子
ペラペラを夢見て学ぶ英会話　大阪　平賀　国和
ペラペラの正義感とは距離を置く　兵庫　槇田　次郎
還りしは紙一枚の戦死墓　兵庫　上田　和宏
ぺらぺらとめくって読んだことにする　大阪　島田　明美
一枚の辞令で飛んだ転任地　大阪　長高　俊雄

ぺらぺら喋る故郷の駅も多国籍　島根　伊藤　寿美
お里がバレました喋り過ぎました　大阪　太田扶美代
ぺらぺらと手話通訳はよく喋る　京都　清水　英旺
コロナ禍で突然消えた口達者　兵庫　瀬島流れ星
ぺらぺらとシャンソンうたう津軽弁　大阪　澤井　敏治
柿の葉にごく薄の鯖包む鮨　奈良　宇賀　史郎
ティッシュペーパーより薄い愛でした　和歌山　柏原　夕胡
地下街を影のない人ばかり行く　奈良　居谷真理子
ぺらぺらの湿布背中に貼る苦労　岡山　高橋由紀女
おおかたはぺらぺら黙祷が続く　島根　石橋　芳山
料理番組マスクも当てずよくしゃべる　和歌山　村中　悦男
ほんとうに心ばかりの熨斗袋　大阪　内藤　憲彦
聞き上手ペラペラになるハッカ飴　東京　川本真理子
黒枠を見つめぺらぺら飛ぶアゲハ　岡山　藤井　智史

佳

手をかけた鰹節ほどよく踊る　兵庫　緒方美津子
ぺらぺらの雑誌だしかし正論だ　広島　小畑　宣之
もろもろをお察しくださいませ寸志　青森　髙瀬　霜石
薄っぺらな哲学持って世を渡る　奈良　渡辺　富子
九九がまだぺらぺら言える大丈夫　島根　岸　桂子

人

両親を騙したことが一度ある　大阪　榎本日の出

地

早期退職募るはんぺんはぺらぺら　岡山　永見　心咲

天

一枚の紙に斬られた過去がある　和歌山　木本　朱夏

軸

薄くなる聖書長生きするほどに

兼題「立　場」

小島　蘭幸　選

役人の深夜飲み会あかんやろ　兵庫　山﨑　武彦

宣言下襟を正せぬ金バッジ　兵庫　斎藤　隆浩

すまんすまんスマンスマンで済む立場　兵庫　岸田　万彩

八十路には八十路の華に咲いてみる　大阪　酒井　紀華

成るように成る九十歳の立ち位置だ　島根　伊藤　寿美

主婦という現役ずっと続けたい　大阪　榎本日の出

とんとんと出世人格まで変わる　大阪　鈴木　栄子

複眼で見る人の世のおもしろさ　大阪　長髙　俊雄

外野席にいるからいつも能天気　大阪　初代　正彦

自慢せず苦労も語らない礎石　大阪　石田　孝純

心友だ受け皿だけは用意する　兵庫　吉村めぐみ

立つ位置が変われば景色また変わる　大阪　伏見　雅明

仲裁の立場で丸いことば持つ　岡山　藤澤　照代

清にしてやや貧私の位置とする　兵庫　松本ゆかり

肩書きでＹｅｓもＮｏにしてしまう　静岡　中田　尚

昇進の度に胃薬増加する　佐賀　坂本　蜂朗

最高齢いつもどおりの席に着く　京都　山田　葉子

ＯＢになっても続く部下上司　兵庫　村田　博

主婦の立場替えてみようか二　三日　奈良　安土　理恵

長男ですお墓参りはかかせない　大阪　大浦　初音

立場などくるりと変わる定年後　富山　伴　よしお

嫁色に染まって息子父になる　大阪　島田　明美

年金が僕の立場を重くする　大阪　松本あや子

無礼講あの上司には近付かぬ　兵庫　みぎわはな

父として重いことばで子を諭す　徳島　小畑　定弘

人を大事に晩節は汚すまじ　熊本　杉野　羅天

子を守るどんな立場になろうとも　大阪　田中ゆみ子

鳥の目から見れば垣根のない地球　大阪　小野　雅美

子の立場親の立場の逆上がり　大阪　関　よしみ
やり込めるときは団結する野党　鳥取　竹村紀の治
良妻賢母僕の立場がありません　大阪　井丸　昌紀
フードロス飢えに苦しむ国がある　愛媛　栗田　忠士
主役には遠いところで咲くスミレ　岡山　永見　心咲
立場上ヒントは七つまでにする　東京　川本真理子
立場無視した正論が社を救う　兵庫　瀬島流れ星
窓際で社運しっかり見ています　大阪　柿花　和夫
中立の立場に友が二人去る　大阪　吉村久仁雄
御破算にできる立場にない総理　和歌山　柏原　夕胡
社長になって頭の下げ方を習う　大阪　片山かずお
気の毒に立場でものを言うてはる　兵庫　萩原　狸月
再雇用部下がわたしの席に居る　大阪　山野　寿之
かまきりの雄も私も似た立場　大阪　鈴木いさお
曽祖母の立場へそくり減るばかり　大阪　西出　楓楽
いつのまにか同じ立場で酒を酌む　兵庫　近兼　敦子
弁えていますカスミ草ですから　愛媛　柳田かおる
母になって解った母の泣いた訳　大阪　松尾美智代
天命と置かれた場所で咲く菫　兵庫　谷口　修平

言えそうで言えないおばあさんの立場　大阪　谷口　義
寿司ならばイカ・タコレベルですわたし　青森　髙瀬　霜石
それぞれの立場で個性出している　愛知　冨田　末男
空いている席に静かに座ります　兵庫　上田ひとみ
甚平を着てどちらにも味方せず　大阪　原　洋志

佳

妻母女それぞれで描く私小説　鳥取　田賀八千代
それぞれの立場が試されたコロナ　鳥取　成田　雨奇
幸せ話聞かされている紅茶飲む　大阪　森　廣子
パパとママどっちも好きという五才　大阪　太田扶美代
官僚のしどろもどろは訳がある　兵庫　福田　好文

人

静止画を抱き反核の列にいる　広島　田辺与志魚

地

スタンバイしている三色ボールペン　和歌山　木本　朱夏

天

肩書きを取ればやさしい人でした　鳥取　斉尾くにこ

軸

らしくないところ魅力になっている

柔道柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳さんだ（兵庫）　酒井　健二報

そよ風よ下向く子にも吹いてくれ　勝士
発表日赤飯炊いて帰宅待つ　正和
褒章を貰う夫婦の艶やかさ　加代子
強豪と対戦決まり湧くファイト　健彦
合格の発表の裏にあるドラマ　婦美子
出場に歓喜の声が天を指す　千賀子
判定で挙がるその手が天を衝く　優子
プライドが邪魔してイワシ買いそびれ　ちあき
陛下よりおほめいただき死にはった　一子
痩せ馬の嘶きを聞く縄のれん　武彦
子の涙伸びしろと見る親心　和宏
桜だけ見上げタンポポ踏まれてる　恭子
悔しくて黙って鶴を折っている　美籠
悔しさをこらえるポケットの拳　修
落葉マーク付いたタクシー呼んでない　真桜子
車椅子介護タクシー助けられ　直美
ワンメーター釣はいいよと言い出せず　好文
タクシーをお呼びしますと追い出され　耕治
タクシーが人を運ばずお弁当　俊朗
故郷のタクシー誰も顔なじみ　義徳
親切なタクシーだった今日は吉　堅坊
許し難いことも許して棺の中　はな
地震国許すのですか再稼働　おさむ
ずるずると許して自分見失う　光久
原爆を許す神仏なら要らぬ　峰明
マッカーサー平和憲法ありがとう　利尚
許されて許していのち抱きしめる　ヨシエ
水ごくりみんな許して天仰ぐ　紀乃
義理チョコを五つも貰う髭を撫ぜ　行兵衛
時時は救ってくれる嘘もある　廣光
花の下ふっと聞こえた母の声　ひとみ
子ら夫婦仲良きことが親孝行　玲子
娘の意見すんなり聞ける歳をとり　開子
優しさが人の心を丸くする　高志
早早と春の息吹の蕗の薹　哲男

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

焼芋がスイーツなのよと自己主張　真理子
喋るなと言われ喋らぬわけがない　英三
鏡に写る本音寡黙になれと言う　時子
イケメンを肴に弾む女子トーク　歌留多
ありがとうよく笑えたし喋れたし　北舟
生き様語る本棚にある古い本　(永)玲子
切取線の愛のゆくえを探さねば　公輔
口止めも全てオープンおばちゃんは　義明
保険証出番が多くなった古希　敏昭
道徳を守るおんなのひとり言　ヨシエ
悔しさをぶちまけている縄のれん　堅坊
携帯電話とんでもないこと喋ってる　求芽
掛軸の墨にもいのちあるを知る　弘委智
あんみつで誘うと付いて来る夫　利子
セピア色の写真に家族ヒストリー　英旺
雑草が陣取りしてる小さき春　千鶴子
語り部が臨場感を掻き立てる　肇
コロナ禍の苦労に耐えている老舗　美籠
スイーツに目がない妻の膨よかさ　満作
褪せぬよう今日も心に彩を足す　千賀子
たんたんと摘出がんを見せる医師　勝弘
娘が嫁しておひなさま達さみしそう　見清
古墳から過去のロマンを手繰り寄せ　洋志
褪せたけど解れもせずに赤い糸　(初)正彦
ああ鳥がうらやましいと思う日日　ひとみ
バッハ聴きおしゃべり弾む午後のモカ　野鶴
今生きているこの幸せを楽しまん　忠子
ドーナツの穴から見てる明日の夢　廣光
古典にはずしり溢れるヒトの知恵　黒兎
スイーツの原点だったふかし芋　美津子
一度でもいいから見たい妻の夢　則彦
古都の旅おしゃれなカフェのわらび餅　公子
古式見て人の床しさ身にしみる　(福)正彦
お見舞いは優しい嘘が要るのです　哲男
幼な子と喋るとこころ丸くなる　(岩)玲子

川柳塔なら　大久保眞澄報

坪の庭春の兆しに梅が咲き　(中)勝弘

燃え上がる兆し脳裏の静電気　武人
おめでたの兆しか嫁の味変わる　シマ子
収束の兆しに水差した解除　満作
回復の兆しが見える友の顔　定生
復調の兆しか酒が旨くなる　和郎
もうちょっと行けばトップに立つ兆し　裕之
回復の兆しおじさんギャグが出る　みつこ
閉じ籠もり春の兆しの眩し過ぎ　昭
いい兆しふっくらしたね頬の張り　昌代
目の色が変わった伸びていく兆し　欣之
しゃべり出す膝にシップで口封じ　三枝子
思春期の恋の兆しのにきび面　半六
春の兆し蕾ふくらみ水ぬるみ　羅天
文春が両手広げて待つちくり　恭正
毒針が仕込まれていた褒め言葉　雅美
慢心を諌めてチクリ老婆心　俊雄
約束の小指を妬む紅い棘　恵
素通りして胸がちくりと募金箱　すみ子
病室へ嘘を残して帰る道　(平)美智子
もうお歳ですからねえと言うカルテ　保州
人間のおごりへ天地釘を刺す　成子
断捨離へ陣地段々減らされる　さとし
ロープロー妻のちくりが効いて来る　和之
ええかげん子離れしようお母さん　(江)勝弘
貧乏が育ててくれた粘り腰　ひろ子
後ろ姿見せない方が子は育つ　則彦
丸裸になって育ててきた度胸　堅坊
花に水ボクには酒が効くのです　まつお
長い目で見る趣味上達も子育ても　希久子
本当は育てられてもいたんだね　ダン吉
アルバムの中にたっぷり子育て期　惠美子
育児にはスキンシップといい笑顔　大子
絶望をほどいてくれた亡母の胸　百合子
愛のある育て方には背けない　ふりこ

あかつき川柳会（大阪）　磯島福貴子報

祖父と祖母孫に甘いが子にきつい　小鉄
甘党も辛党もいて場がなごむ　万作
塩の甘さもより知っている苦労人　紀乃
マスクして甘いマスクも出番なし　古池蛙
甘えるな影がわたしを叱咤する　ひろこ
二人芝居幕の合間の甘いお茶　春雄
甘そうで甘くないもの柿の種　心平太
清酒づくり水が育む灘伏見　洋二
清らかな君の瞳に負けた僕　(櫻)秀夫
清廉な政治は何処にいったのか　珠子
恐いものなし真っ直ぐの青い夢　(松)敏子
清貧にほど遠いのは永田町　(立)信子
清らかな心邪魔する物と欲　信明
清濁を併せ呑んでる処世術　壽峰
ストレスを揉み洗いして陽に晒す　みつ江
清貧という字が消えた永田町　蕉子
マスクせずきれいな空気いつ吸える　奨
百歳の笑顔清々しいオーラ　満知子
そうなんだ子供相談聞いて知り　正康
開店の長短だけのコロナ策　太郎
お茶漬けの味で阿吽の夫婦箸　常男
納得などしていないぞと父の咳　敏治

村上直樹選

生と死の境界線に置くマスク　蛙鳴
こびりついた憂さ掻き落とす鍋磨く　当代
摘まないできれいな花を咲かすから　和子
踏み込まぬ一線引いて続く仲　ひろこ
足らざるを補い合って渡る橋　恭子
悪知恵が湧くからまんだくたばらぬ　重忠
ストレスのない人生も味気ない　克美
精一杯生きてやっぱり今が好き　風来坊
なんとなくゆっくりふわり生きていく　ひとみ
神仏に頼ることなく生き尽くす　星雨

佳句地十選　（5月号から）

栃尾奏子選

手を洗ういとしいものを抱くために　舞夢
だまされてもだましはしないまるいかお　常男
摘まないできれいな花を咲かすから　和子
ありがとうお疲れさまと咲いている　茜
原点に戻って迷路から抜ける　菜摘
ラストダンスはテネシーワルツだったよね　宏造
願わくば惜しまれて散る花筏　純子
美しく死ぬのはとても難しい　いさお
記事届くやがて火の粉が舞うページ　ダン吉
百点と百点がする大喧嘩　利惠子

政府より文春砲に納得す　みつこ
納得のゆかぬ妥協も生きるため　楓　楽
死に票も納得づくの一票だ　征　之
寂聴の法話ストンと腑に落ちる　いさお
世間知らずに納得させて骨が折れ　世紀子
落ち椿地面を飾る花となる　堅　坊
山笑う里はコロナで泣いている　まさあき
君が代にマスクの中で舌を出す　佑治ゼミ
悔しいと店の終わりを告げられる　寿　子
しゃあしゃあと他山の石と言ってのけ　敏
こどもにも自助を説く気のこども庁　正　治
大阪市自治投げ捨ててカジノする　ひろし
甘酒でホロ酔い気分私下戸　福貴子

西宮北口川柳会（兵庫）　緒方美津子報

吹く風に任せ切りにはせぬ余生　堅　坊
がっかりを何度も聞いてダイヤ婚　昭九朗
優しさに出会いやさしくなる私　千賀子
開けた窓頁繰ってる春の風　健　彦
ふる里はいいな昔のままの風　武　彦
鈍色の埴輪の面の無表情　修
がっかりの闇で見つけた小さな灯　いわゑ
古のロマン育む埴輪塚　正　彦
まあこんなもんかと独り深呼吸　正　和
今年こそ思いながらもタイガース　勝　弘
新しい靴はいて行く朝の雨　ひとみ
国産のワクチンがまだ出て来ない　和　宏
任されて人の器がよくわかり　野　鶴
任せると一人前の顔になる　敦　子

大丈夫と言えば動き出す頭　利　子
甲子園六甲おろしつむじ風　（福）弘　子
そよ風とお散歩してる春ですね　哲　子
別天地の夢を綿毛に託す風　千　代
任せたというが絶対任せない　富　次
年金は妻を信用任せてる　新　録
任せるわそう言いながら口は出す　廣　光
羽ばたいて子雀風とたわむれる　り　こ
がっかりとすることないよ次がある　盛　夫
あきまへんサブリいろいろ飲んでたが　哲　男
自由とはかくも得がたき離婚劇　俊　雄
孫五人男ばかりの雛祭　一　徳
がっかりはしないよだって自分の子　光　久
期待しないよがっかりしないために　靖　夫
時々は自分をほめる生きるため　紀　華
一病も二病もあって春を待つ　野　薫
ウインクが上手になったマスクの目　は　な
遠く見て古代想うか埴輪の目　邦　男
任される重荷と任せきる度量　恭　子
六法の死角で風は立ちどまり　真桜子
埴輪の目人は賢くなってるか　洋次郎

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

こもれびに隠し切れない春財布　あかり
全快のカルテからから笑い声　欣　之
絵手紙の余白に君の風がある　か　こ
綱渡りもあった人生振り返る　鈍　甲
綱渡り上手になってからの鬱　郁　夫
1パーの望みに掛けた手術台　武　人

自分史のところどころが綱渡り　一　文
綱渡り上手な人は生き上手　武　彦
カルテから聞こえてきます呻き声　弘　子
改ざんはするなカルテに真を問う　銀　杏
カルテから俺の罪状読み取れる　弘　一
カルテ見て医者がにっこりする安堵　寿　之
金持ちになれぬカルテを持っている　博　泉
汚染水処理のカルテがまだ書けぬ　堅　坊
この星はステージ4というカルテ　和　織
不摂生に結果カルテに叱られる　寿　子
収束を願いあぐねているカルテ　朝　子
二十年やっとたわわに花馬酔木　尚　世
財布など今ははやらぬキャッシュレス　勝　弘
お財布にやさしく誘う春うらら　高　鷲
宵越しのお金チビチビ貯めてます　千　賀
財布には黄色がいいと聞き黄色　かずお
二重帳簿妻も財布は二つ持つ　賀世子
大きい願い小銭ですますお賽銭　弘委智
一葉と諭吉がシェアをする財布　壽　峰
空っぽの財布の中は夢一杯　清
いい上司見ない聞かない振りをする　一　歩
ドイツ語が読めたらナーとのぞき見る　ルイ子
春彼岸店閉めるらし仏花買う　麗
さわやかに笑い合う春すぐそこに　賢　子
忘却は生きる糧なのメモを繰る　秀　雄
ワクチンが萎えた意欲の火を灯す　信　子
ずばずばと核心を衝く楷書体　仁
不自由なコロナ禍だから針と糸　かすみ
しなやかに捩れて思春期を駈ける　茜

川柳藤井寺（大阪）　鈴木いさお報

リバウンド中なのに宣言解除　勝弘
僕の歌とピアノの音がなぜ合わぬ　シマ子
盆栽に命かけてた祖父の背な　喜代子
その隙をついてコロナの威勢よさ　美代子
ちぐはぐな話ひと息いれましょう　ダン吉
忍耐を育てています自粛中　大子
コロナ禍に東京五輪やるんかい　みつこ
藤井くんの親と師匠に拍手する　一歩
涅槃図に仏心育つ胸の内　みつ江
貧乏が育ててくれた粘り腰　ひろ子
町工場親の汗見て子が育つ　久仁雄
どちらが先か考えながら飼うペット　かずお
子離れは子育てよりもむつかしい　扶美代
スシ買ってきたら焼肉食べていた　まつお
こんな娘に育てたつもりありません　いさお

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

陽だまりの窓の向こうで猫アクビ　正子
急成長出窓に映えるヒヤシンス　奈津子
チャレンジの窓口塞ぐコロナ禍が　郁子
同窓会シワシワだけど懐かしい　順子
窓越しの四季は巡ってさくら咲く　純子
家々の窓に暮しの跡がある　黒兎
窓磨く外の景色が新になる　宏造
丸窓の船に憧れ宝くじ　久仁子
窓際へご出勤とは知らぬ妻　直子
人前で内緒話はせんといて　勝弘
声援が消えて淋しい外野席　春代
妻からの今日の出来事聞き流す　守啓
長話聞くのがつらく目をつむる　一弥
デザートもとろけるほどのモダンジャズ　則彦
初孫に絵本広げてなつかしく　信子

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

初めから判る勝つのは週刊誌　弘充
一瞬の流れ星かよ初キッス　徳利
三つ星のシェフも初めは皿洗い　勝美
飲む前に言って欲しいなおごりなら　みちを
影を見て足の長さで自信持つ　富紫美
地下街の出口に影を待たせとく　桂子
人の影ふんで出世まっしぐら　久絵
微笑みの遺影に涙込み上げる　豊仙
面影の薄まるまでは桐の箱　とも子
影とする話を白く塗り替える　芳山
よっぽどのことなんだ君のだんまり　モナカ
青が好き海に抱かれる予感して　美智子
里帰り居心地よくてつい長居　あきら
マンガ好きコロナを隠れみのにする　瑞人
農に生き今どっぷりと幸の中　米估
どっぷりと松田聖子のラヴソング　柳歩
まん中で裏も表も知らぬまま　邦代
裏方の気楽な道が合っている　知恵子
万札は裏の話を聴いている　雪代
裏面から苦労の糸は出ています　青帆

川柳あまがさき（兵庫）大浦　初音報

タイガース新人目立ち首位に居る　柳明
新入りに檄も飛ばせぬ古狸　英坊
新米ママ泣く赤ちゃんも可愛くて　菊江
爺ちゃんの酒の飲み方失恋か　正
春色のセーターの胸春が来た　和子
マスクの中きっと口角下がってる　初音
ベランダから隣の桜花見する　厚江
二才でもしなを作っておねだりし　孝治
フルムーン妻もおおらか責めぬ酒　五月
環状線乗って気づいた逆回り　新録
経済を出しに使って墓穴掘る　正彦
さみしくて愛の讃歌を熱唱ス　照代
修復で羽を広げた姫路城　千賀子
子が産まれ修復できた嫁姑　良種
修復にヴィトンのバッグ妻へ買う　宏造
遠回りゴールは父母の待つ花野　(谷)修平
コロナ禍を治める鬼が見つからぬ　久仁雄
ヘイマンボウ！コロナ治める合言葉　万彩
春が来たはーやく来いよワクチンも　勝弘
極楽は回り道していきましょう　耕治
おいしいもの食べたらできる仲直り　こみつ
苦節十年日本悲願のマスターズ　(入)修平
おはようと声をかけたいいい日和　美籠

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

何も無い時は鍋料理に限る　美ッ千

白無垢をあなた好みの色に染め　孝子
親からの名は散らし雅号で生きて来た　孔美子
あなたにはあって僕には無いものだ　小鹿
わがままは置いてきぼりの渡り鳥　弘子
韓国まで幸せ運ぶコウノトリ　ゆたか
無い無いといつも爺さん探し物　弘六
捨ててない白を白だと言う勇気　楓花
清書する一字残して墨が散る　慎一
素晴らしい地図をも持たぬ渡り鳥　重忠
何も無い私を嗤う花吹雪　完司
白旗が遅れ原爆堕ちた国　照彦
糊代は広く余生をゆったりと　盛桜
無い袖を五回降ったら金が出た　文道
願わくばピンピンコロリパッと散る　正昭
渡り鳥飛べる翼も夢もある　すみれ
君いない白いページはあり得ない　仁
意地通し白いカラスになってみる　静恵
総理ともなれば黒でも白くなる　恒
白鳥がクワッと鳴いた別れの日　茶子
渡り鳥君らは空でいつ休む　甚禄
何も無い人それぞれに持っている　草文
平和な街に戻ってきたぞ渡り鳥　正道
ピンクからしろに変わった桜花　一平
頼みごとの無い接待がある不思議　宏章
お出掛けに着たいと思う服が無い　かおる
級段位貯金果たして頂いた　蟹郎
きつい酒それでも慣れてくるみたい　大鯰
真っ白なスーチーさんを塗り込める　宣子
白い紙裏を返せば真っ黒で　茜
可愛いが鳥の疫病まき散らす　実満
縫いしろがあってメンバーつなぎ止め　熊四郎
渡り鳥長旅をした羽根休め　瑞子

六甲川柳会（兵庫）　糀谷　和郎報

愛着あるので中古とことん使う　公輔
中古ではなくてこの服ビンテージ　克美
受け継いでやわらかくなる皮の品　恭子
ブランド品中古でもゼロ並んでる　美穂
掬われた金魚の方が幸せに　（歳）洋一
震災の傷跡掬うショベルカー　千賀子
川柳が孤独な余生掬い上げ　堅坊
全身で全力でただ受けとめる　ひとみ
コロナ下で砂を掬えず球児去る　盛夫
白魚の跳ねる元気に箸止まる　義明
コロナ禍も若鮎跳ねる新学期　洋次郎
春雨に濡れて裸婦像若返り　美津子
リブレー画モンロー探す昭和です　ひろし
心得があって和める流儀の茶　狸月
家飲みに大吟醸がでんと出る　弘
病室はナースの笑みに和まされ　美恵子
拾うてきた仔犬を囲むお手の芸　利惠子
つかむのを止めたら笑いだした風　真桜子
順調にマジック減らすタイガース　武彦
ミサイルも消費期限があるらしい　正美
コロナ禍の波が何度も打ち寄せる　崇史
コロナ禍で飲み会流れ健康に　隆浩
穏やかな生き方のぞく笑い皺　次郎
長いこと飲んでいないな大ジョッキ　博
今日も又歩くしあわせ噛み締めて　光久
お花見へやはり日本酒連れて行く　正和
俺様をコケにした奴みな逝った　勝弘
卒寿でも夢は青春のどまん中　弘華
しなやかにコロナを避けて生きてます　利子
天敵に天敵が居て世が回る　哲男
黙食ができぬ蛸焼きの熱あつ　和郎
納得をせぬ人の口尖ってる　廣光
正論をかざすと息が切れてくる　和宏

長柳会（大阪）　辻村　ヒロ報

いさぎよく咲ききって散るチューリップ　ヒロ
背くらべの柱のきずをなつかしむ　千代
久しぶり皆マスクしてあんただれ　秀子
逆鱗が龍でないオレに生え　邦夫
道草の詳細すべて雲の上　孝
一言が地雷踏んだかふくれ面　洋二
歴史好き熊野古道の旅に出る　たけし
童心にかえり子供と競い合う　靖博
おまけの余生ホップステップジャンプする　ふみ
背伸びした暮らしをやめて得た余裕　登美子
盛り過ぎ散り際知らぬ白と鶴　純風
散り際は斯くも在りたく花眺む　幸子
コロナ禍でワイキキ散歩夢のなか　規之
親の名を出せばへいこら総務省　隆明
爪を研ぎ倍返しだと鬼気せまる　光弘

遊び球投げて男の出方みる　正博
順順に出せば映えない日本食　隆彦
人の世を次々襲う一大事　正美
カード払い背中合わせのデメリット　ともこ
浮遊するプラスチックの罪深さ　孝代
咲くよりも蕾のままの君が好き　直樹
軽やかに春をまとって蝶となる　福子
絵手紙のかすれに温い友の筆　澄子
余生なお遊びはぐれた影法師　和子
つないだ輪万人すべてきずなあり　弘美
一人旅心おきなく憂さ晴らし　ゆき
おいという名ではないです私は　おくみ
賑わいを断たれ鳥居の長い影　三和子
不合格の電文でした「サクラチル」　淳司

川柳塔さかい（大阪）　内藤　憲彦報

春兆しマスク春色変えて見る　舞夢
退院が近いか夕陽美しい　俶子
全ボツの兆しか鉛筆が折れる　扶美代
四波の兆し分かっていてもする五輪　敏治
就職率アップに収束の兆し　八千代
戦争の兆しの見える尖閣島　光雄
ぴかぴかの心で君に逢いにゆく　志津子
ぴかぴかの暖簾コロナという試練　冨美子
生命とはこうも輝く新生児　ばっは
汗光るハートぴかぴかボランティア　満知子
ぴかぴかの春が来たから花が咲く　朝子
新妻も靴もピカピカだった朝　時雄

我慢しよう通天閣のまっ赤っ赤　憲彦
お揃いの背広が似合う入社式　さくら
頼り切る主治医も所詮他人様　五月
他人ごとの謝罪会見うまくなり　雅明
はやっています第三者委員会　勝弘
他人の目で見ると可愛いな夫　みつ江
言わんでもいい事耳うちする他人　輝子
他人やろ夫婦喧嘩に口出すな　としお
裕ちゃんはとても他人と思えない　いさお
明日からは他人が増える遺産分け　和夫
赤ちゃんにお乳与えるママの顔　堅坊
コロナに負けない四月のリクルート　美津子
拭きあげた窓にさしこむ日の光　敬子
明星が一際目立つ明日は晴れ　満作
ぴかぴかに磨けば心軽くなる　万紗子
心まで光らせたくて読む詩集　雅美
澄みとおる瞳にこころ洗われる　唯教
ひとり居の恋路を揺する猫じゃらし　みつこ
非戦誓うこの幸せを願いつつ　ゆみ子
平仮名の恋文僕を狙い打ち　蕉子
日影でも零れ種から根を下ろす　ひろ子
被害者の心いたぶるネット記事　憲
秘境目指し古道を行けば念仏寺　玄也

ブラザ川柳（大阪）　穂口　正子報

サロンパス貼って見上げる吉野山　正子
遊び無し自粛生活貯蓄増え　和代
さっぱりだ薬飲んでも楽ならず　景子

際限なく苦しめられる拉致家族　五月
登りつめ腰をおろして一望す　靖子
散るは桜薫るは梅のひとひねり　園子
散ってなお水面で錦桜花　政夫
お疲れさん散った桜に挙手をする　弘光
早逝の乙女の如し落ち椿　淳司
お水取り舞い散る火の粉春を呼ぶ　悦夫
咳き込めばまるで蜘蛛の子人が散る　克三
散り際の声を掛けたくなるサクラ　一彌
散り散りに避難それぞれの十年　清乃

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

病む母へ良心痛む嘘ひとつ　一瑤
痛い経験重ねただけは強くなる　凱柳
テント張り金具すぱっと嵌めて吉　一平
息子でも内緒ないしょの預金残　重忠
内緒なら言ってくれるな面倒な　弘六
ボケ気味のことはライバルには内緒　完司
五体より痛みが辛い心傷　美恵子
一度だけ父の拳骨よく利いた　たぬ
狸寝に気付かぬままによく喋る　菖子
内緒ないしょ噂広げる人の性　幸安
料亭の女将は聞かぬふりをする　敏子
吊橋の途中で泣いたのは内緒　茶子
耳痛い話になると呆気たふり　雅女
拳骨で道を正してくれた亡父　真理子
今日の痛み夕陽拝んで沈めます　振作
レジャーではないぞ難民テント村　彰夫

テントからはみ出てワクチン注射待ち　蟹郎
内緒ごと聞かされてから鬱になる　節子

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

きゃらぼくの木は心まで休ませる　日枝子
病んで知る幸せな日の有り難さ　紀の治
日めくりの説教ピアノ弾くように　宏之
名指し避けあのその騒ぐ烏合の衆　汪
日が暮れた犬の頭を撫でていて　雨奇
友達にストレス与え愚痴を言う　多美子
欠けてゆく月に我が身を重ねおり　恵子
水仙に誘われ春の八十路行く　治代
暗闇にふわっと匂う梅の花　瑞枝
春まじか心うきうき靴を履く　久直
悪事です手の鳴る方へ向く政治　宣子
会うたびに大丈夫よと言う娘　菜々
良妻で賢母で人が近づかぬ　令位子
神仏も五輪はきっと観たいはず　美穂
梅の花満開に咲き春を呼ぶ　博子
初夢は獏が残した福を見る　俊久
ズボン上げ気合いを入れてホックする　美緒

倉吉川柳会（鳥取）竹信　照彦報

生きてれば一生青春楽しいな　由紀子
わが世の春を謳歌してみたいもの　玲子
九十四歳春の小川で芹を摘む　重忠
春なのにコロナが全部邪魔をした　けいこ
春一番黄砂と花粉飛びまくる　智恵子
外出れば土筆によもぎ春ですね　道春
きついなあ国民年金蚊の涙　石花菜
古希を過ぎきつい言い方やわらいだ　恵子
通帳も余命もきつい見比べる　日出子
頓智からきつい言葉もほとばしる　紀美恵
きついなあこの残高で新年度　瑞子
コロナ下の満員電車きつい日々　明友
診断の結果知る間のきつい事　祐子
湯けむりにきつい手仕事癒えていく　茂夫
ゴキブリ君に慕われているらしい　完司
亡き人を慕い感謝も愚痴も言う　萩江
分度器で計れぬ思慕を抱いてる　宣子
陽を慕うひまわりの首よく回る　龍枝
雛飾り八十路の今も母を恋う　酔芙蓉
慕ってます顔見るたびに上手口　凱柳
突風に持って行かれた慕う方　節子
ハンカチを誰も拾ってくれません　麦青
子どもには分からぬように負けてやる　次男
若ければ態とハンカチ落とすのに　隆昌
淋しいからわざと大声出している　風露
出発をわざと遅らせ焦らしてる　大鮟
孫将棋態と負けたの最初だけ　野蒜
春の足打吹山へ駆け上がる　照彦

川柳ささやま（兵庫）北澤　稠民報

そのまさか癌のオペから二十年　(北)哲男
コロナ禍で一輪の花華璃花子ちゃん　稠民
春うらら天気晴朗金欠病　善輔
わが天下マスク不要の山仕事　剛
見せたいなあ孫の振袖亡き妻に　重男
野菜苗笑顔の太陽待ち遠しい　良子
朝八時告げる音楽心地よい　照代
貧しくも友達が居た痩せガエル　(長)哲夫
美しい令和にまさかコロナとは　美智子
オルガンで習った歌は昭和だなあ　智恵子

川柳茶ばしら（愛知）金子美千代報

シリコンは要らぬと言って五十年　雅美
信仰はないが正月は神社へ　まみ子
神士には赤いベレーが良く似合う　三樹夫
満開の桜に生命励まされ　かつ子
帽子からハトの出る手はもう古い　遡行
生真面目に自粛気がかりなフレイル　美千代

川柳ふうもん吟社（鳥取）山下　凱柳報

失礼は承知正論戦わす　月満
高ければ高いほどよい地位と金　美恵子
頭から離れようとはしないフケ　利昭
春来たと暦の中に入り込み　不二子
お隣のサクラさかなに一人酒　一平
肩書に嫌々頭下げている　蝮蛄
高価なる健康器具にだまされる　初恵
血圧はこんなもんさと高笑い　春雄
背比べ大黒柱また負けた　静夫
孫の鼻クレオパトラも腰抜かす　回春子
取り敢えずしょう油を掛けて食べる夫　みつ子

失礼を承知で苦言一つ言う　紫陽
後悔の言葉失礼消せぬ溝　厚子
老いは老い自分許してまた進む　千代
失礼な言葉は好きの裏返し　茶人
失礼ともいわず猪食い荒らす　栄策
最大の敵は心の弱い虫　毅
綺麗だね最大級の誉め言葉　勲章
最大は地震の後の津波かな　貴恵
最大と最小当たる大相撲　虎尾
最大のドラマ八月十五日　重忠
最大の快挙を成した宇宙船　敏夫
これ以上跳んだら足を挫いちゃう　蟹郎
行く道だ老害だとは腑に落ちぬ　天翔
失敗が無くて進歩も有りません　秋月
人間は失敗しても頑張れる　節子
早桜怖いコロナ禍忘れさせ　大
散り際の美学桜を見習おう　宏章
バッシング覚悟で高い樹をゆする　一瑤
失礼のない独り言です気が晴れる　拓治
お喋りな雀樽を倍に盛る　八千代
最大の力を秘めている白紙　天遊
最大のミス防げなかった二次大戦　金祥
最大のマジック宙に浮く地球　無限
最大の誤算妻との出会いかも　凱柳

城北川柳会（大阪）　近藤正報

泡のよな我が人生にドラマあり　杈香
ええやんと誉めて母親児を育て　野鶴

金ちから無いええやん心あたたかい　賢子
コロナ禍にまあええやんか生きてたら　峰子
泡と消えせつない恋の人魚姫　榮子
ゴール間近ああ伸び切ったゴムの紐　郁夫
遠花火耳にしながらカップメン　堅坊
価値観の違いええやんそれも良い　千恵子
挑発の視線を受けて散る花火　満洲夫
黄砂から届くウイグル族の悲鳴　博
おたがいに切磋琢磨をする火花　朝子
ライバルは鏡の中でほくそ笑む　弘委智
ブツブツと鍋も呟く自粛酒　美砂子
飴一つで笑顔の社交ええやんか　福貴子
火花飛ぶ想定外の辺りから　万紗子
呟きの中に隠れている本音　満知子
呟いて自分の阿呆さ確かめる　捷二
呟きが束になったら風になる　一歩
私ちゃう呟くだけで出ない声　繁子
クシャミ3回隣の席が空きました　かずお
生きてきた証しええやん染みと皺　星雨
愚痴言わぬ妻の呟き気にかかる　信子
呟きもとても大事な制御盤　義明
ぼそぼそと何時も呟く隅の席　五月
ありがとう呟く言葉ありがとう　ルイ子
もええええねん十分生きて恋もした　廣光
育成で採った選手が大化けし　洋志
赤い服着てもええやんまだ卒寿　志華子
手土産は地酒ええやんええ人や　宏造
嬉しい日ええやんと飲む休肝日　利子

倦怠期こころ模様に火花散る　宣子
コロナ禍に負けぬ校歌の甲子園　黒兎
照ノ富士奈落の底から這いあがる　満作
阪神が負けるとガラが悪くなる　久美子
フルムーン自粛の波の泡と消え　俊雄

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

オーケストラ眠気を覚ますエンディング　洋二
大法螺は吹くが楽器はまるでだめ　律雄
ネコ踏んで以来眠っているピアノ　万彩
わくわくとブラスバンドの甲子園　大輔
泣くという楽器持ってる赤ん坊　保州
吹くほどに郷愁をよぶハーモニカ　ふさゑ
クラリネット恋しい人の胸に抱く　和子
廃校のオルガン風の鳴らしてる　みつ江
今宵またバンドネオンが啜り泣く　珠子
前歴が幅を利かせる天下り　日出男
最前の話が古くなる時代　義泰
少し前やっていたこと記憶ない　常男
前へ進む民主の波は止められず　一歩
先頭に出たのは耳が遠いだけ　恭子
前よりも若がえったねうれしいな　規予子
リフォームの前かけ母さんが匂う　理恵
好奇心最前列へ潜り込む　昌代
昔主食今スイーツのさつま芋　和美
クリームとあんこで家庭内バトル　万彩
満腹の後もスイーツならと食べ　玄也
善哉に小豆持ちよる老人会　はこべ

パティシエの道全然甘くないらしい　楓　楽
酒呑みでスイーツ好きの二刀流　いさお
その昔スイーツほめたのが仇に　ダン吉
カロリー計算二回に分ける桜餅　眞　澄
スイーツの数だけ妻の笑いジワ　恵　子
サトウキビスイーツだった固かった　信　二
スイーツのビュッフェ私は蝶になる　香　代
引き返す勇気は前向きと思う　扶美代
ともかくも育ってくれて人の親　穏　夫
カステラを食べて介護の疲れとる　睦　子
10年も前の悔しさ思い出す　信　子
オカリナの音前世の記憶呼び覚ます　秀　夫
スイーツをまずはスマホが味見する　憲　彦
ライバルが育ててくれた好奇心　ひろ子

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

無力ですペットボトルのフタ開かず　秀　夫
へそくりが消えてるさてはと首ひねる　よしこ
ひねっても空っぽでした知恵袋　夕　胡
学術をひねる政治の指紋跡　八　茶
腰ひねりセンター譲る文化祭　精　子
若い子といれば私は見切り品　知　香
情け無いひねった腰に貼る湿布　節　子
落款の朱肉が踊る年賀状　晶　子
酒池肉林真っ只中に居る孤独　保　州
認めてくれるまでネジを巻いている　小　雪
晩学もひねりはじめて今詩人　徑　子
ジム通い贅肉へらし健康美　タカ子

肉襦袢着ているように脂肪つき　紀　子
置き忘れへ頭をひねり巻き戻す　ほのか
肉親の助けを借りて老いの坂　光
もがくほどタイヤも嵌る泥の道　日出男
どっぷりと裏も表も知り尽くす　寿　子
シャワーよりどっぷり湯舟のんびりと　繁　子
どっぷりとあなた好みに染められる　冨美子
ゆず風呂にどっぷりつかり春を待つ　よしこ
どっぷりと利権に浸かり天下り　和　弘
いいわけをどっぷり聞くも処世術　悦　男
ハアーっと体が叫ぶ風呂の中　佳　子
アホやなあ苦肉の策を笑われる　大　輔

はびきの市民川柳会（大阪）藤原　大子報

酒のあて水茄子あれば御の字だ　洋　一
侘び寂びの後味わかるのが和食　冬のト
言い負かし少し淋しくなっている　ダン吉
行列の店だがもう一つだった　勝　弘
後味はさっぱりが良い梅茶づけ　大　子
後人の後味悪い選び方　正　義
腹立てて呑んだお酒はにがいだけ　千鶴子
物言いですっきりしない勝ち名乗り　いさお
思い出す後味やわらかな握手　理　恵
後味はまだまだ青い三代目　ゆみ子
あと味を楽しむ前に歯を磨く　扶美代
後味は悪かろうとも筋曲げず　久仁雄
恩返し後味のよいお粥炊く　瑠美子
孫達のもてなし料理頬緩む　ひとみ

気が緩むはずじゃないのにこけている　かつ美
接待の気の緩みからドン底へ　一　文
上司代り緩んだ紐を締め直す　久仁子
ちらほらの桜だよりに気が緩む　さくら
風が緩んでワーッと蕾綻びぬ　美代子
政権の驕りが緩み生みつづけ　専　平
気の緩みのニッチ狙っている詐欺師　こみつ
ひれ酒がゆるめてくれる固い脳　楓　楽
食べる気満満緩めの服で箸を持つ　ちづる
緩めたりつかんだりして生きてきた　フ　ジ
ネジ一本ゆるんで喋り止まらない　宏　造
心身のネジしめ直す八十路坂　みつこ
勝ち見えたとたんに脇が甘くなる　一　歩
涙腺ゆるむこんな事でと娘が笑う　シルク

南大阪川柳会　松岡　篤報

はしゃぎすぎ出しゃばりすぎは嫌いやな　勝　弘
異性から見舞いの手紙気がはしゃぐ　一　歩
孫が来る特上の肉きっと出る　憲　彦
わけもなくはしゃぎたくなる三分咲き　楓　楽
けったいな男が目立つこの五輪　国　和
奇人変人けったいな友ばかり　亜　成
間違いか流行りか靴の色違い　東　風
けったいな知らんおばちゃん飴くれた　いさお
まずご飯あとでビールを出されても　博
けったいな夫花など買ってきて　シマ子
ストレスもこだわりも皆丸洗い　ひさ乃
また行くわ言うて三年来ない人　よしみ

境界をきっぱり付けるバラの棘　志華子
家裁出て腐れ縁断ち右ひだり　敏治
コラボする異色が醸すいい空気　大子
春風や十人十色の衣替え　柳伸
びっくりや刑事になったあの悪が　ばっは
スマホより文庫本読む稀な人　篤
頑張ってる医療従事者ありがとう　ルイ子
ホームレスやったと医者が言うのです　あや子
なおみさん異色のトーク胸を打つ　満作
わからぬものは異色なものと切って捨て　昌紀
風などは全く読まぬ人らしい　ダン吉
コロナ禍を知らぬ遺影に初桜　弘子
帰宅のペダル背中の風に感謝する　弘委智
役に立つ事を覚えた好い笑顔　柳石子
なんとなく髪梳く度に若返る　峰子
コロナ禍もサクラは時を失わず　俊雄
八十路にも明日と言う日の夢がある　通江
嘘つかぬたっぷりかいた汗ならば　克己

富柳会（大阪）　山野　寿之報

幸せになろう繋いだ手が温い　恵
故郷をそっとしまって放浪記　武人
寅さんの放浪先にある祭り　寿之
さまようて何処へ着くのか流し雛　和子
さすらいの旅で出合えた人情味　高鶯
人生は紆余曲折の迷い道　壽峰
定年後着のみ着のまま独居する　一文
地球儀を消毒剤で拭く祈り　澄子
桜降るもう深読みはおしまいに　かこ

てのひらに浪速を載せている琵琶湖　欣之
妻植えた八重の桜がやっと咲く　清
汚された土にも春は花咲かす　文重
しがらみを一切捨てる切れた凧　きみ子
古の街道巡るふらり旅　由夏
花吹雪私の毒が消えてゆく　よしみ
休眠打破あなたの愛が眩しくて　あかり
下駄ばきの絵筆は気まま西ひがし　正治
さそり座の妻は口から毒を吐く　常男
重いはず貧乏神がのしかかる　隆充
春が来てひと雨ごとに青もみじ　正義
他人よりまず我が妻を取り去ろう　優
玉子焼単身赴任で星三つ　きよみ
韓流が中毒になる自粛中　良恵
売り切れと聞いたら余計に欲しくなる　章子
窮地に立ち知った世間の情無情　圭
冬空に托鉢僧の尺の音　つよし

川柳塔打吹（鳥取）　斉尾くにこ報

あさっての方へ桂馬を打って負け　玲坊
あさっては休み洗濯どっさりこ　悦子
いやな人あさって向いて知らぬ顔　紀子
すべきこと横着気まま明後日　清
あさっての方角探す虫眼鏡　重忠
あさっても生きていますと書く日記　滋
春の闇しつこくかかる魔の電話　節子
耳遠くしつこく聞いて怒鳴り出す　たけ代
身の内の水が今だに漏れている　宣子
しつこさが勝利を招く方程式　岳人

しつこいと嫌われるかもかたつむり　久江
緊張をすればするほど顔笑う　義人
免疫力高めてくれる大笑い　完司
酒飲んで笑える内に切り上げる　陽之助
降り注げ花のほほ笑み被災地へ　裕子
春の風猫も杓子も笑い出す　石花菜
ワクチンを打ってコロナを笑わせる　照彦
太陽が春の笑いを出ししぶる　美知江
身を粉にして笑う日を待っている　芳光
寝そべって椅子で洗髪楽ちんだ　久芽代
参加する意志の表れ前の椅子　富隆
車椅子亡夫を乗せて桜土手　貴恵
我が家にもそれなりにある指定席　龍枝
禅譲の椅子へ花束出来レース　重利
ドクターが来るまで椅子で回ってる　野蒜
駅の椅子見知らぬ人と仲良しに　紀美恵
国会の椅子は寝ごこち良さそうだ　三津子
好きだよと言うから椅子が軋みだす　美ッ千
生き生きと走る電動車椅子　紀の治
今はもう豊かな時を過ごす椅子　くにこ

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

人間が地球の資源食い荒らす　敏照
手招きをする和菓子屋の桜餅　宏枝
杖を手にしても逢いたい春彼岸　起世子
飢餓の子が瞼に浮かぶ食べ残し　昇
マイコンの豊富なお湯に恵まれる　まき
知恵袋喜怒哀楽を食べ尽くす　当代
ばくばくと時間を食べる立ち話　八重子

今日もまた孫の描く絵は夢自在　准一
菓子箱の底の小判で食あたり　保州
草を食む兎の耳は立ったまま　和子
仕舞風呂やっと私のお湯になる　智三
試されているのか見えぬ目的地　富香
食べるのに働いて来た日々の糧　昭枝
マスクした女性は全て美女に見え　一雄
夢ばかり食べて凡人雲を追う　碧
オリオンも昴も覗く露天風呂　日出男
乾涸びた心も蘇生する湯船　純子
おかわりに笑みがこぼれる介護の手　菜摘
まだ生きるしっかり恥を掻きながら　ひろ子
さざんか散華おんな主は病んでいる　理恵
父さんに逢えただろうか母の星　幹子
まだ見えぬ時代の先を追ってみる　美枝子
未完成だから人間磨きする　明子
米櫃に入れる家族の泣き笑い　あき子
湯加減はいかがと嫁の老いの風呂　みつ江
夫婦喧嘩まだ指している千日手　義泰
ごくろうさん今日一日を癒す風呂　和美
まだ生きたい明日も小さな欲抱いて　悦男
手料理を知らぬ不幸な子が切れる　眞智子
どちらかといえば選ばれた私　知香
すべきことまだあることが生きる糧　彦弘
自粛中もう居酒屋はゆめの園　よしこ
湯かげんを問うた昭和は遠くなり　満喜子
古希などはまだ若造と過疎の村　康則
空っぽの弁当箱を洗う幸　千鶴

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

不摂生 我が身あちこち音がする　隆樹
お一人様ががたがたさせる風も友　初枝
一言で愛の牙城が崩れゆく　則彦
ガタガタと減っております骨密度　のぶよし
夢の底で巻き戻してる青春譜　黙人
おひなさまあこがれ続く夢続く　真由美
お茶お華で乗るはずだった玉の輿　柳子
いにしえの雅にしばしひな飾り　ふさゑ
捩花が素直に捩れてる安堵　劦
玉の汗紡いで君を射た指輪　きよし
賞味期限過ぎた匂いでまだ青い　花峯
眉だけは優雅に描き化けまする　孝子
読み書きは楽しい日課で止められぬ　京子
鉢巻よお前は日本人だよな　重虎
鉢巻きをきりりと締めて待つ朝日　霜石
ねじり鉢巻気合を入れる夫の家事　洋子
自家用車がたが来てます新車乞い　一呑
箏曲のみやびな調べ春の海　風来坊
鉢巻の三島由紀夫の五十年　和香子
十年の節目 三陸まだ揺れる　慕情
雅楽の音大和ごころにたち返る　美鈴
日本の雅を背負う団十郎　規子
ボランティア未だ鉢巻き外せない　ひとし
鉢巻きの似合う貴方に汗しとど　吹喜
鉢巻を締めて反核デモの中　龍馬
鉢巻きで漁師カードのポーズとる　ひろ
汗流し植えたトマトが赤く熟れ　呑舟
出初式鉢巻似あう若衆が　友二
二人三脚親子の絆強くする　英子
ひと休み午後の紅茶と源氏パイ　ちづ子

竹原川柳会（広島）　古田比呂子報

ふるさとに心許せる坂がある　鬼焼
ふるさとに心許した友が居る　節夫
帰るとこあるんだふるさとのカラス　笑子
ポッンと一軒家古里はあの辺り　幸子
ひと時を朝日背に受け草むしり　慶子
アラームに急かされ朝がやって来る　淑子
よく耐えたあの時その時忍一字　節生
甘い夢見ていた時の後遺症　敬子
神に聞く私の時間いくらある　輝恵
たっぷりと時間はあった筈ですが　蘭幸
逃げていく時をただただ追いかける　夢香
農繁期終え緩る緩ると船の旅　弘子
終着駅は亡夫旅を続けます　比呂子
鉛筆と広いこの世の旅をする　栄香
本当のわたしになれる旅の宿　昭紀
古書店をめぐる楽しみ春の旅　宣之
一文字を足す印象も変わった句　歩美
後期高齢ふんわりと生きたいな　厚子
月一度いつものコース医者通い　初音
夢の中亡母の髪を染めていた　貞子
曲線美描きたくなった猫ポーズ　千代美
春だからおしゃれスカートふんわりと　史子
おひなさまだいまちいさいこえでいう　五歳　ちか

大山滝句座（鳥取）　**新家　完司　報**

どん底で笑えとプライドが叱る　くにこ
叱るなどしない高価なボチだから　みちを
有刺鉄線何度も触れて今を行く　寿　代
叱りつけた子供に今は叱られる　ゆたか
人間の舌は平気で人を刺す　芳　光
マスクした美女の瞳がボクを刺す　照　彦
里イモが刺せずに燃え上がる闘志　芳　山
悪妻を棚にあげ夫を叱る　楓　花
誤算ではないぞ阪神タイガース　紀の治
刺さったままの青春の傷痛みだす　八千代
川柳会奇人変人捻じれもん　石花菜
「しゃんとせい」とぼけた自分叱咤する　幸　子
駐車場が増えて町並が変わり　富　隆
叱られて結んだ口が曲がってく　順　子
神さまの誤算飲めない子が生まれ　雄　太
長生きは予想を超えた大誤算　余　光
生き方を酒徳利に叱られる　麦　青
おせっかい手出し口出し叱られる　由紀子
羽田まで行って中止のハワイ旅　風　露
変えられぬ他人自分を変えている　美ツ千
三本の矢刺さった場所を見た人無し　仁
見積りの誤算床下抜けちやった　小　鹿
稲妻が串刺しをした伯耆富士　重　忠
政治家を叱りつけますこの一票　道　唱
奢りだとお礼を言うと請求書　久　子
官僚は記憶を失くすプロ集団　清　明
誤算だったが結婚続く五十年　希楽良
叱り過ぎ家を出た子の後を追う　コスモス
欠点がなくて人から嫌われる　規　雄
脇腹をハングル文字が刺しに来る　完　司

川柳藤井寺（大阪）（前月分）**鈴木いさお報**

汚染水タンクが悲鳴あげている　一　歩
腹を決めこの一石に賭けてみる　ダン吉
一流のシェフが忘れぬ母の味　扶美代
一流といわれて更に深い辞儀　みつこ
一流の証文春に狙われる　ゆみ子
一流の技術羽ばたく町工場　大　子
一流のヘルパーさんの声まるし　シマ子
一流のひとりより一万人の第九　久仁雄
そうですよ経済よりも命です　勝　弘
嗚呼春よ祝儀袋が忙しい　美代子
母さんのポロポロこぼれゆく記憶　みつ江
待ったなし外科医即座に切ると言う　ひろ子
さあ試験開始のベルが鳴り響く　かずお
夫逝き悲しみよりも孫双子　喜代子
四季の花咲く自然には待ったなし　瑠美子
一流の証だ勝ってなお謙虚　いさお

第72回　一朶の雲
まつやま川柳誌上大会

募集期間　5月10日(月)～6月30日(水)
（当日消印有効）

宿題・選者　（各題2句・共選）
「ファッション」　くんじろう選　田中　なお選
「もやもや」　赤松ますみ選　藤岡　健次選
「残　　る」　広瀬ちえみ選　栗田　忠士選
「角　　度」　高瀬　霜石選　大葉美千代選
二次選者　塩見草映　高畑俊正　柏原秀一
仙波草苑　村山浩吉　柳田かおる

投句方法　未発表作品・応募句のほかに、雑詠一句
所定の用紙　（コピー可）を使用し、参加費と共に下記まで。

送付先　〒791-0212
愛媛県東温市窪1976―17
野口三代子方
「第72回　一朶の雲
まつやま川柳誌上大会」係あて

参加費　1000円（切手不可　発表誌呈）
問合せ先　大前尚道（電話089－952－6774）
主催　川柳まつやま吟社

柳界展望

★「第23回全日本川柳誌上大会」、参加者1346人。同人成績。

NHK会長賞

笹重　耕三

核の傘ひろげたおめでたい平和

秀　句　高瀬　霜石

本日も36度5分である

秀　句　谷口　修平

天国の切符ドナーに贈りたい

秀　句　内藤　憲彦

復興へご褒美マー君の復帰

★中日川柳「第20回時事川柳誌上大会」、参加者329名。同人成績。

特　選　谷口　修平

マスクした人しか知らぬ0歳児

▽**柳界動向**△

○「茶ばしら」役員交代。会長　金子美千代さん

▽**訂正とお詫び**△

○5月号　P97下段3行目。入江晴菜さんの句。飾→飯。

▽**新誌友紹介**△

広島市　**羽城　裕子**
紹介者　小島　蘭幸

宮崎県　**惠利　菊江**
紹介者　小島　蘭幸

大阪市　**阪井　恵子**
紹介者　平井美智子

高石市　**堀江　節子**

句会部よりお知らせ

川柳塔本社7月路郎忌句会は、下記の要領で誌上句会といたします。皆さまのご投句をお待ちしております。

記

『川柳塔』6月号に投句用紙を同封します。
(未読の方は川柳塔社事務所までご請求ください。)
投句締切　6月30日（水）消印有効
入選発表　『川柳塔』令和3年9月号
投句料　1000円（切手不可）

兼題「うるおう」	糀谷　和郎　選	（兵庫県）
兼題「　嘘　」	金子美千代　選	（愛知県）
兼題「生きる」	村上　玄也　選	（大阪府）
兼題「うかうか」	西　美和子　選	（番傘川柳本社）
兼題「無　理」	小島　蘭幸　選	（広島県）

（各題2句出し）

問い合わせ・送り先

〒543－0052　大阪市天王寺区大道1－14－17
花野ビル201　川柳塔社
TEL 06-6779-3490

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 たちばな	18日(金) 13時45分締切 席題・男・渡る・自由吟	立花北生涯学習プラザ 尼崎市塚口町3-39-7 TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5 藤井宏造
岸和田 川柳会	19日(土) 14時締切 窓・吊る・大袈裟・ストレス	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ徒歩5分 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19 中岡香代
川柳塔 みちのく	19日(土) 17時締切 傘・おおらか・東	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	投句句会 締切25日(金) 入れ知恵・飼う・拗ねる 出駄ら目・自由吟	〒572-0063 寝屋川市春日町9－9 高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日) 14時締切 つくづく・置く・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303 鈴木いさお
南大阪 川柳会	21日(月) 14時締切 ざわざわ・罪・疑う・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901 松岡 篤
豊中 もくせい 川柳会	21日(月) 13時50分締切 簡単・唸る・きっぱり・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26 初代正彦
川柳塔 すみよし	26日(土) 14時締切 色・増える・マンネリ	住吉区役所内 住吉公民館 2F 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山 三幸 川柳会	26日(土) 13時15分締切 信じる・時計・父 投句締切17日	和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民 川柳会	27日(日) 14時締切 中心・甘い・ぽつぽつ・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	27日(日) 13時から 自由吟・等しい・割る・同意 席題	県民ふれあい会館 4F 鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3 中村金祥
川柳 さんだ	投句句会 4日(金)締切 要求・貧しい・ユニフォーム 楽しむ・自由吟	投句先 〒651-1545 神戸市北区鹿の子台南町4－46－5 冨永恭子
川柳塔 なら	5月末日投句締め切りました 恐縮・なかなか・茶化す	連絡先 〒636-0341 磯城郡田原本町薬王寺150－21 中堀 優

★「緊急非常事態宣言」後、各地句会の変更が予想されますのでご承知ください。

6月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	投句句会　5日(土) 締切 蚊・気づく・おせっかい・堂堂 自由吟	〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川柳とんだばやし富柳会	5日(土) 14時締切 刃・カード	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ 200 m 〒584-0064　富田林市不動ヶ丘8－31　山野寿之
倉吉川柳会	5日(土) 14時締切 どんより・沸かす・捩る・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔まつえ吟社	5日(土) 13時30分締切 旗・余る・甘い・ノート	投句先 〒690-1233 松江市美穂関町笠浦221－1　相見柳歩
ほたる川柳同好会	8日(火) 13時30分締切 家族・乗る・ほっこり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔さかい	8日(火)投句締切 そろそろ・謎・跳ねる 折句：ま・つ・え	投句句会に変更
川柳あまがさき	8日(火) 14時締切 跳ねる・香水・いきいき・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
六甲川柳会	10日(木) 誌上句会 シール・噛む・ぼんやり うとましい・自由吟	六甲道勤労市民センター　5階 E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
あかつき川柳会	11日(金) 14時締切 まさか・輪・洗濯・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3－6　木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳大阪	投句句会　締切15日(日) ギリギリ・水・祝う	〒636-0144 奈良県斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川柳塔打吹	12日(土) 13時30分締切 話・響く・さっぱり・席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民川柳会	13日(日) 14時締切 白夜・あしからず・渡る・雑詠	八尾市安中町3－5－1　渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔わかやま吟社	13日(日) 14時10分締切 兼　題＝迎える・玉・曖昧 課題吟＝位	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁36 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口川柳会	投句句会　締切12日(土) 我慢・洗う・ガラス・ぶらぶら 自由吟	〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830　福田正彦

編集後記

★滝の白　雨は斜めに降りかわり　薫風

★もう時効だから良いだろう。「女性コーナー茴香の花」という欄は当時少なかった女性川柳人のために、西尾栞主幹が創設されたものでした。平成3年ごろの話。選者は小出智子先生。私は仕事を言い訳にして川柳塔欄（当時は10句）には投句もせず、僅かに「茴香の花」へ3句投句するのがやっとという新米同人でした。当時は智子先生のご自宅に直接投句しましたが、ときどき先生からお葉書を戴きました。「今月まだ投句がないけれど2　3日待ちます。投句してくださいね」

★ある朝、智子先生からお電話がありました。「朱夏さん、今月の投句…」そこまでお聞きして私はピンときました。「採れないことはないけれど、これが（茴香の花欄に）載ったら朱夏さん恥ずかしいでしょう」と静かに仰いました。「先生、落としてください！」私は叫んでいました。心当たりがありました。締め切り間際に雑記帳に書き殴った作品から寄せ集めて投句したものでした。一句でも採って頂きたい時期でしたが、先生のお言葉は私のプライドにやわらかく突き刺さりました。

★創設当初「茴香の花」の選者は、八木千代先生と智子先生の一年交代でした。八木千代先生を華やかな友禅とすれば、智子先生は大島紬の風情。句風が全く異なりました。毎月の投句に向き合いながら、先生はお一人お一人と対話されていたのでしょう。女性川柳人を育てたいとの栞主幹の願いは見事に結実して、多くの女性川柳人が育てられました。「茴香の花賞」も創設され、後に私も受賞しました。

★「川柳の話」を発行されている新進気鋭の月波与生さんに『蕗の薹』鑑賞をお願いしました。「川柳塔のお母さん」智子先生を偲ぶ6月、とりどりの紫陽花が涙に滲みます。（朱夏）

△今年の令和柳多留第二集に「もう一度、定型」の大西泰世氏のエッセイが掲載されている。本誌の印象吟選者をして頂いている好から、一部を抜粋させて頂きます。

△『個々の作家によって考え方はそれぞれ違うだろうけれども、川柳は定型詩であるという基本に立てば自ずと答えは出て来るのではないだろうか。一七音を支える大切な要素としての「リズム」を思う時、中八、中六の一句では、それを支え切れるはずもない。どうしても八音のコトバが必要であるなら8・9あるいは9・8の形式を用いることだって出来る。しかしリズムが犠牲になるのは否めない。そのような犠牲を払ってまで使うべき八音であれば別だが、大抵は他のコトバに置き換えれば事足りる場合が多い。』と述べられている。

△また、「い抜き言葉」は文芸に於いては相応しくないと書いておられる。

△私自身、納得と深い反省をさせられました。また定型は校正編集作業が助かるなとも思いました。（憲彦）

ひとこと

ダイヤモンド婚を迎えて

令和3年3月9日、私たちは結婚60年ダイヤモンド婚を迎えました。長かったような短かったような60年したが、その半分近い歳月を川柳塔社誌友・同人として諸先輩方のご指導を仰ぎながら、勉強させて頂きました。

積極的に川柳塔まつりをはじめ、地元の川柳大会その他、多くの大会にも夫婦で参加、充実した人生を送ることができました。厚くお礼を申し上げます。ダイヤモンド婚の次のプラチナ婚70年を目指して、川柳を友として夫婦として励みたいと思います。

コロナ感染症拡大により、川柳塔まつりも誌上大会に変更され、仲間の皆さんにお目にかかれなくなったことを寂しく思っています。それでも川柳塔誌が一度も欠かすことなく手元に届くことに、関係者の皆様に感謝申し上げます。

（岸本　宏章
岸本　孝子）

お知らせ

本社7月7日（水）開催予定の路郎忌句会は中止と決定、誌上句会として開催致します。詳細は109頁をご参照ください。

ようやくワクチン接種という希望の光が見えてきましたが、油断することなく、三密を避け、マスク、消毒、換気の基本を守り、身の安全を図りましょう。

作品募集

8月号発表（6月15日締切）

川柳塔（8句）小島蘭幸選
水煙抄（8句）西出楓楽選
愛染帖（2句）新家完司選
檸檬抄「縫う」（2句）石橋芳山・古今堂蕉子共選
インスピレーション・ナビ（2句）大西泰世選
「声」稲見則彦選
一路集（2句）「引く」倉益一瑶選
初歩教室「ボタン」（3句）髙瀬霜石担当
初歩教室「ボタン」は9月号発表

9月号
檸檬抄「漂う」
一路集「受ける」「ガード」
初歩教室「匂う」

本社7月句会は誌上句会です
詳細は川柳塔6月号109頁ご参照
投句締切日6月30日、発表9月号
兼題「うるおう」「嘘」「生きる」「うかうか」「無理」

川柳塔柳箋

3冊　送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

定価 八百円（送料100円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）

二〇二一年（令和三年）六月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
発行所 川柳塔社
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七 花野ビル201号室
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替 〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。

美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800―3018
FAX（06）4800―3028
Eメール bikenart@ea.mbn.or.jp
ホームページ https://www.bikenart.com

令和三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一二九号　川柳塔　六月号
定価　八百円（送料　百円）

オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

『歯を含むお口の中を一生守っていく場所』としての歯科医院
『痛くなく、怖くなく、通院が苦にならない』と思えるクリニックの実現

海岸通デンタルクリニック
KAIGANDORI DENTAL CLINIC

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
9：00～13：00	○	○	○	—	○	9:00～17:00	—
14：30～20：00	○	○	○	—	○		—

診療科目
・歯科　・歯科口腔外科　・小児歯科
・予防歯科　・審美歯科
・インプラント　・ホワイトニング

〒651-0073　神戸市中央区脇浜海岸通２－２－３
HAT神戸メディカルモール３F（１Fケーズデンキ）
TEL.078-261-3300
www.hat-dental.com

雑誌 05703－6